弾丸と幻想郷

紀璃人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
弾丸と幻想郷

【Ｎコード】
Ｎ０１６０Ｕ

【作者名】
紀璃人

【あらすじ】
今回、なんと！
初の、紀璃人史上初の！
オリキャラです。しかも初の男子キャラです。

しかも今回
「かけるまで書く」という初めての書き方だったりします。
この先この作品はどう育っていくのか！？
はたまた育たないのか！？↑

生温かい目で見守っていてくださいｗｗｗ

第一章（プロローグ）　傭兵とスキマ（前書き）

主人公
「これが俺の日常だ。文句あるか？」

第一章（プロローグ）　傭兵とスキマ

イラクのとある町にて、ロシア軍とイラク政府軍の戦闘がおこなわれようとしていた。その政府軍の中にはフランスからきた傭兵を名乗る”子供達”と―、二人の日本人傭兵が混ざっているようだった――。

俺は村島秀。フリーの傭兵をやっている。まぁ、相棒が今さっきまでいたが敵に別動隊の準備が有るらしく、一人で潰しに行った。あいつならあっという間だろう。

三脚を立て、匍匐の姿勢からスコープを覗く。十字の中に敵の姿が映る。今回のターゲットは敵陣の前線の指揮官である。何人か工作員を仕込んだものの手が出せない腑抜け共ばかりだったので俺に御鉢が回ってきた、というわけである。正直こんな仕事を外部の人間たる傭兵の俺に任せる時点で間違ってる気もするが。

今回の作戦は俺が指揮官を狙撃。トップを失って生まれた動揺に乗じて制圧するものだそうだ。しかしその制圧部隊もハイディングが全くなってない。お前ら素人か。そんな岩場から身体を半分も出して相手の様子をうかがう馬鹿がどこの軍にいるってんだよ。

俺はそいつらへの愚痴を一旦置いておき仕事に専念することにした。十字を中央にそいつの心臓を捉える、体中がすぅっと冷えて鼓動も息さえも排除する。そうして開戦を告げる一撃をやつの心臓にねじ込んだ―。

案の定敵は混乱し制圧は楽…だったんだが、なにせ制圧部隊があの無能共である。時間が掛ってしょうがなかった。なので敵の指令

室の籠ってやがる前線上層部のやつを全員打ち抜いといた。一人知った顔がいたがそんな事はしらん。どうせ無能共の端くれだ。
「お疲れ、シュウ」
「あぁ、あくびが出るほど楽だった…と言いたいが」
「大変だったか？」
「いや、制圧部隊が無能すぎて腹が立ってな。あくびの代わりにため息がでた」
「なるほどね、確かにあいつらは素人の動きだった」
こいつはリョウ。波佐間峻だ。こいつはアサルトを持たせたら対人戦だったらだいたい１０分で終わる。まぁ、敵の量にもよるが。こいつは俺の相棒にあたる。
ちなみにあの無能部隊が制圧に成功したのはこいつが増援に入ったからだ。俺たちはクライアントに挨拶をすませ、報酬を受け取ってから帰投した。
その道すがら。車を走らせながら隣町の作戦本部に向かう。この後はまた別動隊としての任務があるのでリョウを本部に送り届けてから配置に向かう。今回は俺はフォワードなのでアサルト、ハンドガン等の潜入型前衛装備になっている。今度は毎度のお得意さんでかなり良い動きをしている…んだがなにせ１５人しかいない。なので俺らもしょっちゅう呼ばれる訳だ。

俺は配置に向かいながらとてつもない違和感を感じていた。トンネルが長すぎるのだ。俺はこの「全長６００メートルの」トンネルを飛ばしていて、かれこれ既に「３時間は」走らせている。ガス欠がいつ起きてもおかしくない状態だ。そして１５分ほど走ってついに燃料が切れた。前も後ろも光はなく、漆黒の闇が続いている。その時、人の気配をすぐ後ろに感じた。俺は素早く振り返り改造したハンドガンを突き付けた。そこにいたのはウェーブのかかった金髪でいかにも胡散臭い女だった…。

「ねぇ、トンネルから出たい？」
「もちろんだ。仕事に支障をきたしている。これはおまえの仕業か？」
「そうねトンネルの入口と出口を結合させてもらったわ。つまり今ここは輪っかになってる感じかしら」
ソイツは人差し指をピンと立て、くるりと輪を描きながらそう告げた。
なにを言ってるんだ？こいつは。
「とりあえず、ここから出すわね」
そう言うと彼女はスキマを広げてそこにシュウを突き飛ばした。
「大丈夫、幻想郷は全てを受け入れるから」
幻想郷…？まさかな…。でも今のはたしか、八雲――。
そんな事を考えながらスキマへと落ちていった。

第一章（プロローグ）　傭兵とスキマ（後書き）

違う！違うんだ！
シュウはこんなキャラじゃないんだ！
ただ、戦争の所為で荒れてるだけなんだ！
幻想郷では本来のシュウがみられると思います。

こんな感じでやっていきます。定期更新は出来ないかもですが。

ゆっくり見守っていってね！

第二章　傭兵と過去（前書き）

いきなりですが彼の過去のお話を。

第二章　傭兵と過去

俺はスキマに落ちていきながらある事を考えていた。

これは過去の記憶。４～５年ほど前のこと。まだ日本が、いや。世界が平和だったころの記憶。俺はその頃１６歳で所謂オタクだった。趣味はネットとゲーム。メタギアやらラノベやらにハマっていた。リョウは東方なるものにハマっていて話を延々と聞かされたことがある。その影響で少し齧ったがあまり長続きはしなかった。あとはモデルガンでのサバイバルゲームなんかもやってた。

そんな平和な暮らしをしていた時、戦争は起こった。理由は政府の報道規制の所為で分からないが、はじめは中東から。そして戦火は飛び火して北朝鮮が韓国を占領。さらに朝鮮帝国（日本政府による仮称）は中国とは「中華朝鮮軍事同盟」を、ロシアとは「北ユーラシア共同戦線作成条約」を締結。他国への侵略を宣言した。それに対抗してＥＵ各国やアメリカは兵を差し向けた。そして「経済戦争」の中心だったアジアは「軍事戦争」の中心へと変貌したのである。

その頃から仲の良かったリョウと俺は自分の身を守るため海外の少年兵キャンプに申し込んだ。社会的に守られ続けた俺たちは「無力」が徹底的に嫌だったんだと思う。そこで血反吐を吐くような訓練をつみ、そこそこに強くなった俺達は竹島防衛作戦を始めとする実践で経験を積み、戦火の中心がアジアから離れると同時に傭兵となったんだ。

その頃の様子や、訓練や実践での痛み、作戦を遂行した時の喜び。

そう言った感情がフラッシュバックしている中で、俺はリョウに小さな声で謝った。

「今回の作戦は参加できそうに、ねぇな…。すまねぇ、リョウ―。」

そのとき俺は、あいつの口癖だった「死んでねぇならそれで構わねぇ」と言う台詞が聞こえた。様な気がした。

目をあけると俺を突き飛ばした妖怪、八雲紫は俺の愛銃を手に

「幻想郷は貴方に掛ってるから、そっちの時代の私によろしくね」

と言ってスキマを閉じた。

そして、その声を最後に意識を手放したんだ。

第二章　傭兵と過去（後書き）

こんな感じで書いてますけど戦争は本編にはあまり関わらないかもなぁ。
ちなみに紫の言葉の意味がわかるのは後の方になってから、の予定です。

第三章　傭兵と寺子屋（前書き）

あ、ちなみにこれから（これまでもですが）サブタイトルは全て「傭兵と～」となります。

第三章　傭兵と寺子屋

シュウが目を覚ますと草原に寝っ転がっていた。目の前には青空が広がっていた。その青空は今まで見た中で最も突き抜けて高かった。初めて砂漠に行ったときにみた空よりもっと高い気がする。

なんだか懐かしい雰囲気がして、田舎で最後に見た空を思い出して、切なくなった。

俺は状態を起こして周りを見回した。するとここは小高い丘のようだった。遠くには学校の授業で見た江戸の集落の様なものが見えた。他はただただ自然である。

俺はとりあえず武器の点検をしようとして手ぶらなのに気がついた。迂闊だった。武器は全て車の中に置き去りになっていて、最後に持っていたハンドガンも突き飛ばされた時にあの女に抜き取られてしまった。

（丸腰か…。）

俺はなんの気なしにポケットに手を入れた。するとなにか当たるものがあった。

（これは…スペルカード…だっけか？）

なんだかんだで用語は覚えているみたいだ。

そこには『散符「キャニスター・ショット」』と書かれていた。

（直訳で散弾？散弾銃みたいな弾幕なんだろうか？そもそも弾幕自体散弾の様ではなかったか？しかしこんなスペルはあっただろうか？）

一人で考え込んでいると遠くから誰かが歩いてきている。慧音である。人影を見て反射的に銃を抜こうとしてその手は空を切った

「くせになってるんだな…」

「そこの人、どうしたんだ？そんな何もない所で突っ立って」

「いや、来たばかりだから周囲を確認してたんだ」

「外来人だったか、とりあえず里に来たらどうだ？妖怪にでも出く

わす前に」
「あぁ、そうする」
シュウは一つ頷くとスペカをしまい、互いに自己紹介をしながら慧音の後に続いた。

シュウは寺子屋の職員室に来ていた。
正直腹が減った、が。そんな事を来たばかりで言うのも不躾な気がして慧音の「ちょっと待っててくれ」の一言でこうして一人たたずんでいるのだ。
「あのスペカはどんな弾幕なんだろうか…」
「なんだスペルカードを持っているのか」
「あ、あぁ。まぁ。」
いつの間にか慧音が帰ってきていた。
「使い方は解るか？」
「いや、気がついたら持ってたんだ」
「そうか…。では軽くレクチャーしていくか」
そうしてシュウは慧音にスペカの使い方を習うべく元いた丘に戻ってきた
「先ずはシュウの能力は解るか？」
「いや、全く。このカードからじゃわからないか？」
「銃弾？」
「みたいだ。まぁ、傭兵だからか」
「そうか、じゃあその銃弾を出すイメージ、だな」
「イメージ、ねぇ」
俺は右手を前に、それを左手で押さえて銃を撃つイメージをした。
すると―。
「お、なにか出たようだな」「９ｍｍパラベラム弾じゃないか…。おかしいな、ファイブセブンをイメージしたんだからＳＳ１９０が出てくる筈なんだが…」
「その辺はよく解らないんだが、なにか違うのか？」

「俺がイメージした銃ではそいつは撃てないんだ、入らないから」
「そうか…。まぁ撃つのは銃ではなくお前だからな、問題ないだろう」
こうして慧音の特訓を受け続けた。
その間寺子屋の仮眠室で生活をし、妖怪の事や幻想郷での注意点を聞いたりしながら過ごした。

2週間もすると俺は銃弾の形をした弾幕が張れる様にはなっていたが、なにせ威力がない、見かけだけの弾幕だ。まだまだ訓練は必要なようだ。

第三章　傭兵と寺子屋（後書き）

なんだかんだで授業中に次話投稿～↑おいｗｗｗ

第四章　傭兵と能力（前書き）

ついにシュウの能力が判明！

第四章　傭兵と能力

慧音が授業をするとかでいないので一人で練習をしているととある少女がやってきた。ここ数日で増えた知り合いの一人霧雨魔理沙である。

彼女は人間で「普通の魔法使い」だそうだ。

「よう、シュウ。練習はどうだ？」

「まぁ、撃てるようにはなった、程度か」

「どれどれ。見せてみろよ」

俺は魔理沙の横目掛けて弾幕を放つ。魔理沙は何を思ったか俺の弾幕に自らの弾幕をぶつけた。すると俺の放った弾幕は散り散りに砕けた。

「まだまだパワーがたりないな……え？」

「どうした？」

「私の弾幕が固まってる？」

魔理沙の視線を追うとそこには魔理沙の弾幕の形をしたなにかが落ちていた。

これは一体…？

その後俺たちはこの物体について慧音に聞いてみることにした。

「弾幕が固まった？」

「あぁ、そうなんだぜ」

「むしろ物質化している感じだな。」

「それがシュウの能力ってことか？」

「つまり俺の能力は魔力を物質化する能力…か」

「いや、魔力だけではないかもしれないな。シュウ、弾幕を浮かべてくれ」

「こうか？」

「それでいい、私の弾幕を当ててみて固まれば妖力も物質化できる

ということだ」
慧音の弾幕は俺の弾幕を“砕いて”そのまま地面に刺さった。
「妖力も物質化するようだな」
「と言うかシュウの弾幕って弾けないで砕けるよな」
「確かに、魔理沙達の弾幕は相殺した時に消えるのに俺の弾幕が打ち消される時は破片が散るよな」
覚えておこう、なにかに使えるかもしれん。
「神力もできるかどうか試してきてくれ、私は授業に戻る」
「了解。神力か…、なら守矢神社の早苗のところに「おーい霊夢んとこいくぜ～」そっちか」
正直博霊神社遠いから嫌なんだが、俺は飛べないし。
「歩いて博霊神社に向かうと時間がかかりすぎるだろ」
「じゃあ、後ろに乗るか？」
「了解。そうするよ」
そっちの方が楽だしな。

青年移動中…

「到着！おーい霊夢ー！」
「飛べる様になりてぇ」（アクロバットな飛行によりグロッキー状態）
「何よ、こんな時間に。昼ごはんならあげないわよ」
「ちょっと協力して欲しいんだぜ」
「協力？」

少女説明中…

「そういうことね」
「俺の弾幕に軽いのを当ててくれ」
そして霊夢の弾幕はシュウの弾幕によって物質化し、後ろの壁で

跳ね返ってシュウに直撃した。
「ゴブァ！」
その後その玉は神社の階段を転がり落ちていきその場を気まずい沈黙が支配した。

その後白玉楼にて霊力も同様だと確認し、シュウの能力はあらゆるチカラを物質化する能力だと解ったのだった。おそらくシュウの弾幕自体もその能力で出来ているのだろう。
原理が解れば楽なもので、弾幕の威力も強度も多少はマシになったシュウであった。

第四章　傭兵と能力（後書き）

と言うわけです。
ちなみに
魔法使いが予め持っている力や生命力から変換して生み出す力→魔力
神の力や信仰の力を変換して生み出す力→神力
霊の存在や霊が持っている力を変換して生み出す力→霊力
妖怪が予め持っている力や妖気に当てられた者が生み出すことが出来るようになった力→妖力
という設定になっています。

第五章　傭兵と特訓（前書き）

再び授業中に投稿。
何でだろうね、現代文の授業中って筆がすすむんだ。

きっと、「現代」の「文」だからかね？

第五章　傭兵と特訓

その後も能力の解析を続け、解った事は
・神力…堅牢。防御に適している。
・魔力…着弾時に爆発。攻撃に適している。
・霊力…軽量。武器を作成するのに適している。
・妖力…物質化が甘く、チカラの状態での運用がしやすい。
と言ったところだ。
つまりこれらを上手く運用すれば相当に強いのでは…？ということで神力は博麗神社、魔力は魔理沙宅＆大図書館、霊力は白玉楼、妖力は慧音のもとで鍛えることにした。

博麗神社…博麗霊夢

「掃除をしなさい」
「それと神力に何の関係が…」
「神力は信仰の力を増幅させたものよ。だから掃除を―」
「そうか、じゃあ守矢神社に―『散りたいの？シュウ。それじゃあ。神霊「夢想封印」！』ぎゃあぁぁぁぁ…！」

大図書館…パチュリー・ノーレッジ＆霧雨魔理沙

「とりあえずこの薬を飲みなさい」
「なんの薬なんだ？（ごくごく）」
「あ、間違えた。」
「！？…ゲホッ！な、何飲ませやがった！？」
「青酸カリだぜ」
「そうじゃなくてただの劇薬よ」
「どの道駄目じゃねぇか！」

白玉楼…西行寺幽々子＆魂魄妖夢

「とりあえず身体の一部を霊魂化してみようと思うの」
「ゆ、幽々子様!?」
「おい、冗談じゃ―」
「えい」
「え?なんか出てきたーッ!?」
そんなこんなで寺子屋に帰還した俺は軽く死にかけていた。
さっきなんて身体から出てきた白いふわふわしたなにかを飲まされたし。
既にそこにいたのは傭兵としての村島秀ではなく、一人の青年シュウだった。（精神的、体力的ダメージにより）
そんな具合でいると慧音がやってきた。

「とりあえずは妖の気をあてて身体に妖力をなじませてだな―」
真面目…だと…!?
「あんたやっぱ良い奴だよ!」
「な、なんだいきなりしがみ付いてきて!」

――ゴッ!――

尋常じゃなく痛い頭突きを喰らわされた…。
あんなの…頭突きの威力じゃねぇ…。もう、スペカなんじゃないかな。

第五章　傭兵と特訓（後書き）

不幸属性の主人公です。
今後も主人公は成長します。

第六章　傭兵と弾幕勝負（前書き）

ついにシュウも弾幕勝負を…

第六章　傭兵と弾幕勝負

そんなこんなで修業（？）をすること3カ月。俺は模擬戦をする程度には強くなっていた。スペルカードの作り方も教わって何枚かは作った、が。運用できるものはすくない。
ちなみに今は霧雨邸で模擬戦を行おうとしている。

「シュウ、準備はいいか？」
「あぁ、いつでも行ける」
シュウは魔理沙と同じ高度まで上がりベストの中のカードを確認する。ちなみに現在は5枚のスペカが入っている、が。使い慣れているのは3枚のみだったりする。
「じゃあ、早速。こっちからいくぜ」
そう言って魔理沙は弾幕を展開する。それに応じる様にシュウも「普通の弾幕」で対応する。物質化をさせるかどうかの切り替えができる様になったのも、実はそんなに前の話ではなかったりする。
「空の飛び方もだいぶ様になったじゃないか」
「そりゃどうも」
「こんなのはどうだ？」

星符「メテオニックシャワー」

大量の弾幕が流星群の如く降り注ぐ。
「っと、まずいか」
シュウもまたスペカを取り出し呼応する。

散符「キャニスター・ショット」

生まれて初めて使ったスペカであり、今となってはもっとも使い

勝手の良いものとなったこのスペル。宣言と同時に銃弾を縦横各２０ずつ程並べた菱形の弾幕を続けざまに放つ。

魔理沙の弾幕のいくつかは突き抜けたが殆どがこの銃弾の壁に阻まれていく、そして残った銃弾はそのまま魔理沙に襲いかかる。

「うぉ…ッ！？」

魔理沙は上空に退避し、マジックミサイルを放つ。それに対し今度は「物質化した弾幕」をぶつける。マジックミサイルはなんなく銃弾を蹴散らすが、直に重力に沿って落下していき地面で魔力の爆発を起こしていた。

「なるほど、厄介だな」

「それは褒め言葉か？」

「そう思っとけ、じゃあこんなのはどうだ？」

魔理沙は緑のレーザーを大量に射出した。しかしそれらは曲がりくねって、互いにぶつかると爆発を起こした。

「いったい何がしたいんだ…？」

するとその爆発の中から魔理沙が箒に捕まり、ロケットの様に突進してきた。それを間一髪でかわし、振り向くと箒の柄がこちらを向いているのが目に入る。

光符「ルミネスストライク」

その箒の先からは巨大な弾丸が飛び出していた。シュウは上に逃げながらも新たに取りだしたスペカを起動する。

被膜「マテリアル・フィルム」

シュウから周囲に向かって薄い膜が拡がっていく。そしてその幕は魔理沙の放った光弾にぶつかり、勢いを殺しながらも物質化させることで光弾をその場で落とした。

「次はこっちのターンだ。覚悟しろよ」

「その意気、だぜ」

跳弾「ミラー・スナイプ」

シュウは特殊な弾を一発だけ放つ。その弾は魔理沙の通りすぎて、後ろで二つに割れながら反射した。

「!?―帰ってくるのか!?」

その二つは魔理沙を通り過ぎてまた割れる。そうして次から次へと数を増やしていく。

しかもその銃弾はそれぞれ速度が違うため最終的には前後から一斉射撃を受けているかのようになっていく。…まぁ、その分一発の威力は下がるんだが。実は始めて使ったものだったりする。

「流石に、ちょっと…ッ!」

魔理沙は箒に捕まり突破をしようと図る。それを待っていたかのようにシュウは叫ぶ。

「弾けろ!」

既に１０００個強にまで達していた弾の一つ一つが１０~１５個に割れて乱反射する。しかしここまで小さくなると威力は無いに等しいのだが、なにぶん一つが小さいので砂嵐の中にいる様な感覚に陥り、目を瞑らざるを得ない。結果、動きが止まるのである。

（ここで決める!）

狙撃「スナイプ・バレット」

異常なまでの速度を持った弾幕が魔理沙を捉える。その速度は既に実銃の域なのだが非物質なので貫かない。と言うか物質にするとそんな速度は出ないし。そのかわりにものすごい衝撃が一極集中で襲うのだ。

「ぐぁっ」

魔理沙は背後の大木に突っ込みズルズルと落ちていった。

模擬戦と言ってよいのか解らない練習を終えた二人は共に昼飯を食べていた。
「流石に油断したぜ」
「傭兵の世界では油断は即刻死に繋がるからな。たとえ模擬戦でも一旦スイッチが入ると制御がきかないというか…」
「ようするに戦闘狂なのか？」
「いや、条件反射、だな。楽しむと言うより必死だからな」
「弾幕ごっこは楽しんだもん勝ちだぜ」
「ははは…。そいつは勝利への道は長く、険しいな」
シュウは空を仰いで、そう呟いた。

第六章　傭兵と弾幕勝負（後書き）

え？物質化がずるい？威力がおかしい？スペカが二枚同時？
だからタグにもあるじゃないですか「チート野郎」って
それにそれ相応の特訓は積んでますし、もと傭兵ですし。

最後のは…まぁ、模擬選ですし。多めに見てやってください…

第七章　傭兵と紅い霧（前書き）

紅魔郷編に突入です。

第七章　傭兵と紅い霧

シュウは魔理沙との模擬戦を終えて寺子屋に帰ってきた。
するとちょうど授業が終わったのか一斉に出てくる子供達。
その中に知らない顔を見つけ、最上級生がいないことに気づき時間の流れを感じた。
シュウが幻想郷に来てから一年が経とうとしていた…。

それは唐突にやってきた。朝、外に出ると辺りを紅い霧が覆っていたのだ。一年間過ごしてきたのだからこれが季節のものでないのは分かる。となると人為的な何かなんだろう、魔力と妖力で構成されてるのが解る。俺はこの色には覚えがあった。紅魔館である、…が。出来ればあまり行きたくない。あそこの図書館の魔女は俺を見つけるなりこの「物質化」の能力で実験をしようとするのだ。

俺は実験体じゃねぇ！
第一に人類には基本的人権と言うものがあってだな……（以下延々）

閑話休題

なのでここ最近は霧雨邸で魔力の鍛錬をやっていたのだ。
とりあえずは魔理沙のもとに向かってみた。

とは言うものの霧の所為で前が見えない。霧を纏めて物質化させてもいいんだが、疲れる。彼女の事だ、異変を起こした奴を叩きにいくと言ってもおかしくは無い。

だから歩いていくことにした。

正直歩きづらいので少しずつ物質化させて霧を薄くして進むことにした。
ちなみに物質化したものは集めておいてある。赤い水晶みたいになっているのであとで魔理沙辺りに売れそうだ。

魔理沙は未だに眠りこけていた。呑気なものだ。
「おい、魔理沙。起きてみろ」
「うぅ、ん…。」
「起きろって」
「…。なんだよ、シュウか」
「なんだよって…。剥いてやろうか？」
「帰れ！変態！」
「冗談だってば、本気にすんなよ」

寝起きな上に起こし方が悪かったからかむくれ面の魔理沙である。
ちなみにかなりの薄着だ。まぁ、暑いしな。
「で、要件はなんだ？」
「窓を見れば解ると思うが？」
ちなみに紅い霧で窓は真っ赤だ。
「趣味が悪いぞ、シュウ」
「俺じゃねぇよ」
「じゃあ誰だ家の窓に絵の具を塗ったのは」
「絵の具じゃない。霧、だよ」
「紅い霧？」
「そうゆうこと」
「こいつは…面白そうなだな」
ニヤリと笑う魔理沙。うわぁ、悪人顔。こうして俺らは異変解決に

向かうことにした。
「さぁ、いくぞ！シュウ！」
「そのカッコでか？」
「み…」
「み？」
「見るなぁぁぁぁ！！」
「ちょ、室内で弾幕は…っ！」

前途多難である。

第七章　傭兵と紅い霧（後書き）

果たして2人は無事に異変解決できるのか！？

第八章　傭兵とストレス発散（前書き）

魔理沙とシュウは紅い霧を止めるべく紅魔館に向かった。

第八章　傭兵とストレス発散

「なぁ、いつまで怒ってんだ？」
「怒ってない」
「ウソだろ、ぜってぇ」
―ゴッ！
「いってぇ！」
あの後魔理沙の弾幕をかいくぐり外に出た俺は異変解決のため外を飛行していた。その道中魔理沙のご機嫌を伺っていたのだが、八卦炉で殴られてしまった。
すると前方から何やら大きなチカラを纏った人物が飛来しているのは分かるんだが、見えない…。で、案の定スルーですか。たぶんアレ、霊夢なんだがなぁ。

…。
……。
……。

そうして彷徨っているうちに霧が薄くなってきた。と言うか高度を下げたら普通に晴れてたと言うね。すると下から声がした。
「ねぇねぇ、そこの人」
「ん？」
そこにいたのは小さな金髪の女の子だった。小さな赤いリボンが頭に付いている。要するにルーミアがそこにはいた。
「実はね、とってもおなかがすいてるんだ」
「そうか、俺もだ」
昼食ってないしな。

「だから、食べていい？」
「私はパスだぜ」
「俺も無理」
「そーなのかー」
「じゃあな」
スルーしようとする俺たち。あれ？でも原作では戦ってたっけ？
「ちょ、ちょっとまってよ。じゃあ、弾幕勝負しようよ」
「受けて立つぜ」
「え、やんの？」
「負けられない戦いがここにはあるんだぜ」
急にやる気な魔理沙であった。
「それにいい気分転換だ」
「そうか頑張れよ」
「先にいっててていいぜ、すぐ追いつく」
「死亡フラグか、せいぜい死ぬなよ」
「誰がこんなのに」
俺は背中を向けて紅魔館への道を進みはじ「マスタースパーク！」めた。
「さて、あれが紅魔館だな」
「そうだぜ」
「っておい。どうして魔理沙がここにいる」
妙にすっきりした面持ちの魔理沙が隣にいた。
「いちゃ悪いか？」
「弾幕勝負はどうした」
「勝った」
後ろを振り向くと森が一直線に無くなっていた。魔理沙ＫＯＥＥＥＥＥＥＥＥ！！
「さ、行こうぜ」
「お、おう」
魔理沙のご機嫌も直ったように見えるし、まぁいいか。

そうして進み始めた俺たちの後ろでは霊夢がルーミアに追い打ちをかけていた。

「散々彷徨って見つけたのがアンタってのが気に食わないんだけど。」

「え、何その理由？」

「夢想封印！」

「きゃあぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

…敵キャラって大変なんだな…。

第八章　傭兵とストレス発散（後書き）

あ、普通こういうのって前書きで言うんでしょうけど。

累計１４００ＰＶ＆３００ユニーク達成です！読んでくださってありがとうございます！

と言うわけで伏線出すだけ出しといて本家の方に行くと言う状態ではありますが、一応考えあってのことです。

でもまぁ、しばらくは本筋の方でやっていきますのでクライマックスになったら最初の辺りを読み流してくれるとわかりやすいかなぁ。

なんて思います。とか言いつつまだ書いてないんですがね。

第?章　傭兵と〝嵐〟（前書き）

一応本筋に沿わせて行きます。
タイトルがこうなったのは完璧な計算に基づく偶然です。

第?章　傭兵と”嵐”

紅魔館に向かう途中にある湖。
そこはいま、初夏を目前にしているとは思えないほどの冷気にさらされていた。
「寒くね?」
「そうだな、…とくにシュウはな…。」
ちなみに現在野戦服（夏仕様）だったりする。迷彩柄の長ズボンと黒の半そでTシャツ、それにタクティカルベスト…に似たジャケット。という服装だ。正直寒すぎる。ロシア戦線でもこんなに寒くなかったというのに…。
「にしても紅魔館はまだか」
「そんなには遠くなかった気がするんだが…」
「魔理沙…もしかして方向音痴?」
「空で道に迷う訳がないだろ」
「道じゃないしな」
そんな風に魔理沙とだべりながら進む。すると前方にチルノが見える。隠れてるつもりなのだろうか。魔理沙も同様だったらしく「なぁ、あれ…」と呟いた。
「チルノ」
「だよなぁ」
チルノはこっちにやってきて言い放った
「少しはおかしいと思わないの?」
「頭がか?」
「誰の!」
「アンタの」
「あたいはバカじゃない!」
そうしてスペルカードを取り出すチルノ。

「良い腕慣らしだ、シュウもちょっとやっといたらどうだ？」
「そうする」
こうして俺は弾幕勝負の実践に挑むことになった。

「あたいからいくよ！」
「わざわざ言わなくてもいいだろうに、流石？」
「うるさい！」

氷符「アイシクルフォール」

チルノから大量の氷の槍が飛び出し、こちらに襲ってくる。密度も速度も魔理沙には遠く及ばない。これ程度ならかわすのは造作もないな。
俺は右へ左へひらりとかわし続ける。そして相手の弾幕のあいだからこちらも弾幕を打ち込む。
「当たれっ当たれ！」
「そんなやけくそに打ったってあたりゃせんよ」
「そんならっ」

吹氷「アイストルネード」

チルノの周囲に冷気が渦巻き、局地的に大吹雪が発生する。これはかわさず後ろに下がって威力圏外へ離脱する事で対処。かわしてばかりいても埒が明かないのでこちらからもしかけることにした。
「そんなに回ってたら周囲が分からなくなるぜ」

嵐風「バレット・ストーム」

宣言と同時にある比率で混ぜたチカラを放出、そして一気に固める。そうしてチルノを囲むように対物ガトリングを合計１０挺創り

出す。そして十分に魔力弾を充填させて…
「穿て！」
一斉に火を噴く。チルノはぐるぐると回り続けており未だに気がつかない。そこに銃弾の雨が全方向から降り注ぐ。
「いたっ！え？わ！ぎゃあああぁぁぁぁぁ…」
自らのスペカによる風も相まってさながら嵐のような、本来の意味での”弾幕”に押し潰されるように被弾したチルノは湖に落ちていった。

「シュウ、ひでぇな」
「相手が弾幕打つ前にマスパで終わらせるお前にだけは言われたくない」
「ははは、それもそうか」
紅魔館は直ぐそこである。

第?章　傭兵と”嵐”（後書き）

はい。チート野郎が本性を現しましたよｗｗｗ
まぁ、傭兵ですから。戦いには命掛かってたので、手加減なしの超本気なのは仕様です。

第十章　傭兵と『近接弾幕』（前書き）

どうも皆さん。例のあの門番がやってきますぜ。

第十章　傭兵と『近接弾幕』

かくして俺たちは紅魔館に辿りついた。壁は目にしみる紅で、外壁も屋根もすべてが紅くなっている。
そして門に降り立つ俺たち。そして――。

門に倒れ伏す女性を見つけた…。

「…中国。霊夢にやられたのか…」
「みたいだな」
美鈴の体には無数の針やら札やらが刺さっており、周囲の土は抉れていた。
「じゃあ入ろうぜ」
「おい放置しといていいのか？」
「別に良いんだぜ。これから殴りこみかける屋敷の門番を起こして戦う道理はないぜ」
「確かに、この状態からさらに叩くってのは…」
「ここは、通しませんよ。今日だけは、ね」
気がつくと美鈴は立ち上がり、構えをとっていた。
「お二人とも、練習なら明日でもいいんでは？」
「今回は異変解決にきたぜ」
「尚更通せませんよ、門番ですからね。二人同時に来たらどうです？」
「その必要はないぜ。シュウが単独撃破してくれるからな」
「ひとまかせかよ」
「じゃあ私は先にいくぜ」
そう言うと魔理沙は門の横手に移動し―。

「壁なんかじゃ私の力は止められないぜ…。
恋符「マスタースパーク」！！！」

壁にマスパをぶち込み開いた穴から入って行った魔理沙。
「しかたない。シュウ、行くぞッ！」
「口調が変わったのは仕様か？―っと」
美鈴は軽口を叩いている俺に一瞬で肉薄するとまっすぐに突きを放ってきた。よく見ると彼女を周りからは妖気が…否、純粋な”気”が立ち上っている。…。ちょっと真似してみるか。
俺は妖力を身にまとい体中に充満させた。するとなんだか体が軽くなった気がした。
（これが美鈴の機動力の一端をになっていたのか…）
「シュウ、気なんか練ってどうするつもりだ？まさか近接格闘で勝負する気じゃないだろうな？」
「近接、か。ははっ良いじゃないか。『近接弾幕』といこうか」
こうして新たな形の弾幕勝負が幕をあけた―。

先手をとったのはシュウ。接近し、膝に向けた蹴りを放つ。美鈴は余裕を持ってシュウの足を絡めようと足で応じようとして、空を切った。シュウは蹴りの途中で後ろに飛んだのだ。そして下がり際、足から弾幕を飛ばす。
しかしこの程度でどうにかなる美鈴ではない。美鈴は状態をそらしてかわし、シュウにむけて弾幕を放つ。シュウはそれに弾幕をぶつけて「落とす」。
直後、シュウの目の前に美鈴が肉薄し、その勢いでひざ蹴りをする。シュウはそれを両手で防ぐ。
（っ！？重いっ！）
予想以上の衝撃にシュウが固まる。そこに美鈴の猛攻が加わる。
右フック、左ローキック、正面からの突き、顔面に向けたストレート、腹部へのひざ蹴り―。

次から次へと打撃を繰り出す美鈴。シュウはそれを捌き、いなすので精一杯だった。しかしその状態は長くは続かず、シュウはハイキックをかわせず思わず防いだ、が。衝撃は押し殺せるはずもなく横にたたらを踏んだ。その時美鈴はすばやくカードを取り出し、スペカを発動した。

（この距離でか！？かわせる訳がな…）

気符「地龍天龍脚」

美鈴が大地を踏み込む。すると衝撃が地面を伝わりシュウの体をはね上げる。少し距離が開いた。そして追い打ちをかけるように美鈴渾身の飛び蹴りが放たれる。

（ここしかない！）

シュウは後ろに吹き飛びながらもスペカを発動する。

砲弾「タンク・キャノン」

シュウが前方に突きだした手のひらに、直径１８００ｍｍの”砲弾”が出現する。

（喰らえ、渾身の！）

そして美鈴に向けて放たれる。

（１８００ｍｍ滑空砲！！！）

「うらあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

「てえええぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！」

弾と飛び蹴りがぶつかって大爆発を起こした。お互いに吹き飛ばされて、シュウは意識を失った。

気がつくと門のあたりは地面が窪んでおり、煙が立ち上っていた。どうやら気絶していたのは一瞬の事のようだった。美鈴は門を突き破って、玄関の中まで飛んで行っていた。

「あちこち痛ぇや…。早いとこ魔理沙に追いつかないとな」
シュウは紅魔館の中へと飛び立った。

「全く、シュウも無茶なことしますね。お嬢様にはかないっこないでしょうに」
その場には苦笑する美鈴だけが残されていた。

第十章　傭兵と『近接弾幕』（後書き）

と言う訳で辛くも勝利したシュウです。
というか今回の紅魔編はシュウの成長をみせる意味合いもあるのですが、この美鈴は最初からボロボロと言うねｗｗｗ
…じゃないといくら強くなったって勝てる訳がないじゃないか。妖怪に。

第十一章　傭兵と魔女（前書き）

タイトル通りです。
今回の分を読めば作者がシュウに関してチート野郎のタグをつけた理由の一端が垣間見えるかと。

第十一章　傭兵と魔女

魔理沙は割と早く見つかった。
「魔理沙、どうしたんだ？こんなところで」
「ん？これから図書館に向かうところだぜ」
「そうか、じゃあついてくよ。俺一人でレミリアにかなう訳がない」
「レミリアと戦うのか？」
「異変の犯人を叩くんだろ？あの霧の力の構成は吸血鬼のもの。フランが起こしたところでなんの利益ももたらさないからレミリアが犯人だろう」
「まぁその辺もパチュリーに聞けばいいか」
「教えてくれるのか？」
「闇討ちして縛りあげれば吐くだろ」
「やっぱりひでぇな」

１０分後。俺たちは一言で言うと迷っていた。おかしいな…。この前ここに来た時（実験台にされた時）はここが図書館でこっちがホールだったんだが。今はどっちも倉庫につながっていた。
「やっぱり魔理沙。お前、方向音痴なんじゃ」
「シュウも人のこと言えないだろ」
「俺は2～3回しか来たことねぇもの」
「…。第一ここは部屋の配置が変わってる気がする」
「それはたしかに、な」
そう言ってつぎの扉をあけると、図書館だった。

（シュウ、どこから仕掛けてくるか判らないから気をつけろ）
（俺の仕事をなんだと思ってやがる。こう言うのは本職だから任せろ）

少しずつ奥に進みながら囁き合う。そして本棚の向こうにあの魔女を見つけた。
（魔理沙、あっちだ、背後にきをつけながら進むぞ）
（了解～）
「で？あなたたちは何をさっきからこそこそしてるの？」
即効見つかった…だと…ッ！？
「そこにいるのは分かっているわ、出てきなさい」
「よ、パチュリー」
出てくのか…
「ようこそ。魔理沙、シュウも」
「俺はオプションか？」
「戦力的にもそんなものでしょう？」
「舐めやがって、俺はそんなもんじゃ「その通りだぜ」えぇー…」
「二人まとめてかかってきなさい」

「まずは…」
「「私（俺）からだ！」」
魔理沙と俺の声が重なる。二人は同時にスペルカードを発動する。

恋符「ノンディレクショナルレーザー」
散符「キャニスター・ショット」

魔理沙の高威力レーサーとその隙間を埋める俺の弾丸が同時に襲いかかる。
「ルーンの護石よ」
パチュリーの呟きに呼応するように地面から文字の刻まれた石が現れる。その石は俺の弾幕は弾いたが、魔理沙のレーザーによって砕かれた。
しかしその後ろには既にパチュリーの姿はない。シュウはかすかに「ゴォッ！」と言う音が遠くに聞こえた気がした。振りかえると

向こうから火の手が迫ってくる…と言うか飛んできていた。
「うお！」
「あぶねぇ！」
その火の玉は後ろの壁に当たって消えた。
ちなみにこの時周りの本が勝手に開いてこっち弾幕を打ってきていたりする。魔法使いってなんでもありかよ！？魔理沙はどうなんだ？そう言えば魔理沙は魔法使いでパチュリーは魔女だったか…。
直後頭上から宣言が聞こえる。
火金符「セントエルモピラー」
高熱の塊が俺たちの間に落ちて火の柱が立ち上る。それを間一髪でよけた俺たちにさらなる追撃が重なる。
土水符「ノエキアンデリュージュ」
高圧縮の水の魔法が俺と魔理沙に迫る。俺もそれに反応する。
被膜「マテリアル・フィルム」
それらの弾幕は俺の創り出した膜によって物質化し、水の結晶として床に散らばる。
その間に魔理沙が魔法を放つ。
光符「アースライトレイ」
そこに俺も乗じる。
嵐風「バレット・ストーム」

二人の弾幕はパチュリーに降り注ぎ、とらえたかに思えた、が。

土金符「エメラルドメガロポリス」

地中から次々と打ちあがる宝石群にすべてが阻まれてしまう。
そして地面には俺の弾幕の砕けた残骸が大量に散らばり、地上は歩きづらい状況になってきていた。
ん？弾幕の残骸？そう言えばあんなスペルがあったな…。
俺は大技を仕掛けることにした。

「魔理沙、少し時間を稼いでくれ、俺が技をぶち込む。でも、しとめるのは流石に無理があるからでかいのを頼む」
「なにをするかは知らんがまかせた」

俺は図書館の床全体に空気よりも重くしたチカラの混合体を流していく。
そして俺の弾幕に付着させていく。パチュリーの魔法から出来た水の結晶や魔理沙の弾幕が俺の物質化に反応したものも同様に付着させていく。
パチュリーが俺の動きに気付いたようだ、仕方ない。万全ではないけれども…。

終末「バレッツ・アンブッシュ」

その宣言に反応し、弾丸の破片が、魔法の残骸が、銃弾へと姿を変えてパチュリーへと襲いかかった。そう、今回の戦闘で三人が放った弾幕の欠片のすべてが、だ。その数は軽く５００００は超える。

「！？そんな、規格外な！」

「いまだ！」
「ッ！」

魔砲「ファイナルスパーク」

魔理沙のマスパを裕に超える太さを誇る超極太レーザーがパチュリーを飲み込んでいった。

魔理沙の放ったレーサーは建物の中では止まらず（止まる訳もなく）天井をぶち抜いた。

「あぁ、どうやら霊夢に先を越されたみたいだな」
「へ？どういうことだ？」
「空、見てみろよ。霧が消えてるぜ」

そして空には満天の星空が瞬いていた。

第十一章　傭兵と魔女（後書き）

はい、まさかの咲夜やらレミリアやらとの戦闘をせずに紅魔編終了です。
べ、別に咲夜に勝つ方法が浮かばなかったとか、そんなんじゃねぇんだがんな！

第十二章　前篇　傭兵と異変の結末（前書き）

この十二章で紅魔篇は終わりになります。

第十二章　前篇　傭兵と異変の結末

帰りに聞いた話なんだが魔理沙も霊夢も異変解決は初めてだったらしい。

…初めてであの手際かよ…。

ちなみに玄関に倒れていた美鈴には新しくナイフが刺さっていた。

明日は宴会だとか。お前ら未成年だろが。魔理沙に至っては「紅魔館のワイン飲み尽くそうぜ！」とか言ってるし。と言うか咲夜に睨まれてるのに気にしないし。

そしてどうやらルーミアやチルノ、とその友人（大妖精と言うらしい。霊夢に撃墜されたので一応関係者だとか）なんかも集まるようだ。今回の関係者全員集合ってか。…と言うかルーミア、あんだけフルボッコにされてたのに翌日の宴会にふつうにやってくるとか。どんだけ丈夫なんだよ…。

もしかしたらそれくらい丈夫じゃないと幻想郷ではやっていけないのかもしれない。弾幕を遊びであるような奴らばっかりだしな。

そしてあの一件以来紅魔館にたまに通うようになった。理由？あそこのメイドさん…たしか咲夜といったが、あの人がナイフのスペカを使ってるんだ。そこで、俺も教えて貰えないかな～。みたいな。あとはあの滅多刺しにされてた門番である中国こと美鈴に妖気の練り方を習ったりしている。

妖力がたくさん貯まってるとなんか動きやすいんだよなぁ…。俺のＣＱＣを美鈴に教える代わりに美鈴の武術を習ったりもしている。

そして、一番変わったこと。それは…。

…。

……。

……。

俺が異変解決に付き添ったあと、寺子屋に帰ってきたらけーね先生が何やら申し訳なさそうな顔で迎えてくれた。

曰く、新しく外来人の少女がやってきた。

曰く、彼女は極度の男性恐怖症らしい。

曰く、彼女は寺子屋に滞在するので俺は寺子屋にはもう住めない。

「けーね先生！家賃滞納が原因ですか！？」

「話を聞いてたか？」

そんな…どこに住めというんだ…。

博麗神社↓霊夢のパシリなんてゴメンだ。

霧雨邸↓二人きりって…。それにキノコだけで生きていけるのはアイツくらいだろ。

紅魔館↓パチェさん怖い…。いや、まじで。寝ている間に解剖とかされそうだし。

里↓空き家がない。

となると…。

「という訳でこれからここに住みたいと思う」

「どういう訳ですか！」

白玉楼しか残ってないんだよ。

「第一ここがどこだか分かってます！？」
「冥界」
「どういうところですか！？」
「死者の集まる楽園」
「あなたまだ生きてるでしょうが！」
「それを言ったら妖夢だって」
「私は半人半霊ですのでっ！幽々子さまからもなんとか言って下さい！」
「いいんじゃないかしら」
「いいんですか！？」
妖夢が（。Д。）こんな顔になっていた。
「あら妖夢、嫌だったかしら？」
「そ、そんなことはっ！ない…っですけど…。」
「じゃあ良いじゃないの」

かくして寺子屋から白玉楼へと引っ越しが決まったのであった。

そして翌日。
白玉楼の二人には用事があるといって宴会に向かった。異変に関係したモノ達の宴会、だから知らない人がいても困るだろうし。
引っ越し？俺、着替えぐらいしか荷物ねぇし。了承貰ったその日から住んでるけどな。

第十二章　前篇　傭兵と異変の結末（後書き）

ここでの主人公の移住には大きな意味があります↑勘ですが。

第十二章　後編　傭兵と宴会（前書き）

気がついたら長くなっていた…だから前後編仕様です。

第十二章　後編　傭兵と宴会

かくして俺は博霊神社に来ていた。
高校時代（と言っても一年ちょっとだったが）は寮に入って自炊してたし、義勇軍時代や傭兵の頃は戦地で自炊してたし、寺子屋でけーね先生に夜食だしたら旨いって言ってくれたし、料理には結構自信があったんだ。
だから昼ごろにやってきて料理を手伝う様に言われてきたんだが。

既に始まってるってどういうことなの…？

あれ？開始時刻は１９時になってるんだけど？今まだ１２時半だぜ？なんで始まってんの？あ、でも流石に紅魔館組はいないな、吸血鬼だし。あれ？じゃあなんで美鈴は魔理沙と飲み比べしてるんだ？
とりあえず霊夢のもとに向かった。

「よ、霊夢」
「あ、来たのね」
「既に魔理沙と美鈴が始めてるんだが、妖精たちとルーミアも料理食ってるし。」
「あぁ、あいつらはあれでいいのよ。こっちはこっちで始めましょ」
「それは良いけどよ、食材は夜までもつのか？」
「夜の分は紅魔館で用意をするらしいわ」
なんか太っ腹なのか？でも異変の慰謝料とかそういうことなのか？

１８：３０　紅魔館組到着

「シュウ、もういいわ参加してらっしゃい」

「いいのか？」
「いいって言ってるじゃない」
許しがでたので宴会場のほうに足を向けた。
美鈴は魔理沙に三国志について熱く語っているが、魔理沙はルーミアの髪で遊んでいる。まぁ、美鈴も気にしていないそうだしいいけど。
そして霊夢はレミリアと縁側でなにやら話している。すると後ろから声をかけられた。
「あ！あんたはこのまえの！」
「ん？？じゃないか」
「リベンジよ！リベンジ！あたいにかかってきなさい！」
「チルノちゃん、普通はそのセリフは挑戦を受けた方が言う言葉だよ…。っていうか止めようよ！」
「受けて立つさ」
「こーかいするなよ！なんたってあたいは『さいきょー』なんだから！」
そういうとチルノは氷の剣をつくりだし、襲いかかってきた。となりにいた大妖精はおろおろしている。ちょっと遊んでやるか、などと考えていたら大上段でジャンプして迫ってきた。
「さすが？。隙だらけだぜ」
「うるさい！」
攻撃するのも面倒になるほど隙だらけなので、俺は一歩下がることにした。するとチルノはそのまま顔面から落下した…。
「ぶへらっ！」
「……。」
「これからがほんきなんだから！」
若干涙目でそう言うと、チルノはめちゃくちゃに振り回しはじめた。正直危ない（料理にあたりそうで）。
なので俺は早急に終わらせるべくナイフを一本取り出し投擲した。ちなみにこのナイフは紅魔館で拾ってきたものだ。そのナイフはま

っすぐに飛んでいき、けん制のつもりが額へと吸い込まれていった。
「みぎゃあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」
「あ、けん制のハズだったんだがなぁ…」

俺がナイフを回収していると咲夜がやってきた。
「そのナイフ、うちのよね？」
「あぁ、落ちてたもんでな。再利用させてもらってた」
「そう、それは私のなの」
「じゃあ返すよ」
そう言ってナイフを渡した。するとナイフは一瞬できえた。恐らくしまったんだろう。直後―。

カカカカカッ！

彼女の周りには同じようなナイフがたくさん刺さっていた。
「あれ？失礼。ちょっと落としてしまいました」
「（ちょっとじゃねぇえ！！）…ソウデスカ」
よかった、戦わなくて。ナイフのスペルカードっていってたからてっきり短剣の剣技かと思ってたんだが、ナイフ投擲の弾幕だったなんて…。もともと物質だから俺じゃあ太刀打ちできねぇし。
するとルーミアがやってきた。どうしたかと思い魔理沙をみると美鈴と弾幕をしていた。たしかあの二人、泥酔していたハズなんだが…。酔っぱらってる時に運動すると危険なんだがなぁ。

こうして弾幕混じりの宴会は日付を越えるまで続けられた。

第十二章　後編　傭兵と宴会（後書き）

５００ユニーク突破です！
ご愛読ありがとうございます！
これからもシュウたちをよろしくお願いします！

第十三章　傭兵と朝（前書き）

新しいシュウの日常です。

第十三章　傭兵と朝

朝。
俺は異常なまでに早く起きたが二度寝をする気にもならなかったので、顔を洗うために洗面台に向かった。そしてドアを開けてから気づいた。
…洗面台、どこだ？
今までも客人としてなら何度となく来ていた白玉楼だが、いざ暮らすとなると勝手が全く分からない。
まぁ、そのうち慣れるだろ。
そう思って俺は洗面台探しの旅に出たのだった。

1時間後…。

俺は未だに彷徨っていた。
そして扉をあけると、自室だった。
なんだよここ！広いだろ！と言うか俺は何回自室に辿りつけばいいんだ！かれこれ既に4回は戻ってきてるぞ！まだ寝まきにしていた甚平（香霖堂で買ってきた）のままだし、今からでもいいから二度寝しようかとも思ったが、ここまで来たら意地だった。
俺は微妙に残る眠気とともに来た道と反対側に歩き始めた。

俺は長い廊下を見つけたのでそこを直進してみることにした。
その先には所謂「離れ」があったからだ。俺はそこの扉を引いた。すると中は板張りになっていて道場の様な作りだった。そこで妖夢が木刀を振り回していた。ちなみに真っ白な道着と袴を着用している。…のに、木刀は漆黒の漆塗りだった。
「あ、シュウじゃないですか、どうしました？」

「いや、なんとなく」（道に迷ったなんていえねぇ…）
「じゃあ、少し練習していきますか」
そういって妖夢は奥に引っ込んでしまう。そして戻った時には二本の木刀が握られていた。…朝から稽古とか勘弁してほしいんだが。
「いや、正直やったことないんだ」
「そうなんですか？」
「短剣と言うか、ナイフだったら少し使った事があるんだけど長いのはちょっと―」
「短いのもありますよ」
なんだか相手が出来たのがうれしいのかニコニコしている妖夢。なんだか断りづらい…。おもに良心の呵責によって。断れないな…。と言うか今更感あるけど一緒に暮らしてるのに敬語って。
俺はいろいろな形の木刀を持ってみたり握ってみたりしながら会話をすることにした。もしかしたら主と言う助け舟が来るかもしれない、空腹によって。
「あーそうそう。敬語じゃなくてもいいぜ」
「え？あ、そうで…。た、確かに。」
あー。なんかいかにも慣れてない感じだな、ぎこちないし。
お、この長さは昔使ってたコンバットナイフに似てるな。
「使う得物は決まりま…。決まった？」
「あぁ、うん。しっくりきてる」
って、時間稼ぎはどうした！俺！？
「じゃあ、やろ？」
妖夢は少し首をかしげて覗きこみながら、微笑えんでそう言ってきた。
なんかぐっときた。
可愛いなコイツ。
そんな訳で頭が冷静ではなくなった状態で勝てる訳もなく、フルボッコにされた。

「妖夢、お腹がすいたわ」
「あ、わかりました。すぐに用意します。…あとでまたやろ？シュウ。」
「おぅ…」（マジか…）
こうして新たな日課が増えたシュウだった。

第十三章　傭兵と朝（後書き）

またしてもフラグたてて…。俺は一体何がしたいんだ…。

第十四章　傭兵と「冬」の始まり（前書き）

妖々夢に入ります。…多分。

第十四章　傭兵と「冬」の始まり

十二月のある日、俺と妖夢は幽々子に呼び出され、ある話を聞かされた。
彼女の話は簡潔だった。と言うかひとこと

異変を起こしましょう
、と。

「…一体なにをするつもりです？幽々子様。」
「あの桜を咲かせてみようと思って」
「西行妖を、ですか？」
「春を待つんじゃ駄目なのか？」
「あの桜はある封印がなされているの。だから普通の春度じゃたりないのよねぇ」
あ、もしかしてこれって。原作でいう妖々夢なんじゃ…。って事は春が来ない異変を起こす…と言う訳か。
「だから春度を幻想郷中から集めてきて欲しいの、”二人で”」
「妖夢、大変だとはおもうが…って二人？」「えぇ、居候してるんだからある程度は働いて貰わないとね」「シュウ、一緒に頑張ろ？」
「あぁ、そうだな…。と言うか第一、どうやって集めるんだよ」
「そこは、ほら。物質化すればいいんじゃないかしら？」
「そしたら桜に与えられないじゃないか」
「「戻せないの？」」
「……。」

どうせ出来ねぇよ！だからそんな目でみるなぁ！

「やってみたらなんとかなるんじゃないかしら？」

「何事も挑戦、だよ」

手元に銃弾を作り出し、もとに戻そうとしてみる。
溶けるイメージ。無理か…。粒子に分解する感じはどうだ？出来ねぇか…。だったら――。

…。
……。
……。

試行錯誤を続け、二十何回目かの挑戦。
構成をバラしていく感じで…。手のひらから重さが消えて、霊力となって消えた。気がする。
「出来た！」
周りを見ると俺一人だった…。
「えぇー…」

とりあえずスムーズに行えるように練習をすることにした。
弾を作る、消す。作る、消す。ただひたすらに繰り返す。
と言うか案外疲れるな、これ。まぁ、チカラを放出し続けてるみたいなもんだから当然と言えば当然か。
俺はその後も練習を続けた。

気がつくと俺は布団に寝かされていた。…なぜ？
とりあえずは起きてみることにした。
「あ、気がついた？」
「ん、妖夢か。俺どうなってた？」
「チカラの使い過ぎで疲れたんだか、自分で布団かぶって寝てたけど？」

…一瞬介抱されたのかと思った。と言うか自分で布団かぶった覚えがないんだが。
「で、出来るようになった？」
「あぁ、一応はな」
俺は手早く銃弾を創り出し、チカラに還元した。
「ホントだ。って事はシュウの能力って物質化する能力だけじゃなかったって事？」
「みたいだな。さしずめ『物質とチカラを相互変換する程度の能力』ってところか」
「なんかそれだけ聞くとボスみたいだよね」
「俺はそんなに無双してないぞ」
「判ってるって」
「そう言われると、それはそれで傷付くな」
「そんな繊細か心持ちじゃないでしょ、シュウは」
「ひでぇな」
まぁ、あってるんだけどね。
「それじゃあ明日辺りからその辺の妖怪を狩ったり、空気中の春度を集めたりしましょ」
「了解」
するとドアが開いて幽々子さんがあらわれる。
「シュウ、体の方は大丈夫かし…あ、妖夢。おなか減ったわ」
「せめて最後まで言おうぜ…」
どこまでもマイペースな人だった。
西日の太陽がとてもキレイに思えた。

第十四章　傭兵と「冬」の始まり（後書き）

まぁ、移住した時点で気がついたかとも思いますが首謀者側です。

第十五章　傭兵と春告精（前書き）

いよいよ春度集めに着手します。

Ｐ．Ｓ．

７００ユニーク達成です！

着実に延びていて嬉しい限りです！

第十五章　傭兵と春告精

二月。

俺たちは「春度集め」を開始した。俺は空気中の春度を物質化して回り、妖夢は幽霊が持っている春度を回収するために切り倒しまくっている。俺がそれを。否、「彼女」を見つけたのはそんなときだった。

俺はなんとなく春度の高い方へ飛びながら道中の春度を圧縮、物質化していた。すると白っぽい服を着た少女が狼みたいな妖怪に囲まれていた。

（とりあえず助けるか…）

近づいてみるとその少女は異常なまでの春度を持っていた。

（これは…ぜひとも持って帰ろう）

どの道周囲の狼もどきは邪魔なのでＰ９０（短機関銃の名前だ。気になったらググってくれ）を創り出して狼的なものたちを一掃する。雑魚どもにはこっちの方がよく効くんだ。

「ふぁ…ありがとうございます。強いんですね」

「そうか？まぁ、無事で何より。と言うか元気ないぞ？」

「私は本来春の妖精なので。あ、ちなみにリリー・ホワイトと言います。ちょっと間違って早く出てきちゃって。寒くて元気が出ないんです」

「俺は村島秀だ。シュウでいい。そうだな…寒いならうちに来てあったまるか？」

「良いんですか？ありがとうございます」

シュウ　は　びしょうじょ　を　てにいれた。

「そんな言い方すると犯罪者じゃないか、もう少しマシな言い方はないのか」

シュウ　は　妖精さん　を　てにいれた。

「それだと頭がイタいひとみたいだろ」

シュウ　は　リリー　を　拉致した　。

「だから犯罪者にしようとするな！」
「あの、一人で誰としゃべってるんです？」
「気にしないでくれ」
「いやです」
「気にするな」
「わ…わかりました…」
少し怯えているようだが…、そんなに怖い声を出したつもりはないんだがなぁ。

俺は冥界の入り口でリリーをおぶっていた。
「あの、ここって…」
「冥界、だな」
「な、なんでこんな怖いところに来るんですかっ？」
リリーは若干涙目だ。
「大丈夫だって。怖くないから」
「怖いですよぉ。だから待ってくd…あ、待って、ホント、早過ぎだってb、待ってぇぇぇぇぇぇ…」
俺は後ろで叫んでいるリリーを背負って白玉楼へと飛ばしていった。ほら、幽霊怖がりそうだし。

白玉楼に着こうかという頃。俺はリリーが震えている事に気がついた。
「大丈夫だってリリー。怖いことがあったら俺が絶対に守ってやるから」
春度のノルマのためにも。
「絶対に…守る…。あぅ…」
真っ赤になっているリリー。確かにそこだけ反復すると恥ずかしい事言ってるな。
お？頭から湯気が出てきた…。そして一緒に春度も溢れ出てきた。もったいないから回収回収っと。
「なにがなんでも…命に代えても…」
「そこまでは言ってないから」
「守ってくれないんですか！？」
「いや、守るけど」
春度の供給止まったら困るの俺だし。

そんこんなで白玉楼へと帰還したのだった。

第十五章　傭兵と春告精（後書き）

個人的に

シュウ　は　リリー　を　拉致した　。

のくだりがお気に入りだったりします。

第十六章　傭兵と食材（前書き）

リリーは白玉楼に到着したが…

第十六章　傭兵と食材

リリーをお持ち帰り（拉致）したシュウは白玉楼まで帰ってきていた。

「ただいま～」

「あら、どうしたの？随分早いのね、シュウ」

「あぁ、こんなものを拾ったんだが」

そう言ってリリーを幽々子に渡してみる。

「おいしいかしら？」

「どうだろうな？妖精だしな」

「で？どうしようかしら？この子」

ちなみにこの時リリーは涙目どころか号泣寸前である。おそらく

「どうしようかしら（どう調理しようかしら）」と聞こえていたのだろう。

「とりあえず妖夢にも相談しますか」

「そうね、じゃあシュウはその子の事見ててもらえるかしら？」

「了解」

自室にリリーを招きいれた。するとリリーは少しほっとしたのか号泣はしなかった、が。目が絶望に染まっている。食べる訳がないのに。

「シュウさん」

「ん？」

「食べるために捕まえたんですか？」

「いや、あれは所謂冗談でだな。マジで食べる訳じゃないぞ？」

「ホント、ですか？」

瞳に少し希望の光が宿る。なんか面白いな、この子。もう少しからかってみるか。

「たぶん、ね」

「た、た、たたたたぶんって、な、なんですか！？やっぱり食べ

るんですか!?」
「妖精はあんまり美味しそうじゃないし、俺に至っては人間だし。しかも外来の」
「へ?外の世界から来たんですか?」
「ん?まぁ」
「どれくらい前ですか?」
「もうすぐ二年になるかな」
「それしか経ってないのにそんなに強いんですか!?」
「俺なんて一人じゃ未だに大した相手と戦ってないんだよ。サポートだったり、相手がボロボロだったり、模擬戦だから手加減されてたりしてね」
「そうなんですか?」
「だからまだまだ半人前だな、俺は」
そんな風に話していると外から妖夢の声がした。
『妖夢、早くシュウのところにいきなさい』
『一体どうしたんですか?』
『早くしないと「食材」が逃げるわ』
『鶏でも捕まえたんですか?にしてもシュウのところにいるってのが分かりませんが…』

「妖夢が帰ってきたみたいだな」
「そうなん…で…すか…?」
再びがくがくと怯え出すリリー。だから妖精は食べられないってば。
そして開かれる扉。ビクゥッ!!と肩を震わすリリー。妖夢と幽々子が部屋に入ってきたのだ。
「幽々子様、どこにあるんですか?と言うかこの子はだれです?随分春度が高いようですけど」
「だからその子が食材よ」
「妖精はたべられません!!」

「えぇー、妖夢はどんな味がするのか気にならないの？」
「なりませんけど…。と言うかどこで捕まえたんですか？」
「あぁ、それは俺が。リリーが襲われているところを救助してそのまま連れてきた。これだけの春度が出てくるんだ、冥界にいてくれれば随分楽だろう？」
「なるほど、そういうことね」
ん？妖夢、ちょっと不機嫌？と言うか一瞬拗ねた感じの表情をしたきがしたんだが。
「ねぇ、妖夢。ホントに食べないの？（じゅるり）」
「食べません（即答）」
「あ、あの。私はこの後どうなるんですか…？」
「幽々子様、ここに住まわせてもいいですか？」
「春度のためでしょう？全く問題ないわ（じゅるり）」
「そういう真面目な発言は涎を拭いてからにしてください」
妖夢がそっとタオルを渡した、が。それを噛んでもぐもぐしている。あぁ、そんな風に顎を動かしたらさらに涎が…。
「幽々子様、とりあえずお昼にしましょうか。シュウ」
「わかってる。手伝い、だろ？」
「うん」
妖夢と二人で台所に向かう。ふと後ろを向くと、リリーににじり寄る幽々子の姿があった。
哀れリリー。合掌。

第十六章　傭兵と食材（後書き）

…なぜだろう。幽々子　食欲ってイメージが…

第十七章　傭兵と妖夢（前書き）

…妖夢がキャラ変わってる…。
もう少し丸くいきたかったなぁ…

第十七章　傭兵と妖夢

妖夢と並んで台所に向かう。うん、やっぱり少し拗ねてるっぽいなぁ。　でもなんか可愛いな。

「シュウ？」
「ん？どした？」
「いや、じっとこっち見てたから」
「そうか？」
そんな風に会話をしながら台所に二人で並ぶ。
俺が人参を洗って皮を剥き。妖夢がそれを切っていく。ちなみに今日は肉じゃがだったりする。

トン、トン、トン…。

リズムの良い音がしている。やっぱりずっと家事をこなしていただけあって上手いな。あ、そうだ。一応聞いておくか。料理始めてから機嫌治ったっぽいな…。
「なぁ、妖夢」
「なに？」
「リリーってなに食べるんだろ―」

トン、トン、……ガッ！

何事！？
さっきまで普通に話してたのに、一気に不機嫌モード！？包丁がまな板の半分よりしたまで食い込んでるんですが！？
「別に要らないんじゃない？」

怖っ！包丁を野菜に叩きつけながら低い声で虚ろに呟くの止めて！
「よ、妖夢…？」
「ん？なぁに？（にこっ）」
「とりあえず包丁置こうか。そして包丁の切っ先は人に向けてはいかん」
「うん。知ってる」
「いや、だからとりあえず置いてくれ…。もしかして怒ってる？」
「なんで？」

一向に包丁を置く気配がない妖夢。
これって所謂嫉妬だよな…。って事は？…ここは戦略的撤退だな。
いや、命のために撤退しよう。さて、どう引くか…？

「シュウ、ちょっといいかしら？」
幽々子さんキター！！この助け船に乗るしかない！
「了解です。妖夢、ちょっと外すな」
「解ったけど…」
「そんなに時間はかからないわ。それに別に盗ったりしないから安心していいわ」
「べ、別にそんなこと心配してた訳じゃ―」
「じゃあ、借りてくわね～」

「幽々子さん、用事ってのは―」
「特にないんだけどね」
「え？じゃあ…」
「多分あの子、そろそろ独り言で本音を漏らすんじゃない？私は応援してるから、行ってきなさい」
全部お見通しって訳か…。期待に答えない訳にはいかない。
「ありがとうございます」

「あの子の事、よろしくね」
「了解です」
俺は妖夢の待つ台所へ向かった。

「もう、最悪…」
シュウが台所を覗くと妖夢は一人自己嫌悪に陥っていた。
「シュウはなにも悪くないのに…。と言うかさっきのは流石にないなぁ…。私って情緒不安定?いや、たぶんまだ慣れてないだけ。自分の気持ちに素直になれないのもきっとそのせいのハズ。だから―」
「だから?」
「だから私はシュウに…」
そこまで呟いて固まる妖夢。そして壊れかけのロボみたいにこちらを向く。ギ…ギ…ギギ…と言う擬音がとても似合う気がした。
そしてシュウを視界に納めて完全に硬直する妖夢。
「だから俺に、その先はなんだ?」
「……。」

妖夢　は　思考停止　に　陥った。

シュウが妖夢の肩を叩くとハッとしたようにこちらを見て、みるみるうちに赤くなっていった。
「シュウ…」
「ん?」
「どこから聞いてた?」
「もう、最悪…。あたりから」
「最初からじゃない…」
「まぁ、そうなるな」
妖夢はしばらく沈黙し、意を決したかの様に話し始めた。

「ねぇ、シュウ」
「なんだ？」
「さっきはごめんね、ちょっと、リリーさん来てから動揺してて。だからかな、嫉妬とか全部ぶつけちゃって」
「妖夢…」
「だって、邪な理由じゃなくてもシュウが女の子を連れてきたから。それにリリーさんもシュウに懐いてたし。ちょっといい感じになってて。私の方が先なのにって思ってててっ」
なにかが吹っ切れたのか一気にまくし立てる妖夢。ちなみに顔が真っ赤だ。
「ここまで聞けば分かると思うけど、やっぱり言葉にして伝えたいと思って」
そこで一旦区切りをつける。聞いてるこっちまで心拍数が上がってきた。
「私、シュウの事が、好き…だよ…」
やっぱりコイツは可愛いな。
「俺も、妖夢の事は好きだぜ」
「それじゃぁっ！その…」
「付き合おう」
「あ…うん」
やっぱり可愛い。

第十七章　傭兵と妖夢（後書き）

しばらく書いてなかったから恋愛ものが書きたかったんだ。
後悔も反省もしていない。ただ達成感はある。
しかしこの所為で今後の展開に困ってはいる。

第十八章　傭兵と白玉楼の日常（前書き）

ちょいと幕間的な

第十八章　傭兵と白玉楼の日常

その後俺たちは平穏な日々を送っていた。

妖夢がリリーを技の練習台にしていたり。

「リリーさん」

「はい？」

「技の練習台になってください」

「え？どうゆう意味で…。ちょっと、その木刀は一体…！？わ、わあぁぁぁぁぁ！迫ってきたぁ！」

「あ！逃げるな！…いや、動き回られた方が練習になるかな？とりあえず、当たったら痛いですよ？覚悟ぉぉぉぉ！」

「いやあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！（泣）」

幽々子さんがリリーに襲いかかってたり。

「ちょっといいかしら？（じゅるり）」

「嫌です！」

「食べたりしないから（じゅるり）」

「嘘です！食べないって言うなら、その涎はなんですか！」

「とにかく時間はかからないわ」

「こないで下さい！」

「待って～（じゅるり）」

「いやあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！（号泣）」

え？平穏じゃないって？いいんだよ。この程度は日常茶飯事だから。ちなみにリリーは運動すると春度が沢山にじみ出てくるので無

駄ではない。

俺は妖夢と並んで幽々子さんがリリーを追い回すのを縁側から見ていた。妖夢は俺の肩に頭をのせてきた。

「平和だね…」

「リリー以外はな」

「妖精だし、いいんじゃない？あれで」

「酷い言いぐさだな」

「なんだかんだで楽しそうだから、酷くもなんともないよ」

それと最近は春度集めも大変になってきていた。というのも、俺は春度を物質化して運んでいるから重いんだ、すごく。正直、つらい…。寒いし。

そんなこんなで五月になっていた―。

第十八章　傭兵と白玉楼の日常（後書き）

次回から動きだす！かも

第十九章　傭兵と「冬の終わり」の始まり（前書き）

遂に事態が動き出す―。

第十九章　傭兵と「冬の終わり」の始まり

朝。
霊夢は布団からでられないでいた。そこに魔理沙がやってきた。
「…寒い」
「おーい、霊夢。」
「寒いのよ」
「この部屋は割と暖かいな」
「これで？」
「おぅ、外は吹雪だぜ」
「もう五月よ？」
「そんなこと言ったって吹雪なのは事実だぜ」
「これはもう、異変と言っても差し支えないわ」
「だな、じゃあ解決にいこうぜ」
「言われなくても」

こうして霊夢と魔理沙は異変解決に向けて旅立った。
「霊夢、巫女服さむくないのか？」
「結界のおかげでちょうどいい温度よ」
「ズルいぜ」

一方紅魔館。
「咲夜、いるかしら？」
「ここに」
レミリアの一言で音もなく現れる咲夜。
「この部屋少し寒くないかしら？」
「すみません。直ぐに薪を足しますので」

「ちょっと待ちなさい」
「はい、なんでしょう」
「最近こういう事多いわね。なにか理由があるんでしょう？主に雪のせいで」
「…もう直ぐ薪や食料、血液のストックが底をつきますので。節約しようと思いまして」
「そう。じゃあ私から咲夜に主として命令するわ」
「なんなりと」
「この異変の主を叩いて春を取り戻しなさい」
「御意に」
　すると今までの風格はあっと言う間にきえて子供の様にレミリアは言った。
「あ、その前に毛布を頼むわ。寒いったらありゃしない…。うぅ…。」
　不意に素に戻ったレミリアに苦笑しながら毛布を届け咲夜は異変解決に向かった。

　紅魔館から博麗神社に向かう途中、咲夜は霊夢と魔理沙を見つけた。
「あなた達、こんなところでなにをしているのかしら？」
「お、咲夜じゃないか」
「咲夜は何しにきたわけ？」
「お嬢様の命によって異変解決に。」
「それは私たちの仕事だぜ」
「私の、仕事よ」
「まぁまぁ、いいじゃないか。頭数は多い方が楽だぜ」
「そうね、という訳で同行するわよ」
「別に。今回の首謀者は白玉楼にいそうね」
「根拠は？」

「博麗の勘よ」
「そんなことでいいの？」
「霊夢の勘は当たるからいいんだぜ」
そんなこんなで三人は白玉楼に向けて飛んでいった。

「幽々子様、博麗の巫女がこの気候を異変として動きだした様です。」
「そう」
「ほかには魔理沙と咲夜もいるな」
「シュウ、それ誰の事？」
「今来てる三人組のうちメイドが咲夜で魔女スタイルが魔理沙の事で」
「そうじゃなくて、どうゆう関係？」
ちょっと不機嫌な様子の妖夢。
「魔理沙は俺に弾幕を教えてくれた奴の一人で、咲夜はこの前の紅魔異変の首謀者の従者。紅魔館には偶にいくからそこで会うな」

俺たちは縁側でお茶を飲みながら話していた。
どうやら先ほどの話題に出てきた三人が動き出したようだ。そりゃそうだろうな、五月に吹雪がくれば異変意外の何者でもない。

「妖夢、分かってるわね」
「えぇ」
妖夢は半身に湯飲みをのせて台所に向かわせながら刀を取りにいった。半身、便利だなぁ…。お茶うめぇ。
「幽々子さんや、俺はどうする？」
「甘いものが食べたいわ」
「助太刀に行かなくていいのか？」

「妖夢なら大丈夫よ、ただしマズそうだったら向かってもらうわ」
「後手なんだな」
「余裕と言ってちょうだい」
そう言うと幽々子さんは俺が持ってきたみたらし団子をかじりながら桜を見ていた。と思いきや桜の前で幽霊に追いかけ回されているリリーをみていた。
「食べてみたいわ…」
聞かなかった事にしよう。

第十九章　傭兵と「冬の終わり」の始まり（後書き）

次回更新が遅れるかもです。あしからず

第二十章　傭兵と白玉楼防衛線（前書き）

妖々夢クライマックス！

第二十章　傭兵と白玉楼防衛線

三人は冥界に入ろうとして結界に阻まれていた。
「なぁ、霊夢。どうやって入るんだ？」
「さぁ？」
「さぁ？って…貴女がこっちだって言うからきたんだけど」
「頑張れば破れるんじゃない？」
「例えばこんな風にか？」

恋符「マスタースパーク」

ドォォォォォ――ン…

魔理沙のマスパによって結界に穴が穿たれた。そこから尋常じゃない量の春度が洪水の如く溢れてきた。
「やっぱりここだったわね。私の勘は間違ってなかったわ」
「むしろ間違ってたらナイフで剣山にしてたけど」
「なぁ、私頑張ったんだが…」
「結界が自己修復しないとも限らないし、入りましょ」
「おぉい！スルーは止めろよ！」
「暖かいわねこの中」
魔理沙しょんぼり。

「む？結界が破られた…。あそこか、侵入者は。幽々子様には手出しをさせない…」
妖夢は三人に気がつくと迎撃に当たるべく急行した。

「なぁ、この階段を上るのか…？」
「飛んで行くでしょ、普通」
「まぁ、そうだな。でも一度言っとかなきゃいけない気がしたんだ」
「戯言を言ってる場合？ここは敵地だと言う自覚が足りないんじゃないかしら」
「だそうよ、魔理沙」
「霊夢もだろ」
「二人にいってるの」

「こんなところに侵入者が」

三人のもとに着いた妖夢が殺気いっぱいに言った。
「早速敵のお出ましか」
「気を引き締めなさい」
「判ってるわよ」
「全員人間だな…。それでは、そのなけなしの春をすべて戴いていく！」
「来るぜ」

幽鬼剣「妖童餓鬼の断食」

妖夢は目の前で刀を一振り、その軌跡から大量の弾幕をばらまく。今回は相手が三人もいるためかなりのアップテンポで放ち続ける、が。相手はいずれも劣らぬ熟練者。すべてをひらひらとかわしながら針を、ナイフを、マジックミサイルを撃ち込んでくる。妖夢は片方の剣で攻撃し、かわしきれないものをもう片方で切り落とし半霊で打ち落としていく。拮抗しているように見えたのは一瞬でやはり妖夢は劣勢を強いられる。
（次ッ！）
妖夢はこのスペルを諦め次のスペルに移行する。

天上剣「天人の五衰」

妖夢から五方向に団塊が飛んでいくそしてそれらは一斉に密集した弾幕を解き放つ。

「うぉ！」

「集中力がたりないわよ、魔理沙」

「今のは予想外だったんだからしょうがないだろ」

「しょうがないじゃ済まされないことになっても知らないわよ」

「二人とも、おしゃべりはそれくらいにしなさい。次弾がくるわ」

「「了解」」

妖夢は内心かなり焦っていた。

（このスペルを前にして会話をする余裕すら見せている…。こいつら、ただものじゃない…。三人同時となると尚更マズイか…？）

三人はこの間も攻撃の手を休めてはいない。妖夢は思考に気を取られていた所為か数発被弾してしまう。その所為で、皮膚を薄く削ぎ、血が出ていた。その時の痛みで集中力が切れて弾幕が止まってしまった。

次に動いたのは霊夢だった。

霊符「夢想妙珠」

霊夢から大きめの霊力弾が射出される。そしてこのとき霊力弾にさえぎられて三人の視界から妖夢が消えた。

そしてこれは妖夢にとって大きな好機となった。

迫りくる霊力弾を一刃のもとに切り捨て無力化したのちに体が隠れているうちに次の宣言を行う。

人符「現世斬」

妖夢は最大速度で前に進むそして今まさに霊夢を切り伏せようとした時、横から焦り気味にスペルカード発動の宣言が聞こえた。

時符「プライベートスクエア」

ゆっくりと引き延ばされた時間の中で咲夜は霊夢を引き離そうとした、が。しかしその刃は浅くではあるがしっかりと霊夢の肩を切り裂いていた。

そして時間が元の速度を取り戻していく。そして霊夢は肩の痛みに顔をしかめ、反応出来なかった魔理沙と攻撃が致命傷を与えられなかった事に驚愕している妖夢に別の意味での焦りが生まれる。そこで咲夜は霊夢を後ろに立たせスペルカードを発動する。

奇術「エターナルミーク」

咲夜は前方に大量のナイフを射出する。その速度や内に内包されているチカラは通常の弾幕とは比べ物にならないものである。妖夢は二、三発被弾し傷が増えて集中力が切れそうだったため、追撃を断念し一旦距離を取ろうとした。そして視界の端で体制を整えてスペルカード片手にとてつもない魔力を込めている魔理沙を見つけた。妖夢の生存本能が、「鐘よ割れろ」とでも言わんばかりに警鐘を打ち鳴らしている。

恋符「マスタースパーク」

虹色の極太レーザーが妖夢に向けて放たれて、今まさに飲み込もうかと言う時、間に割って入る影があった。

隔壁「マテリアル・ウォール」

まるで色彩の欠いたかのような灰色の壁がベルリンの壁の如くそびえ立ち、そのレーザーを阻む。レーザーは壁を突き破らんとし、”砕けて”散っていく。そしてその破片は魔理沙へと降り注ぐ。

その場にいた四人の顔が驚きに染まっていく。

「幽々子さんから伝言だ」

”彼”は一言ずつゆっくりと語っていく。

「”おもてなし”をしたらこちらへの案内をよろしく、だそうだ」

その場に現れたのは白玉楼にすむ”人間”、シュウだった。

妖夢は幽々子からの”伝言”に反応した。

「幽々子様を危険にさらすわけには―」

「俺は幽々子さんが良いってんなら喜んで歓迎する、が―」

そこで一旦区切って、妖夢に一瞥をくれてから成年の男性特有のどすを利かせて、

「俺の妖夢を傷付けるなら話は別だ。絶対に撃ちのめす」

言い放った―。

――ｔｏ　ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

第二十章　傭兵と白玉楼防衛線（後書き）

次話までぶっ通し！

第二十一章　傭兵と…堪忍袋の切れ端（前書き）

続き！

第二十一章　傭兵と…堪忍袋の切れ端

前回のあらすじ

異変解決のため白玉楼に乗り込んだ霊夢と咲夜と魔理沙は迎撃にきた妖夢と戦闘を行う。
妖夢の決死の一手により霊夢が浅くはない傷を抱えるも魔理沙のマススパークが妖夢を襲う。
そして妖夢の危機を救ったのはシュウだった…。

咲夜はシュウと霊夢の延長線上にさえぎるように立って話を始めた。その後ろでは魔理沙が霊夢に何らかの薬を渡していた。おそらく魔法の森特製ポーションってところか。
「シュウ…どうして貴方がここに…？」
「それを知ってどうする」
「それによって対応が変わるわ」
「俺の対応は変わらない」
「どうしても私たちを止めると？」
「止めはしないさ。ただ、今は人生最高に戦いたい気分だってだけだ」
「あなた、戦闘狂？」
「いやなに、報復に燃えるしがない元傭兵さ」
「報復、ね…」
妖夢はシュウの様子に気圧されていたが直に平静を取り戻した様だ。
「シュウ、私は大した傷じゃないからそんな大げさな…。第一、幽々子様から通す様に伝言を預かってきたのはシュウじゃない」
「だから止める訳じゃない。それにこれは俺の踏ん切りの問題だ」

「勝ち目が無いのにかかってくるわけ？」
「男は感情に流されやすい、所謂馬鹿なんでね」
「ホント、馬鹿ねぇ。シュウも」
気がつくと霊夢が復活していた。魔理沙のポーションは随分即効性の様だ。
「まぁ、馬鹿な奴も悪くわないぜ」
魔理沙も出揃う。

「俺は一発デカいのブチ込んだら退却するさ。超度級の一発をな」
「そんなの教えていいの？」
「それに私は紅い霧のとき最初から全部お前の戦い方を見てるんだぜ？精々目新しいのを頼むぜ」
「さっさと終わらせるわよ」
「ソイツは俺も同感だがな。…妖夢。今のうちに白玉楼に戻ってくれ。幽々子さんに粗方の事は言ってある」
「無茶はしないで…」
「分かってる」
妖夢は白玉楼に向かっていった。

「貴方一人でなんとかなるとでも？」
「おいおい。下から出てくるあれはこの高さじゃ、流石にかわせるぜ？」
「駄弁りはこれくらいだ。いくぞ」　シュウは両手にチカラを溜めてスペルカード片手に口火を切った―。

右手に溜めたチカラを前方に放出する。そしてそのチカラは銃弾を形作り、前方に飛来する。
三人は難なくかわす。

「おいおい、しっかりしろよ、シュウ」
「こんな過疎弾幕張ってどうするのかしら？博麗の巫女の事なめてるの？」
「これが彼の本気？」
「いや、あの時の方が何倍も強い弾幕だったぜ」
「それじゃあこれは一体…？」
四人は淡々と弾幕をぶつけ合っている。
シュウは顔色一つ変えずに戦闘を続ける。これは「仕事」中のサインだ。つまりは傭兵だった頃のように…。そして戦闘を続けること二十分。不意にシュウは今まで持ったままぶらぶらさせていたスペルカードを掲げる。
「宣言だ」
低く響く声で告げる。
散符「キャニスターショット」
これはさほど難しいスペルではない。縦横１０発ずつ並べた弾の壁を無数に飛ばすものだ。大きく動けばかわせる。しかし今回のは様子が違った。壁が大きいのだ。縦横５０は並んでいる上に二つずつなのだ。
その壁が射出され、三人は危なげなくかわす。しかし壁が通り過ぎると三人の視界からはシュウが消えていた。
壁の一つに隠れて反対まで抜けたのだ。
そして反対から同じ様に壁を放つ。
「なぁ、なんかおかしくないか？」
「そうね、なにか大技を仕掛けてくるかと思ったんだけど―」
「そうじゃない。シュウの弾幕なのに―」
「物質じゃない」
「ご名答だ、咲夜」
「たしかに、シュウらしくないわね。シュウなら相手の弾幕を固め

て利用するような戦い方をするはずだけど」
「でもあの目、本気(マジ)だぜ」
「それに流れ弾が何かにぶつかる前に消えてるのも気になるわ」
「こんなに周りに魔力が充ちてたら私の魔法の威力が増すだけだってのにな」
三人は気がついていないが、シュウの弾幕によって三人は少しずつ中央に寄せられていた。
そして三人が触れ合うぐらいに近づいた時、シュウは次のスペルを発動した。
「ハ、ハハッ…この時を待っていた！スペルカード！」
罪人「黒鉄宮の牢屋(ジェイル)」
宣言と同時に「今までの戦闘によって充満していたチカラ」が三人のもとに集まり漆黒の輝きを放つ大理石の様な檻が現れた。縦横三メートル程の立方体である。そしてその檻の中には無数の機関銃、ガトリング、対物ライフルと言った重火器が中心に向けられている。かなりの大技な為か、シュウの息が上がっている。
「まずい！」
「何とかして突破するわよ！」
「檻の隙間も透明な何かに阻まれてるぜ！」
「こうなったら、夢想封印で…ッ！」
「無駄よ！物質化が付与されてる！」
「じゃあどうしろってんだ！」
焦りからか平静を失いつつある三人。それは以前に銃の威力をシュウに見せつけられていたからであり、シュウの本気の目が歯止めを失っていると判断したからである。
「終わりにしようぜ！？なぁ！三人…と、も…。お…？」

しかし力の限界だったのか、不意にシュウから力が抜けた。そして意識を失った様に落下し、階段の踊場脇の芝生に墜落した―。

「うぅ…。ん…あ…？」

シュウが目覚めた時には自室に寝かされていた。

「シュウ！」

「うぉっ！？」

そうして目覚めたシュウに飛びついてきた人影が。妖夢だ。彼女は泣いているようだった。

「無茶しないでって言ったのに！…ホントに……。…ばかぁっ！」

「う、悪ぃ…」

「シュウは、人間なんだから…。あのくらいの高さでも、落ちたら死んじゃうんだよ？…そんなはいや…っ！」

妖夢はつっかえつっかえにまくし立てる。

「ホント、悪かったと思ってる。約束破って無茶したことも、心配かけたことも。だから、今回だけは許してくれないか？な？妖夢」

シュウは妖夢の背中をさすりながら優しく囁いた。

「罰として、しばらく寝かさないから」

「え、あ、おぅ。」

自分で言っといて紅くなる妖夢と、突然の展開に驚くシュウ。そこに闖入者が。

「妖夢～。シュウの具合はどうかしら？」

「「はいるわよ（ぜ）」」

今回の首謀者、幽々子と異変解決に来た魔理沙、霊夢、咲夜の合計四人だ。

「え？ちょっ…」

ちなみに今は布団に寝かされているシュウと上に覆い被さる妖夢。と言う体制だ。この状態はいろいろとまずい。そう思った二人だが離れる前にふすまが開かれた。

「「……。」」
「あらあら、出直そうかしら？」
沈黙は妖夢とシュウの二人。それをみた幽々子は主の痛い気遣いによってふすまをしめて、「三人とも、お茶にしましょ」と言って去っていった。

そしてその場には気まずい二人と、ふすまの間から覗き見する魔理沙とリリーだけが残された…。

第二十一章　傭兵と…堪忍袋の切れ端（後書き）

という訳で妖々夢完結（？）です。
でわでわ。

第二十二章　傭兵と春の宴（前書き）

タイトルまんまです

第二十二章　傭兵と春の宴

後日。俺は再び宴会の準備に追われていた。紅霧異変の後の宴会もそうだったが、幻想郷では異変を解決すると宴会を開く風習でもあるのだろうか？ちなみに現在俺の中では、宴会がしたくて異変を起こしたのではないかと言う疑念が頭をよぎっているところだ。今回は首謀者側だったからか宴会の主催者にもなっており、最後まで裏方な気がしてならない。紅魔館みたいに妖精メイドもいないし。春の妖精ならいるけど。

実際始まってみるとそんなに大変でもなかった。と言うか家事をこなしているうちに手際が良くなったんだろうか。今回は花見の宴会だからかみんな料理よりも酒の消費の方が激しい。え？酒はどっから持ってきてるのかって？そいつは霊夢が連れてきたちびっこな鬼のひょうたんから無限にわいてきてるから問題ない。…しかしあれは誰なんだろうか？

桜が散り々り少女たちの談笑する声が満たされていく。紅魔館のメンツも来ているようだ。

「シュウじゃないですか」

「ん？おぉ美鈴じゃないか」

「咲夜さんに聞きましたよ、異変解決にやってきた三人相手に大立ち回りしたそうじゃないですか」

「いやぁ、そんなんじゃ…。あの時は、なんというか頭のネジが飛んでてっていうか…自制心が吹き飛んでてっていうか…」

「それでもあの三人を追い込んだんですよね？私としてもいろいろと指南した甲斐がありましたよ」

「たしかに気の練り方とか習ってなかったら一瞬で被弾して終わりだったきがするな。ありがとな、美鈴」
「たはは…照れますよ…」
二人で談笑していると今しがた話題に上った霊夢と魔理沙がやってきた。ちなみに咲夜はレミリアの隣に控えている。
「なるほど、よく動くと思ったら中国直伝だったってわけか」
「美鈴です」
「あの時のシュウはみててぞっとしたわ…。闘気というか殺気というか…」
「いや、だからあの時は頭に血が上っててだな」
「それでもいい動きだったわよ」
「たはは…そんなに褒めないでくださいよぉ」
「中国のことじゃないぜ」
「美鈴ですってば…」
「にしてもシュウ、随分と妖夢にぞっこんのようね？」
「だな、軽く被弾しただけだったのにあんなに逆上するぐらいだもんな」
「え？シュウって妖夢とそういう関係だったんですか」
「知らないのか？」
「むしろ知られてたら怖いぞ」
「私は知ってたぜ」
「私も噂では聞いてたわよ」
「な、なん…だと…ッ！？」
「だって文々。新聞にのってたぜ？」
「編纂者（へんさんしゃ）誰だ！出てこい！」
「あややややっ、呼ばれて飛び出る清く正しい射命丸ですが？」
「ほんとに出てきた！？」
「いやぁ呼ばれましたし。それに今日はこの『春雪異変』の取材に来てましたから。あとあんなに大声で呼ばれたら来るしかないじゃないですか。しかもこのメンツって割と今回の異変の根幹をなすメ

ンバーですし」
「私は門番してたんで関係ないですけどね…」
「あ、いたんですか」
「……。」
「さて、それはそうとシュウさん。ずばり今回の異変解決において最も三人を追い詰めた訳ですが、その強さの秘訣は？」
「秘訣って…。ただ、必死だっただけで…」
「愛のパワーだぜ」
「愛のパワーね」
「おい！なに勝手に答えて―」
「なるほど、愛のチカラですね」
「俺の話をきけえぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！」
「惚気ですか？聞きますが」
「そうじゃなくてだな…」
若干頭痛を催してきたシュウであった。

後日談ではあるがこの時の記事は
『博霊の巫女を恐怖させた男の強さの秘訣に迫る！！』
の見出しで売り出され、大好評だったようだ。

幕間　スキマの疑念（前書き）

宴会での一幕。

幕間　スキマの疑念

春雪異変後の宴会の一幕。

「紫、いるんでしょう？」
「えぇ久しぶりね、幽々子」
「良い寝覚めかしら？」
「宴会の声で起きるのは悪くないわ。これから毎年やってほしいくらいにはね、でも」
「でも？」
「この後の作業を考えると、ねぇ」
「なんかあったのかしら？」
「結界がほつれ気味でね。意図せずに大きな損傷が出来たりすることが多かったわ。少し落ち着いた頃に眠ったとはいえ、藍には苦労かけただろうね」
「藍なら偶に遊びに来たりしてたわよ？」
「…。どういうこと…？聞いてみた方が早いか、ら～ん！！」
「はい。どういたしました？」
「結界の方はどう？」
「それがですね、紫様が眠りに着いてから一度も輝すらありません。それどころか内部圧力も低下しています」
「ますます奇怪ね」
「紫様の処置ではないのですか？」
「なにが？」
「シュウ、と言う青年です」
「聞き覚えないわ」
「そう？紫、あれがシュウよ。白玉楼（うち）に住んでるわ」
「…もつものは持ってるみたいだけど、見おぼえないわね」

「でもシュウは紫にスキマ経由で幻想郷に飛ばされたって言ってたわよ？」

「記憶違いのはずもないわ。となると一体どういうことなの…？」

紫は暫く考えてから言った。

「藍、幽々子、彼には注意しておきなさい。決して死なしてはいけない。彼は鍵になるかもしれないわ。幻想郷が存続するための、唯一の鍵に、ね―」

幕間　スキマの疑念（後書き）

実は八雲一家を出さなかったのには意味が―！？

…あったんだろうか。

とにかくちょいと布石をば

第二十三章　傭兵とロリコン疑惑（前書き）

タイトルからも判りますが。

シリアス？なにそれ美味しいの？

やっぱり書きたい物は変わらないんだよ。

第二十三章　傭兵とロリコン疑惑

春雪異変から二か月。
幻想郷は初夏を迎えていたー。

「さてと」
「あれ？シュウ、どこいくの？」
「魔理沙のとこいってくる」
「なんで？」
「言ってなかったか？今日は魔力の鍛錬にいくんだ」
「…聞いてない」
「悪ぃ、今度からちゃんとするよ。じゃあ、いってきます」
「早く帰ってきてね」
「了解。昼は適当に食べるからいいや」
「りょーかいっ。夜は豪華にするって幽々子様がいってたよ」
「絶対に帰ってくるさ、無くならないうちに」
妖夢に見送られ、シュウは軽快に飛んで行った。

――のは最初だけだった。
「……暑ぅ」
シュウの頬を汗が流れていく。飛んでいるため風に当たってはいるのだが、その風も生ぬるい。
「暑ぢぃぃ…」
口に出したところで変わりはないのだが。
しばらく飛行していたらあたりが涼しくなった。と言うかその一帯のみが涼しいようだ。なんとなくその森に降り立ってみた。
そこにあったのは黒い球だった。と言うか球状の暗闇が高さ一メ

ートルぐらいのところに浮かんでいた。これ、ルーミアだよな？そしてその暗闇から氷の羽がはみ出している…がむしろ垂れているの方が適切かもしれない。

シュウはその暗闇を物質化してみた。するとその球体は落下し、中から「ぐえっ」と言う声が二人分聞こえた。そしてなかからくぐもった声も聞こえてきた。

「今度はなによ…」

「いたたた…。なにがおこったのかー？」

「知らないわよぅ…」

どうやら二人は事態を理解していないようだ。さらに言うとチルノはかなり参っているようだ。そこでシュウの目にとまったのは半分ほど飛びだしている氷の羽。試しにつついてみた。

「ひゃぁあ！」

「耳が痛いのだー…」

「い、いまのはなんなのよ！？」

「しらないのかー」

なんだか面白くなってきたので今度は掴んでみた。

「ふひゃあ！ひゃう！な、なにが、あぁぁぁぁ！」

「チルノはどうしたのかー？」

シュウはこのままでは何かがマズイ気がして弄るのを中断し、その黒い球を転がして（持ってみようとしたら結構重かったから持つのが面倒になった）霧雨邸に向かった。

羽が球の下に来るたびに「ふぎゃあ！」やら「いったぁ！」とか言うのを聞きながら。

「なぁ、シュウ」

「どうした？」

「これ、なんだ？」

ところ変わって霧雨邸。魔理沙は俺が転がしてきた黒い球をみて興味をもったようだ。

…と言うか持たなかったら俺はコイツを疑う。
「拾ったんだ。この羽をつかむとしゃべるんだ」

―ぎゅむっ―

「ふぁ、あああ！」
「いい加減耳が慣れてきたのだー」

「…シュウ、ロリコンも程々にしとけよ？」
「どうしてそうなる」
「だってよぉ、今のってどう考えても『嬌声』だよな？」
「そうか？」
「いや、そうだろ」
試しに物質化を解いてみた。するとチルノを抱き枕のようにして涼むルーミアといろいろな意味でぐったりしているチルノが出てきた。

「シュウ、これをみて何とも思わないのか？」
「ルーミアが涼しそうだな」
「そうじゃないだろ」
「涼しいのだー」
「涼しいってよ。ほらみろ俺は間違ってない」
「そういうことじゃなくてだな…」
額に手を当てて嘆息する魔理沙。なにが言いたいんだか。

「じゃあ、チルノをみてなんか思うところはないのか？」
「暑そうだな。ルーミア、ちょっと離れてやったらどうだ？」
「せっかく涼しいのに。離れると暑くなるから”やっ”なのだー」
「お前、それ狙ってるのか？」
「なにがなのかー？」

「お前ら…」
魔理沙は本格的に呆れているようだ。全くもってわからん奴だ。

その後ぐったりして動かないチルノに当たらないように弾幕を打って練習したりした。
「なぁ、魔理沙」
「んー？」
「魔法ってどういう原理なんだ？」
「どうした？急にそんなこと言いだすなんてさ」
「いや、気になっただけだ」
「なんだったら教えるぜ。…パチュリーが」
「じゃあ行くか、紅魔館」
「おぅ」
俺たちは身支度を始めた。魔理沙は「どうせ行くなら中国と弾幕でもするか」といって帽子に「ボムと書かれた瓶」やら「栓付きのフラスコに入っている液体」とかを詰め込んでスペカをチェックしてから出てきた。俺はクーラー、もといチルノを持っていこうとした、が。魔理沙にめっちゃ『じとーっ』って感じで睨まれた上に「妖夢に今までの行為を誇張した上で『シュウはロリコンでした』って伝えるぞ」と脅されたので、しょうがなくクーラーをルーミアに預けて俺たちは紅魔館に向かった。

「ここがいいのかー？」
「ひゃう！」
「こっちなのかー？」
「あ、あああああ…」
「はむっ」
「あぅ」

後ろでじゃれている二人は涼しそうでうらやましい限りだ。

第二十三章　傭兵とロリコン疑惑（後書き）

久しぶりに百合が書きたかった。
…どうしてこうなった。

ルーチルになってますが大チルも忘れてｎ（ｒｙ

ちなみにその話はまた今度、覚えてたら短編にしようかと。

第二十四章　傭兵と哀れな門番（前書き）

あの人が出てきますよ、あの人↑

第二十四章　傭兵と哀れな門番

俺は魔理沙と紅魔館に来ていた。
パチュリーに魔法の原理を教わるためだ。え？隣に居るんだから魔理沙に聞けって？こいつが真面目に答える訳がないだろう？
「なぁ、シュウ。なんか今失礼なこと考えなかったか？」
「誰も魔理沙が貧乳だなんでいってｎ―」
「鉄拳制裁！！」
「ぐぼぁっ！」
ごまかしに失敗した…。いってぇ。
「ったく。こっちに来たばっかりの頃のお前はもっとかっこよかったのになぁ。どうしてこうなったんだか…」
「お？告白？」
「…ほんと、どうしてこうなった…」
「否定しないのか？」
「過去の話だからな」
「そうか…おしいことしたな…。まぁ俺の一番は妖夢だがな」
「はいはい、言ってろ」
そんな風に話しながら歩いていると門に差し掛かった。
「おや？どうも二人とも」
「魔理沙、お前は妖夢の良さを分かってない」
「なぁその話今度じゃ駄目か？」
「無視しないでくださいよ！」
「今度一日がかりで教えてやろうじゃないか」
「遠慮するぜ」
「二人とも！」
突如として現れた美鈴が俺たちの目の前に立ちはだかった。おや？こいつは今までどこにいたんだ？いつ間に光学迷彩は幻想入りし

たんだろうか？それにこいつが起きてるだなんて…。今日はグングニルでも降るんじゃなかろうか。
驚いているのは魔理沙も同様の様で目が点になっている。
「中国、どうやって瞬間移動を体得したんだ？」
「最初からいました！あと美鈴ですから！」
「美鈴。俺はわかっているたぞ」
「シュウ…」
「光学迷彩を着ていたんだろ？」
「河童の発明品をどうして中国が…？」
「普通に門番してましたから！…ってだから中国じゃｎ―」
「じゃ、お邪魔するぜ」
「美鈴、俺も入るぞ」
「ダメです！私を美鈴と呼ぶまでは！」
「そんくらい安い用だぜ、美鈴」
「俺は最初から美鈴って呼んでるけど？」
「え？あ、じゃあ今度から美鈴で」
「へいへい」
なんだか肩すかしをくらったように外を向く美鈴。そしてにやりと笑う魔理沙。
「そうだ、弾幕しようぜ！」

恋符「マスタースパーク」

「あ、はい。じゃあ手加減はなｓ―」
後はご察しの通り美鈴が倒れ伏しているだけだった。

第二十四章　傭兵と哀れな門番（後書き）

美鈴、本当に、すまないと思っている…ッ！

まぁ、イメージはなかなか拭えないものですから↑

彼女には健気に生きて貰いたいです。

第二十五章　傭兵とメイドのカメラ（前書き）

台詞多いです。
読みづらかったら教えてください。もしかしたら治るかもしれません。

第二十五章　傭兵とメイドのカメラ

俺達は門で多少ごたごたしたものの、無事館内にまで潜入をはたした。　そして廊下を歩いていると咲夜に遭遇した。
「二人とも、いつの間に来てたの？」
「ついさっきだぜ」
「そう、美鈴は何をしているのやら」
「中国は寝てるぜ」
「…後で着替えに懐炉仕込むことにするわ」
「夏にそれは地獄だろ…。ところで咲夜は何してたんだ？」
「愚問よ、シュウ。もちろんお嬢様の観察に決まって…掃除よ」
「そうか。ところで隠しカメラはＤＶＤに変えたか？」
「ッ！？なんで変えた事を知って―」
「え？あるの？」
咲夜は凍り付いたように動きを止めた。鎌を掛けたつもりだったんだが…。今なら間に合うと思ったのか言い訳を始める咲夜。無駄だろ…。
「あ、ある訳がな―」
「シュウ、知らなかったのか？」
そして魔理沙の一言でまたしても驚愕から凍り付く。壊れかけのロボットの様に振り向く咲夜。かなり動揺しているようだな。こんな姿はなかなか見られない、珍しい事もあるもんだ。
「あぁ、知らなかった。詳しく聞かせてくれ」
「そんなの幻想郷の常識だぜ。寺子屋で聞いたことないか？」
「そういや子供がそんなことを言ってた様な…」
「それじゃあ私にもきかせてくれないかしら？」
幼さを残しながらも貫禄が漂う少女の声がした。レミリアの登場

だ。
　完全に思考停止、行動停止になった咲夜。　完璧で瀟洒なメイド、崩れたり。
「お、お嬢様…」
「咲夜、これは？」
　レミリアが取り出したのは赤いハンディカメラ。咲夜が目を見張る。
「それは…」
「ごまかしたりしたら、めっだからね」
「ッ！」（ドバドバ）
「咲夜！？」
　おろおろし始めるレミリアとそれを見て更に鼻血が溢れてくる咲夜。
「咲夜！死んだら駄目よ！」
「お嬢様…。私は…、幸せです」
　そう言ってゆっくりと目を伏せる咲夜。
「咲夜あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

「…なぁ、魔理沙」
「なんだ？」
「なにこの寸劇」
「紅魔館名物、主と従者の愛の物語だぜ」
「勝手に名物にしないで下さい」
　そう言って現れたのは小悪魔。
「よぉ、小悪魔」
「こぁじゃないか」
「シュウ、なんだその呼び方。小悪魔も迷惑じゃないのか？そんなあだな付けられて」
「いいじゃないですか、こぁ。可愛いですし」

「…。最近腑に落ちない事が多すぎだぜ…。まぁ、全部本人がいいって言ってるからいいんだけどよぉ…。なんだかなぁ」
「魔理沙、なにブツブツ言ってんだ？」
「いや、なんでも。と言うか小悪魔、要件はなんだったんだ？」
「こぁ！忘れてました。パチュリー様から魔理沙さんの事を迎えにいってくるように言われまして」
「そうかご苦労だったな。じゃあ、そろそろ図書館にいくか」
「だな」
「こっちです」
そうしてようやく図書館にたどり着いたのだった。

第二十五章　傭兵とメイドのカメラ（後書き）

咲夜崩壊しました。
咲夜ファンの皆さんすいませんでした。

第二十六章　傭兵と魔法使い（前書き）

長い寄り道の末に図書館にたどり着いた…

第二十六章　傭兵と魔法使い

俺、この図書館にくるたびに思うんだが。

この図書館、広すぎるだろ。絶対迷う。俺なら一時間は余裕だぜ。

しかも全部パチュリーの蔵書だろ?で、こんだけの量を読み終わっているとは思えないから、

積ん読し過ぎだろ。読む気ないなら売れよ。地震きたらしぬぞ。

とも思うのだ。

「よぉ、パチュリー」

「図書館来るのに寄り道しすぎよ」

「私は紅魔館に来たんだぜ?」

「あら、魔法の原理は教えなくていいの?」

「なんで知ってるんだぜ?」

「前に言ったじゃない。練習の時は水晶から視とくから、後で欠点が有ったら伝えるって」

「そうだったか?」

「昨日も報告に来たじゃない。練習を１０時頃に自宅で始めるって」

「そうだったぜ」

そんなの聞いてないぞ。てことはあのロリコンがなんだかんだのくだりも聞かれてたのか…。誤解されてなければ良いが。

「にしてもこのタイミングでシュウが原理に興味を持ってくれたのは僥倖だわ」
「どうしてだ？」
「最近の練習を思い返してみなさい。普通に弾幕やってるのと変わらないじゃない」
確かに。今日だってクーラーの周りに弾幕打ってただけだし。
「だからここいらでシュウには『魔法』を覚えてもらおうと思ってたのよ」
「なんだって？つまりシュウを魔法使いにしようってのか？」
「だいたいあってるわ」
「そうなったら私のアイデンティティが…。人間の普通の魔法使いが二人になっちまう…」
「大丈夫よ。こっちは人間の普通を超えた魔法使いにするから」
「私の立場はどうなる！」
「じゃあ人間の普通を越えた魔法使いを超えた魔法使いになれば良いんじゃないかしら？」
「それ、イタチごっこだろ」
「そ、そうだぜ！」
「とにかく魔理沙はシュウが魔法使いになることに反対なの？」
「それは…。魔法談義が出来る奴が増える分には良いけどよぉ…。立場が…」
「シュウは？なりたいの？」
俺か…。確かに魔法ってロマンがあるよな…。便利そうだし。…ッ！魔法が使えるって事は厨二なあの技も！？いやいや、痛すぎるだろ…。
「シュウ？聞いてるの？」

「え？あぁ。ちょっと自分の可能性について考えてた」
「で、なりたいの？」
「そりゃ、なれるなら。ただし名乗るつもりはないがな」
「どうしてだ？同情ならいらないぜ」
「いじけるなよ、魔理沙。俺はまだ傭兵としての自覚を捨てられていないからってだけだ。要するに他の職業は名乗りたくないって言うか…」
「そういうもんか？」
「名乗る名乗らないは自由だけど、魔法を使うからには魔法使いとしての自覚も必要よ」
「それは、そうだな。職業にもなるものだ。他の人が想い込めてるものを軽んじるつもりはないさ」
「そう。それじゃあまずは原理、だったわね――」

こうしてパチュリーのもとでの「魔法」の授業が始まったのだった。

――が、

（ヤベェ、最初から何言ってるかまっったく判らん。あとで魔理沙に聞きなおそう）

前途多難であった。

第二十六章　傭兵と魔法使い（後書き）

シュウ、クラスアップのチャンスです。（カタカナ多いｗｗｗ）

第二十七章　傭兵とある夏の日常（前書き）

シュウの新たな日常

第二十七章　傭兵とある夏の日常

「じゃあ、いってくる」
「…」
「妖夢？」
「最近、随分と熱心に練習してるみたいだけど―」
「無理はしないさ」
「あ、うん。それはそうなんだけどさ…」
「だけど？」
「私のこと、ほったらかしになってない？」
「そんなつもりじゃないんだが…」
「それは分かるけど」
「でも、強くなりたいんだ。妖夢に心配かけないようにも」
「シュウ―」
「じゃあ行ってくるから」
「あ…」

そう言い残してシュウは紅魔館に飛び立った。
（なんだか最近、さみしいな…）
「妖夢、ふられちゃったみたいね」
「幽々子様…。そんなんじゃないですけど…」
「追いかけてみたら？」
「大丈夫ですよ、シュウなら」
「そういう意味じゃなくて貴女の心情を配慮したのだけど」
「なんか言いました？」
「なんでも～。それより妖夢。水羊羹が食べたいわ」
「あ、じゃあ買ってきますね」
「ついでにおまんじゅうとカステラとみたらし団子と―」

「そんなに買いませんからね」
「…ケチ」

シュウは紅魔館に向けて飛びながら空を飛んでいた。
(妖夢にさみしい思いさせちゃってるな…。なんとかしてやりたいが。まぁ、後で少し休みを取ることでも進言してみるかね)

ーゴッ!ー

考え事をしていた所為か何かに思いっきりぶつかってしまった。
「いってぇ…」
「あいたたた…。どこみてんのよ!周りに注意ぐらいしとき――あっ!」
「悪ぃ。こんどから気をつけ――お?」
ぶつかったのはクーラーことチルノである。チルノはシュウを見るなりこの前の事を思い出したのか一度真っ赤になり、その後ものすごい勢いで逃げていった。その先には大妖精とルーミアがいた。
二人はこっちに近づいてきた。
「お久しぶりです。シュウさん」
「私はそんなに久しぶりでもないのだー」
「おぅ。ルーミアはこの前あったな。大妖精は紅霧異変のあとの宴会以来か?」
「そうですね」
そこで会話を聞いていたチルノが急にさけんだ。
「あ――!なんか見覚えあると思ったらあの時の!」
「覚えてなかったのか」
「リベンジよリベンジ!さいきょーのあたいの前にひれ伏しなさい!」
「ルーミア、いつもこんなんなのか?」
「そうなのだー」

「無視するとはいい度胸ね！氷漬けにしてやんよ！」
「そのネタはどこで仕入れたのやら…」
「早苗に教えてもらったのだー」
「幻想郷にネタがあるのはその所為か…」
チルノが冷気を振りまけ始めたので大妖精やルーミアに当たらないように物質化しておく。すると思ったより冷気が多く、一瞬で氷漬けになったチルノは落下していった。
「え？マジ？」
「チルノちゃん！」
「落ちたのかー」

―ドボーン―

湖に墜落したようだ。氷なので水に浮くだろう。なので暫く三人で待っていたら氷の塊（チルノ）が浮かんできた。溶けるまで時間がかかりそうなので俺は紅魔館に向かうことにした。シュウはそこでようやく約束の時間を大幅に過ぎている事に気が付いたのだった…。

第二十七章　傭兵とある夏の日常（後書き）

チルノフラグ消失ですがなにか？

いいんです、本妻がいるので↑

第二十八章　傭兵と魔法科実技試験（？）（前書き）

魔法を習い続けたシュウ。その成果は如何に…？

第二十八章　傭兵と魔法科実技試験（？）

約一週間後。

「シュウ、大丈夫かしら？」
「大丈夫だ、問題ない」
「死亡フラグだぜ、それ」
「だからなぜ幻想郷でネタが通じるんだ」
「早苗に教えてもらったぜ」
「またあいつか」
こんど早苗とは話をしてみたいものだ。

シュウは魔法の鍛錬をしていたのだが、魔法の回路を間違えたまま魔力を流してしまい、ちょっとした爆発に巻き込まれてしまっていた。
「シュウ、集中力が切れてきてるから休憩にしましょ」
「そうして貰えるとありがたい」
「咲夜」
パチュリーが呼ぶと音もなく咲夜が現れ、アイスティを準備して去って行った。…正直俺は緑茶派なんだが…。まぁ良いか。
ちなみに現在いる図書館はパチュリーの魔法のおかげで快適な温度に保たれている。魔法すげー。
すると厨房からクッキーを盗んできた魔理沙が俺の組んだ回路をみて苦笑いした。
「どうした、魔理沙」
「いや、ここの間違い私もやったなぁって思ってさ」
「そうなのか？」
俺がボーっとしながら答えるとパチュリーが小さな声で「魔理沙

は意外に努力家タイプなのよ」と教えてくれた。俺としては失敗品やら研究ノートであふれている家を何度か見てるから意外という印象はなかったが。

その後も三人で回路を見直したりしながら時間を過ごした。

翌日の昼食後。

俺は試験と言われて結界に閉じ込められていた。

「シュウ。これを魔法だけで突破しなさい。そしたら今日は解散ね」

「了解。」

よく見ると結界が二重になっているのが分かる。手前は火の結界で、奥が水の結界だろう。

火だけを見て水の魔法を放つと水の結界に阻まれると言う訳か。

それじゃあ―。

「シュウ、それじゃあ始めて頂戴」

「ちなみに私は２０秒で破ったぜ。…マスパでな」

「…。言っとくけど威力だけで敗れるのは魔理沙くらいだから真似しない方がいいわよ」

「大丈夫だ、真似する気はないさ。と言うか無理だろ」

そういいながら俺は水と電気を同時に展開する。そして最初に水をぶつけて、火の結界を壊す。ここまでは順調だ。そしてこの水のなかに電気を通して、水の結界のなかで弾けさせる！

すると俺の思惑どおり結界は内部でショートを起こし、崩れ落ちた。その時上から水が落ちてきたが、この程度はご愛嬌だろう。

「思ったよりは早かったわね、２６秒よ」

「まだまだだな」

「属性を把握してるところをみると魔理沙より優秀じゃない？」

「弾幕はパワーだぜ」

「あいにくこれは日常でも使える魔法よ」

そう、この魔法は日常生活で使えるのだ。つまりこの魔法で出し

た水。これ、飲料水らしい。氷もしかり食用とのこと。魔法ってホントなんでもありだな…。

「じゃあ、魔法のスペカも作れるな」

「そうね、でもまだスペカにするには威力が足りないんじゃない？」

「弾幕は技量さ」

「いや、パワーだぜ」

「つか、マスパされたら終わりだろ。どんな弾幕も」

こうして今日は解散の運びとなった。

帰りのシュウ。

「あ、シュウ。帰り？」

「あぁ、そうだな」

美鈴が珍しくこの暑い中起きていた。

「暑くて昼寝もできないよ」

「じゃあ良いもんをやろう」

俺は手早く物質化でビニールを創り出し、その中に魔法で水と氷をいれて、即席の氷嚢を作って渡した。

「ほい、いっちょあがりっと」

「おぉ、随分さまになったねぇ」

「ありがとな、これで寝ないように門番頑張れよ」

「えぇ。帰り道も気をつけて」

「おぅ」

振り返ると氷嚢を頭に載せて眠ろうとしている門番が目に入った。

「寝るなよ！美鈴！」

そう叫ぶと美鈴はこっちを向いてニカッと笑って親指を立てた。

きっと大丈夫だとアピールしたかったのだろう。ちなみに数分後、氷嚢で快適になった美鈴が眠りこけているところが見つかり、メイド長の怒りにふれたのは言うまでもない。

この「魔法」は便利だな。もっと練習して生活にいかそう。

帰りながらそう思ったシュウだが、冥界に着いたころになって休暇の話をするのを忘れたことを思い出したのだった。

第二十八章　傭兵と魔法科実技試験（？）（後書き）

という訳でチート街道を突き進むシュウです。

第二十九章　傭兵と白玉楼的日常（前書き）

テストを終えて帰ってきたシュウ。

第二十九章　傭兵と白玉楼的日常

シュウは白玉楼に帰ってきていた。
「ただいま」
「あ、シュウ。おかえり。今日は早かったね」
「あぁ。今日はテスト？みたいなのやったら解散になったからな」
二人は縁側に座って話すことにした。どちらが言った事ではないが、その方が落ち着くのだ。
「じゃあ、これで練習は終わり？」
そんなことは言ってなかった気がするな…。
「いや、まだ続ける。…らしい。まぁ、こんど休みを貰おうかと思ってる。」
「なんかあったの？」
「そう言う訳じゃないが…。やっぱり…」
あぁ、いざ口に出すとなるとへ恥ずかしいんだが。
「やっぱり、妖夢と一緒にいる時間が足りない気がして…さ…」
「わ、私は…。大丈夫、だけど。そんなことして練習は大丈夫なの？」
「妖夢の方が大事だから」
「それってやっぱり無理してるってことじゃ―」
「嫌？」
「そんなことない！…けど。私が迷惑かけて」
「俺が一緒にいたいんだ」
「……」
しばらく二人で見つめあう。
「ぁりがと…」
「礼はいらないって。と言うか俺が一緒にいたいだけって言っただろ？」

「うん」

そうして二人で庭を眺める。無言だが、不思議と嫌ではない。むしろ心地いいくらいだ。すると妖夢がシュウの肩に頭を預けてきた。なのでシュウも妖夢の頭に自分の頭を預ける。こうして暫くじっとしていた。どこからかセミの声が聞こえる。やや間があって二人同時に呟く。

「「暑い…」」

それもそうだ。既に季節は初夏を過ぎて夏を迎えようとしている。そんなときに二人でくっつけば熱が逃げないから暑くなるのは当然だった。

「う～ん。夏は好きだけど、こういう時に暑いのはいやだな」

「そうだね…」

「二人とも、じゃあ一緒に水羊羹でも食べましょ」

後ろから声をかけてきたのは主たる幽々子さん。その手には二つの箱があった。

「幽々子様。この前全部食べてませんでしたっけ？」

「新しくリリーに買ってきてもらったわ」

「春の妖精にこの気候は地獄だったでしょうに…」

「で、そのリリーはどこに居るんだ？」

「たぶんあそこじゃないかしら？」

そう言って幽々子さんが指刺したのは倉庫。俺が呼びに行こうとすると庭の向こうからふわふわと、むしろわらわらと人魂が飛んできて倉庫に入って行った。

『きゃあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！』

リリー、まだ幽霊が怖いんだよなぁ…。そうして見ている間にもどんどん人魂は入っていく。

『きゃあああぁぁぁぁぁ！！ひぃっ！！こないで！！いやあぁぁぁぁ

あぁぁぁぁぁぁ！！！！』
悲鳴が続いている。……。幽々子さんは何がしたいんだろうか…。
「そろそろ良いかしら？」
「幽々子様。なにがしたいんですか？」
「いいのよ～」
「質問に答えてください…」
幽々子さんはふわふわと倉庫にむかって飛んでいく。その頃になると悲鳴も止まっており、中に居た人魂たちも出ていっていた。そしてなかから出てきた幽々子さんはまるで大きな人形を抱えるようにリリーを持って帰ってきた。ちなみにリリーは抵抗する気力もないのか、されるがままになっている。
「こうするとお人形みたいでしょ？」
「そのためだったのか？」
「こうしないと逃げるのよ」
「そんなことしてるから逃げられるんですよ」
水羊羹を食べながら突っこむ妖夢。今日も白玉楼はいつも通りだった。やっぱり居心地がいい。
魔法で作った氷と物質化で作ったうちわを組み合わせて簡易クーラーにしながらそう思った。

第二十九章　傭兵と白玉楼的日常（後書き）

やっぱり定期的に甘くしたいなぁ…↑

ゆ、百合展開にしてないだけいいだろ！↑↑

ルーチル？そんなこともあったなｗｗｗ

幕間２　魔法使いの疑念（前書き）

幕間は割とシリアスパートよりですな

幕間2　魔法使いの疑念

シュウの「試験」あとのこと。
シュウが帰ってからの図書館に、パチュリーと魔理沙は残っていた。
「なぁ、やっぱりおかしくないか？人間の体内に魔力があるのは」
「それを言ったら魔理沙はどうなるのよ」
「だから私の時も随分問題になったんだよ」
「つまり、なにが言いたいの？」
「私たちはシュウの能力をまだ見くびってるかもしれないってこと」
「…まさか」
「パチュリーも分かってるんだろ？あいつの中のチカラの変化が常軌を逸してることくらい」
「そうね、彼は優秀よ」
「そういうことを言ってるんじゃない。あいつは魔力の精製とかそういう段階を飛ばしてチカラを行使してる。この前は体力がなかったのと頭に血が上ってたので自滅してくれたが、あいつがもし最高の状態だったらやられてたぜ。それも数瞬で」
「それの意味がわかってるの？彼一人で幻想郷がひっくり返るわよ」
「だからこうして相談してるんだろ」
「…でも。確かに考慮しておいた方がいいわね」
「参考になりそうな本を借りてくぜ」
「今回はなにも言わないわ。事態が事態だけにね。すべてが落ち着いたら返しなさい」
「今回はしっかりと約束を守ってやるよ」
そして暫くの間があって、再び魔理沙は口を開いた。
「スキマは何をやってるんだか」
「…これは憶測でしかないけど、彼はスキマの差し金かもしれない

わね」
「…そういうことかよ。とにかく今の私たちに出来ることは何もないって言いたいのか？」
「せいぜい練習に励む程度かしらね」
「それもどれほどの効果をもたらすのやら…」
二人の魔法使いの感嘆にも似たため息が木霊した―。

幕間２　魔法使いの疑念（後書き）

…ひとつお知らせ。

この弾丸と～シリーズ始まって以来、初めてストック切れを起こしました。
しかもテスト期間というね。
とりあえず明日は更新する予定ですが、その先がちょいと未定です。
更新出来るように努力はします。とだけ言っておこうかと。

第三十章　傭兵と九つの尻尾（前書き）

これから八雲との邂逅篇に突入です。

第三十章　傭兵と九つの尻尾

七月の半ば。
幻想郷は連日快晴続きでからっとした陽気である。実に小さな子供なんかが駆け出して遊びそうな青空だ。
シュウはどこまでも突き抜ける青空を見て、幻想郷に来たばかりの頃を思い出していた。いろんな経験をしたなぁ…。なんて思いながら。

「あの一家」と邂逅したのはその頃だった。

シュウは人里に来ていた。以前寺子屋に下宿していた頃に子供たちにサッカーと野球を教えたのだ。その頃は棒きれとお手玉だったりヤシの実みたいなものだったりで代用していたんだが、物質化が上手く使えるようになったからは作ってあげた用具で遊んでいたようだ。しかしこの前慧音に会った時にボールが無くなったり空気が抜けて転がらなくなったりしている、と聞いて作り直しに来たのだ。
「あっつぅ…」
天気がいいのは嬉しいが、暑いな…。そんなことを思いながら歩いているとキツネの尻尾を束ねたような何かがゆらゆらと揺れているのを見つけた。どうやらそれは人型の妖怪についている尻尾の様なんだがその人は里のはずれの用水路に頭を突っ込んでもぞもぞと動いていた。
「…なんだあれ？」
「…くっ…もう少しなんだが…」
どうやら何かを落としてしまったようだ。声をかけてみることにした
「おーい何してんだ？」

「ん？私か」
彼女は用水路から顔を出すとこっちに向き直った。端正な顔立ちで聡明かつ柔和な印象を与える獣耳（キツネ）の妖怪だった。尻尾からして九尾の妖孤ってとこだろう。
「いや、帽子を落としてしまってね。大事なものなんだ」
「帽子って落ちるのか…？見たとこ野球帽でもあるまいし」
「…いや、油揚げを落としそうになってな。慌てて掴んだらその拍子にそこに私が落ちそうになってしまったんだ。なんとか踏ん張ったんだがその時に帽子が、な…」
やっぱり油揚げには目が無いのか…。こんなに聡明そうなのに。
…ドジっ子？
「とりあえずその帽子を取ればいいんだな？」
「あぁ」
俺はマジックハンドを創り出してひょいっと摘まんで回収した。
「すまないな」
「驚かないんだな、これ」
そういってマジックハンドをかき消してみせると、言わんとしていることが通じたようだ。
「私は幻想郷の守護者の式をしているんでな、結構いろんなことを把握しているつもりだ。…とくに危険な能力や強大なチカラを有する者なんかは、な。シュウ、君もその対象だ」
「俺は危険因子ってか？」
「そうではないさ。紅い霧のときも解決に乗り出していたし、この前の長い冬に至っては首謀者側の者だろう？君は自分が思っている以上に有名なんだぞ？」
「有名、ねぇ」
そんなつもりじゃなかったんだがなぁ…。
「それでは失礼するよ。空腹にはうるさい主なものでね」
「ははは、そいつは大変だ」
「お宅ほどではないさ」

そう言って彼女は飛び立っていった。

これが八雲藍との、お互いに名を知っているのに会った事のない二人の、邂逅だった。

第三十章　傭兵と九つの尻尾（後書き）

藍って…かわいいよね…

第三十一章　傭兵と猫又と（前書き）

定期テスト真っ最中！
（なにやってるんだ…）

第三十一章　傭兵と猫又と

シュウは藍と別れてから里に辿りついた。

里は相変わらず平和は印象を受ける。というか実際に平和なんだがいかにも、と言う意味でだ。

ちょうど昼下がりのためか授業を終えた子供たちが遊んでいたり、主婦のみなさんが井戸端会議を（本当に井戸の脇で）やっていたり、店番の青年が居眠りをしていたりする。…寝るなよ、門番じゃあるまいし。

俺はその青年をおこすついでに磯部餅を買って、かじりながら寺子屋に向かう。

しばらくすると懐かしい建物が見えてきた。改めて見ると結構小さいな。この中に数十人の子供が詰めて勉強をしてるって凄くないか？

とにかくこうして目の前で立ち止まっていても仕方ないので入ることにした。

まずは慧音のもとに向かおうとして職員室目指していると教室からこえが聞こえた。どうやら中に居るようだ。中を覗いてみるとだいたい大学生ぐらいの青年と慧音が教壇を挟んで話していた。

「先生、どうしてダメなんですか…」

「やはり、人と妖では寿命が違いすぎるからな」

「それでも俺は―」

「残される身にもなって考えたか？私だったら無責任な事は言えない」

「それって、気持ち的には問題ないって事ですか…？」

「それは…」
お？これはいい雰囲気なんじゃないか…？ここで登場する訳にも行くまい。俺は校庭に向かうことにした。

俺が校庭に行くと数人の子供と妖精＋妖怪が一緒になって遊んでいた。里の子供の中でも上級生で最近少し弾幕を覚えた生徒が五人とチルノ、大妖精、リグル、ミスティア、あとは見覚えのない猫又の妖怪の五人が五対五でサッカーをしている。楽しそうに遊んでいるところを止めてしまっても悪いので用具庫に向かい、中のボール籠に精製したボールを補充していく。よく見るとバットが一つ折れていた。このぷにぷになボールで折れるとは思えないのできっとどこかにぶつけたんだろう。そのバットも一旦力に還元してから再度精製しておく。

そこでシュウは外が静かになっていることに気が付いた。どうしたんだろうか？なんだか何かに警戒していて、攻撃する前のような静けさだが…？

不思議に思いながら外に出ると―。
「撃て―！！！！！」
大量の弾幕が迫ってきていた。
「へ？」
俺は一瞬硬直したが、視界を埋め尽くす弾幕を避けようとして、用具庫の存在を想い出して物質化することにした。

被膜「マテリアル・フィルム」

するとそれらの弾幕はこの程度の幕すら貫通することなく落ちていった。一体なんだ？
「…？シュウじゃないの？あの人」
「大ちゃん！あいつがこんなところにいるわけないでしょ！」
「うーん。僕はその人にはあまり関わりはないしねぇ。あの一瞬じ

ゃあ分からなかったけど、大ちゃんがいうならその人なんじゃない？」
「なによ！リグルまでうたがうの！？」
「「だって、ねぇ」」
「ちょっと、そんなこと言ってる暇はないよ…。あの人傷一つ無いみたいだし…。あんなに強いんじゃ、勝ち目が…」
「大丈夫だって、橙。きっと、知り合いだから」

…。どうやら勘違いだったみたいだが、これで里の人間だったらどうするつもりだったんだろうか？子供たちなんかは俺の戦いを何回か見てるから、怒らせたらマズイと思ったか直ぐに謝りに来たので不問にすることにした。…と言うかこのメンツなら怒っても無駄そうだけどな。
「で？いきなり攻撃してきた訳は？」
「私が、強いチカラを感じて。もしかしたら危険なんじゃないかと思って…。この人数ならやれるかなって思ったから…」
猫又の少女が耳を垂らしながら申し訳なさそうに弁解してくれたが。…こいつはそうはいかないようで。
「またあったわね！リベンジよリベンジ！！」
「やめときなよ、チルノちゃん…」
「一瞬で負けるのが目に見えてる気がするけどね」
「そうねー」
ちょっと、久しぶりに遊んでやろうかね。
「そいじゃあ、みんなかかってきな。まとめて相手してやんよ」
「そうこなくっちゃ！」
「ぼ、僕たちも！？」
「もちろん。あ、そうだ。寺子屋のみんなは参加するなよ？命は一つだ」
「どどどどうしよう。シュウさん本気だよぉ。や、やっぱりみんな止めよう？」

大妖精が慌てているが俺たちは裏手の丘で弾幕をすることにした。
里のみんなは観戦したいとのことなので、マテリアルフィルムで保護しての観戦となった。
かくして俺は久しぶりの弾幕ごっことなったのだ。

第三十一章　傭兵と猫又と（後書き）

と言うことで次回は戦闘です↑

第三十二章　傭兵と妖精＋妖怪の戦い（前書き）

シュウが？たちと”遊ぶ”はなし

第三十二章　傭兵と妖精＋妖怪の戦い

俺たちは里の裏手にある丘に来ていた。…。そう言えば幻想郷に来た時に辿りついたのもここだったな…。
そんなことを思い出しながら丘を上っているとルーミアがいた。
「おー。みんなどこにいたのかー？」
「ちょっと寺子屋にね」
「みすちーもいたのかー」
「影薄いかなぁ、私」
「薄いと思うよ」
「リグルには言われたくなかった！」
「なにさ！」
「やる気！？」
「リグルもみすちーも喧嘩はやめるのだー」
「「もとはルーミアの所為だよ！」」
「そーなのかー？」
「こらー！！三人とも早くおいでー！！」
チルノに呼ばれてぞろぞろとやってくる三人。…橙はここに居るからいいとして、大妖精は？
「大ちゃんならあっちに居るよ」
「…いつの間に」
彼女はいつの間にか里の少年の腕の中で縮こまっていた。…弾幕いやなのか。

「で？開始の合図はどうする？」
「もちろんもう始まってるわよ！！」

氷符「アイシクルフォール」

いきなりスペカで始めるチルノ。正直こっちに飛んでこないんだが…。
「え？ちょっ―」
―ベシッ―
ミスティア被弾。おいおい…。まぁ、仲間内だし、多めに見るか。
「一気に行くよ！」
「「「りょーかい」」」
…。「了解」って言葉随分広まったなぁ。そんなことを思いながら見ているとどうやら残りの四人はチルノを無視して協力攻撃を画策しているようだ。俺はまずは視界を遮る事を得意とする二人のうち厄介なミスティアの方を先に倒すことにした。
「みすちー！頼んだよ！」
「わかって――むぐぅ！？」
とりあえず背後から口をふさいで地面に投擲。思いっきり衝突した。…そんなに勢いよく投げたつもりはなかったんだが…。
「みすちー！！」
「リグル、動揺はあとだよ！」
「橙…。そんなこと言ったってどうやって―」
「代わりに私がやるのかー」
ルーミアが手のひらに黒球を発生させてこちらに向けてくる。俺はそれが起動する前に物質化で落とした。
「リグル、私たちでルーミアを援護するよ！」
「分かった！」
式符「飛翔晴明」
蠢符「ナイトバグストーム」

橙が五芒星を描き、その頂点から弾幕が飛び出してきた。そんなに密度もないし、早くもない…と思っていたら軌道が変わってきた。ちょっと面倒だと思いながらも避ける。一方リグルの方は薄い環場の弾幕を放ち、それが解けてこっちに襲いかかってきた。俺はルーミアの黒球つぶしに気を割いている事もあってあまり余裕が無い。

こっちも仕掛けることにした。

狙撃「スナイプ・バレット」

俺が打ち出した球はルーミアの腹部に吸い込まれ、ルーミアごと飛んで行った。あれぇ?まだ加減が足りないか?もしかしてスペカ単位でマズイ?

「橙…。ルーミアもみすちーもやられちゃったよ…。どうしよう…。」「こうなったら数だよ。リグル、ありったけの弾を撃ち込むしか―」

「ちょっと!あたいを忘れてるんじゃｎ―」

さっそうと現れ――木に激突するチルノ。こんなときにまで?だな…。ここで木に当たらなければもう少し決まっただろうに…。

「とにかく私がやるんだから!!」

涙目でスペカを宣言。

氷符「ソードフリーザー」

チルノは手元に氷の剣を作ると突っこんできた。最初は袈裟切り。なんなくかわすが、冷気が思ったより強く、一瞬凍傷になるかと思うほどの冷気だ。その後もチルノは剣を振り続けるが、こいつは袈裟切りと逆袈裟しか振らないんだろうか?

「あぁ!もう!なんであたらないのよ!」

「むきー！！」

凍符「フリーズアトモスフェア」

「おわ！！」

チルノが次に発動したスペルは自身の周囲の温度を下げて凍結させるスペルだった。もちろんシュウは手が届くような距離に居たので多少喰らってしまった。そしてその状態で剣を振って特攻するチルノ。

「あたりなさいよ！！」

「こっちくんな！フレイムランス！」

「ぎゃーーー！！！」

……。悪気はないんだ。ただ、冷気の塊が突っこんできて凍えそうだったから炎の上級魔法使っちゃっただけなんだ。…。はい。氷精には致命傷ですねわかります。

結果としてピクリともしなくなったチルノ。いや、息はしているから死んではいないのは分かるが。　リグルと橙の方を見ると両手をあげて投降していた。

里こ子供たちもちょっと青ざめている。大妖精に至っては少年にしがみついて震えている。

そりゃそうだ、こんだけデカい魔法使ったらそうなるだろうな。

悪いことしたなぁ。

今日も空は高く突き抜けるような青空だった。

第三十二章　傭兵と妖精＋妖怪の戦い（後書き）

あぁ、明日はテスト3コマなのに何をやってるんだ…。
さっき15分寝たからこのまま学校いきます。

第三十三章　傭兵と猫と狐と（前書き）

八雲家が総出です。
ちぇえええええ（ｒｙ
橙よりも藍派です。
紫？スキマバババァに興味はｎ―作者はスキマ送りになりました。―

八雲一家は動物王国ぅ！

第三十三章　傭兵と猫と狐と

？や妖怪たちと遊んだ翌日。俺はこの前の橙という少女から改めて言いたいことがあるとのことで呼び出されていた。…。後ろの茂みに藍の帽子とスキマが見えてるんだが…気にしたら負け…だよな、きっと。

「で、話ってのは？」
「その、あのときはごめんなさい！」
「…いや、気にしてないんだけど」
「で、でも。弾幕の時あんなに思いっきり…」
「あぁ、あれはまだ手加減に慣れてなかっただけで」
「……」
「えっと……」
二人の間に気まずい沈黙が流れる。彼女は唇を噛み締めてうつむいている。…手加減って言葉はまずかったか？でもあれは遊びだった訳だし、変に嘘をつく必要もないんだが…。
「シュウさん、でしたっけ」
「あぁ」
「どうしたら、そんなに強くなれる…んですか？あのときもスペルは殆ど使わな…使いませんでしたし、それどころか弾幕しゅ…弾幕すら使いませんでしたよね？」
…。噛んだな。これは指摘しない方がいいよな。それに敬語にも慣れてなさそうだし…。
「笑わないでください…。」
「そんなつもりはないけど…。言いづらいなら敬語じゃなくていいぜ。そうだな…がむしゃらに頑張ったとしか言いようがないな、俺の場合。後は能力に恵まれたことかな」
「…努力と才能ってことかぁ」

「後は良い師、良い主につくこと、だな」
「シュウ…は誰かに仕えて？」
「白玉楼の姫さんで通じるか？」
「あ、うん」
「それじゃあ、私の師匠になってくだしゃい！」
「だが断る」
「そんな！？」
うわぁ。後ろの茂みから藍が飛び出そうとしてるのをスキマから伸びた手が必死に抑えてるよ…。持ちづらそうだし、スキマから出てくればいいのに…。
「どうしてですか！？」
「橙、もう君には主がいるんじゃないのか？」
「それは…」
「主じゃ頼りないか？」
「藍しゃまは頼りなくなんかない！！」
「じゃあそれでいいんじゃないか？藍に弟子入りすれば」
「―ッ！」
…。後ろの人達が本格的に暴れ始めたんだが。
『ン――――！ン――――！（ちぇえええええん！ちぇえええええええええん！）』
『藍、静かにしなさい！』
『ン――――！（ちぇえええええん！）』
『頼りにしてもらってうれしいのは分かるけど状況を考えて！今出ていったらすべて台無しよ！』
『ン――――！（ちぇえええええええええええん！）』
……。感動の抱擁をしようと飛びだそうとする藍。と、それを抑えるスキマ妖怪＋罪袋たち。凄い…シュールです…。
「それじゃあ、たまにはアドバイスを聞きに来ますから！また今度

！」

そう言って橙は飛び立った。藍は罪袋達によってスキマに引きずり込まれて行った。そしてスキマ妖怪は茂みから出てきた。

「どうも」

「あんな藍は見たくなかった…」

「あればっかりは、流石にしょうがないわ。家でもずっとあんな調子だもの」

「苦労してんな」

「慣れたわ。それにその論法だと幽々子も苦労してそうね」

「そうか？俺はあそこまで盲目的じゃないと思うが」

「そういうものは得てして自覚出来ないものよ。それじゃあ、またいつか」

そう言ってスキマに消えて行った紫。

「スキマ便利だな…。」

シュウがそう呟き、嘆息する頃には日が登り切っていた。

「で、どういうつもりだ？」

俺は背後についてくるスキマを掴むと物質化させて覗き込んだ。

「あら、ご機嫌よう」

「プライバシーぐらい守れよ」

「知らないわ」

「……。」

シュウはそのスキマを近くの木にフルスイングした。

―ガッ！―

「いったぁ！？」

どうやらスキマの中も振れば揺れるし、ぶつかれば衝撃が来るようだ。

今日はこの棒で遊ぶことにした。

第三十三章　傭兵と猫と狐と（後書き）

わはー。

→彼女の様な楽天的な思考回路がほしいです。←

…テスト＼（＾ｏ＾）／ｗｗｗ

第三十四章　傭兵とおしゃべりな〝棒〟（前書き）

シュウが大暴走！

第三十四章　傭兵とおしゃべりな〝棒〟

…さて。遊ぶと言ってもこの棒状の物で何ができるか…？
野球。
今から人数揃えるのはキツイ。
テニス。
細すぎる。かなり不利で辛い。
…。そう言えば細い棒を使った遊びって少ないな…。
「私を解放するっていう考えはないのかしら？」
「ないな」
「独占欲が強いのね」
「こんなに面白い『しゃべる棒』があるのに遊びもしないで手放すなんてもったいないじゃないか」
「あんまり調子に乗らない方がいいわよ？」
「なぁ、そんなにそこが嫌なら他のスキマから脱出すれば良いんじゃないのか？」
「貴方、絶対分かって言ってるわよね？私の顔がこの物質化に巻き込まれて抜けないのよ」
「へぇ、そりゃびっくりだ」
「貴方ねぇ…。あんまり調子にのると―」
さっきから「調子に乗ると～」が多いな…。ちょっと黙らすか。
とりあえず、地面に向かってフルスイング！！

―ブォン！ガッ！―

「酷い目に―ちょッッ！いったぁ！」
次は近くの大木に、こっちの木もいいかな。今度はあっちの岩がいいかもしれないな。これか？これか？こっちの方がいいかな？お

や、こんなところに野球ボールぐらいの石が。これでノックでも―。
「ストップ！ちょっとまｔｔ―」
「え？」

―ゴッ！―

「～～～～～～～～～！！」（涙目）
急に声をかけるもんだから思わず手が滑って顔がある位置でノックしてしまった…。鼻に直撃だったらしく涙目である。
「なんかいったか？」
「いい加減に止めなさいよ…」
「じゃあこれから『調子に乗ると』って言うたびに一発な」
「なんで貴方に決められなくちゃいけない訳？」
「なんならこの棒を湖に沈めてから帰ってもいいけど？」
「殺す気？」
「気分次第かな」
「あんまり調子に乗らないほうがいいわよ。この幻想郷では私ほどの実力者は―」
「はい、一発入りまーす」

―ゴッ！―

「っつぅ……。もう、好きにしなさいよ…。日没までには解放しなさいよ、博霊大結界の点検とかあるから」
「それまでに飽きたらな」
俺はこうして紫で遊んでいるあいだにも棒を使ったスポーツを考えていたんだが、終ぞ思い付かなかった。取りあえず一旦帰ることにした。
「ちょっと！引きずらないでよ！眼に砂がはいったじゃｎ、あだだだ！地面に擦ってるから！」

よくしゃべる棒だな…。

第三十四章　傭兵とおしゃべりな〝棒〟（後書き）

シュウの「遊び」はまだまだ続く！？

第三十五章　傭兵と回路（前書き）

…主人公は新たなステップへ…

第三十五章　傭兵と回路

俺が白玉楼に帰ると妖夢が出迎えてくれた。
「ただいまー」
「お帰り、シュウ。ねぇ、それって…。」
「所謂スキマ？ポケット版」
「勝手にポケット版にしないで」
「しゃべった！？」
そう言えば妖夢の位置からだと紫の顔が見えないのか。
俺は妖夢にも見えるように紫の顔を向けてやった。
「って、紫さんじゃないですか！？」
「紫がどうしたの？」
妖夢の声を聞いてか幽々子さんも登場。
「あ、幽々子じゃない。なんとか言ってやって頂戴」
「随分と面白いことしてるわね」
「そうじゃなくて、注意してやって、っていう意味で言ったんだけど」
「楽しそうでいいじゃない」
「なんでもない。幽々子にたのんだ私が愚かだった」
「ねぇ、シュウ。これ少し借りていいかしら？」
「え？どうぞどうぞ」
これ、とは紫棒のことである。予想外の申し入れだったが断る理由もないので渡そうとして持ち上げたら…。

―ぽきっ―

「「「え？」」」
「ふぎゃ！」

紫棒は俺の手元でぽっきりと折れて、紫がいる先端側は地面に落っこちた。…紫の顔から。
「案外スキマって脆いんだな…」
「あんだけ思いっきりあちこちぶつけたら壊れるに決まってるでしょ！？」
そこで俺は初めて気が付いた。
―スキマに回路が組まれている…？―
「なぁ」
「なにかしら」
「スキマって魔法なのか？」
「…なに言ってるの？これは能力よ、魔法なんかでこんな芸当は出来ないわ」
「だよなぁ」
「どうしたの？シュウ」
「いや、このスキマの折れた断面から魔法回路が見えるんだ」
「そう？マーブル模様の紫色にしか見えないけど」
「ちょっと試してみるか」
俺はそのスキマの回路通りに魔法回路をくみ上げる。そして力を流すと―。
「スキマが出てきた！？」
「シュウ、なんで貴方にスキマが…？それは『私の』能力のであって貴方のではないはずだけど」
「いや、だからこのスキマに回路が…」
「あり得ないわ。これは能力であって感覚的なもの。回路に分析できるデジタルではなくアナログなもののはずだけど」
「いや、だって現に再現できたんだ…が…？」
おかしい、何か違和感が…。急に力が入らなくなって…。
「シュウ！？」

俺は床に崩れ落ちていた―。

第三十五章　傭兵と回路（後書き）

果たしてシュウの身になにがあったのか！？乞うご期待！

第三十六章　傭兵と体の異変（前書き）

倒れたシュウに一体なにがあったのか…

第三十六章　傭兵と体の異変

俺が目を覚ますと、そこは自室の様だった。ただ、いつもと違うところは見覚えのない人がいるんだが。…。いつの間に赤十字は幻想入りしたんだ…。

「よかったぁ」

「妖夢…。俺、どうなったんだ？」

「チカラの使い過ぎ…らしいんだけど」

「バカな。弾幕もしてなければロクに動いてすらいないぞ」

俺の発言を聞いてその医者の格好をした女性は言った。

「実際あなたの体内にチカラは殆ど残っていなかったわ」

「…。どういうことだ？」

「とりあえずこの薬を―」

「待った。なんで睡眠薬なんて混ぜてあるんだ？」

「ッ！？なんでそれを知っているのかしら？」

「質問に答えてくれ」

彼女は随分驚いているようだ。俺としてはいかにも治療薬を出すように睡眠薬入りの薬剤を出されたことの方が驚きなんだが。

「体力回復には睡眠状態が最適だからよ。私は答えたわ、次はあなたが答えてくれないかしら」

「なぜ、か…。…？―どうしてだ？」

そう言えばなぜ分かったんだろうか。今もその薬には睡眠薬と体力増強剤のようなものが含まれていると直感的に理解出来るんだが、根拠が分からない。

「なにを言っているの？あなたが言い当てたんじゃない」

「分からないが、その薬に含まれている物が脳裏に浮かび上がってくると言うか…」

「…。能力の発現？」

「いや、俺は既にチカラを自在に操る能力を持ってる。二つの能力は現れるなんて聞いたことが無いぞ」
「そうね、私も知らないわ」
「えっと…。つまりどう言うこと？シュウになにが？」
「分からないわ…。でも可能性として考えられるのは能力が変化した、成長した、すり替わった。あるいは幻覚が偶然的中した。または…私たちの理解の範疇を超える何かが起きているか。…最後のはちょっと大げさだけど、想定する分には問題ない可能性ではあるわね」
理解の範疇を超える…ってなんだよ…。
「シュウ、そう言えば倒れる前に回路がなんだかんだって言ってたよね？」
「あぁ。スキマの断面からスキマを構成する回路が見えたんだ」
「この二つの事例の共通点は、構成…？」
「つまりは？」
「今は何も言えないわ」
「そうか…」
室内に沈黙の帳が下りる。
すると部屋の扉が開かれた。
「シュウ、大丈夫か？いきなりぶっ倒れたとかきいたぜ？」
魔理沙が少々好奇心を含んだ声ではあったが様子を見に来てくれた
「あぁ、一応は大丈夫だ」
「そうか、動けるか？もうすぐパチュリーも来るぜ」
「了解」
俺は立ち上がると居間に向かうことにした。その時妖夢がさりげなく支えてくれた。
「大丈夫だってば」
「だって心配だよ…」
「…悪ぃ」
「シュウは悪くないよ」

「私も一応ついておきます」
「すみません、永琳さん」
永琳と言うらしいその女性も立ち上がり、結局部屋に居た全員で居間に向かうことになった。

第三十六章　傭兵と体の異変（後書き）

少しずつ核心に迫るワードや設定を出してますが幾つほど気づいていますでしょうか？

ちなみに作者は物語上重要なピースの半分しか覚えていません。

第三十七章　傭兵と能力会議（前書き）

傭兵と八雲、
完結編、
登場！

第三十七章　傭兵と能力会議

居間には我が主、まんじゅうを食べる幽々子さんと読書をしているパチュリー、遊んでいるリリー、とリリーに振り回されている（物理的な意味で）紫棒がいた。シュウが入ってくるとパチュリーが顔をあげた。

「そこの棒から聞いたわよ、倒れたんだって？」

「あぁ、ちょっと原因は分からないんだが、チカラが空っぽだったらしい」

「…そう。あと、なにやらまた新しい事を覚えたそうね」

「育成ゲームじゃないんだからその言い方なんとかならないのか？」

「シュウが私のスキマに魔法回路が見えるとか言ってたわ…―～～っ！」

紫棒はリリーによって振り回されている。その所為か発言の途中でまたしても遠心力やら急動静に耐える作業に戻ってしまった。

「見えるの？シュウ」

「あぁ。その通りに組んで力を流したらスキマを作ることもできたな」

「もしかしたら、能力が進化する可能性を示唆しているのかもしれないわね…」

「作ってみるか？」

俺がスキマを開こうとしたら永琳が俺の腕を掴んで制止してきた。

「おそらくそのスキマを開く行為には莫大なチカラが必要で、その所為で枯渇したのかもしれないわ」

「枯渇って…」

「燃料切れってことだぜ」

「それは知ってるが」

なんてこった…。せっかくスキマの回路を覚えたってのに…。

「それに先ほどは私の処方した薬の成分を当ててきました」
「…となるとやはり構成になるのかしら」
「ですよねぇ」
「なぁ、パチュリー。やっぱり私の言った通りだったろ？」
「随分前の話を蒸し返すのね。…まぁ、結果的には魔理沙の一言が無かったらこの可能性にすら気が付けなかったんでしょうけど」
「だろ？」
「つまり？」
「私たちはシュウの能力を甘く見ていた、と言うことよ」
「私は今までの彼を知りませんが」
…なんだろう。俺の能力に関する話のハズなのに、凄く置いてけぼりな気がしてならない…。魔理沙は得意げでパチュリーと永琳は思案顔、妖夢までも神妙に頷いたりしてるんだが…。どんな話？
「なぁ、妖夢。話の展開どうなってるんだ…？」
「ん？さぁ？」
「え？今頷いてなかった？」
「いや、さっきから蚊が飛んでて…。気になるんだよね…」
「……。話聞いてなかったのか…？」
「シュウも聞いてなかったんじゃないの？」
「聞いてたけど理解が追いつかなかったんだよ」
「…シュウの事でしょ？」
「そうなんだけどな」
…結局分からずじまいか。
「シュウ、聞いてるのか？」
「ん？」
「ったく…。自分のことなんだから少しくらい関心持ってほしいぜ」
「途中から話についていけなくなってな…」
そういうと今まで議論していた三人はほぼ同時に嘆息した。
「シュウの事なんだからシュウが一番分かってるはずなんだけど？」
「主観からじゃ分からない事もあると思うが…？」

「話がずれてるぜ」
「あぁそうだな。…で？話し合いの結果どういう結論になったんだ？」
「一応の結論は『シュウの能力は成長している。または全容を明らかにしておらず、少しずつ発現が起こっている』『現時点での能力はすべての構成を司る程度の能力』ってところかしら」
「…構成？」
「つまり物質化も魔力回路を分子に変換して構築されていると考えられる上に、魔力を体内に持たないのに魔法を使っているのはチカラを魔力と同じ性質を持つように構成しているから」
「あー…、要するに仕組みを弄ってると。全部において」
「それでも語弊はないと思うわ」
「それでいい。これから成長する可能性は？」
「なにも分からないぜ」
「…。まだまだ伸び代はあると」
「それはあんまりあって欲しくないぜ」
「ははは…」
斜陽に照らされながら笑うシュウ。魔理沙はその奥底に未だに底知れぬ感覚を覚えた…。
「シュウー。おなか減った～」
そう言いながらリリーが入ってきた。その手には紫棒（あちこちが折れ曲がっており、両端が欠けている上に、全体的に砂ですすけている）が握られていた。
「あ、紫のこと忘れてた…」
「私の心を折るつもりだったら随分な成功を収めたわよ、シュウ。妖精にこんなに玩ばれるなんて、屈辱にもほどがあるわ」
「いや、そう言うつもりじゃなくてただ単に忘れてた…。なんかスマン」
「いいわよ、私なんてスキマが使えなくなったらただの非力な少女ですものね」

「（少…女…？？？）…。いまはずすな、それ。帰っていいぞ。あと、マジでスマン」
「えぇ、一旦帰るわ…」
そう言って紫は帰って行った。

ちなみに翌日の文々。新聞の見出しは「屈強なものたちの巣窟と化した白玉楼！スキマ妖怪、春告精に玩具にされる！？」となっており、紫棒をもって氷の剣を携えたチルノと対峙するリリーの写真が大きく張り出されていたのだった…。

第三十七章　傭兵と能力会議（後書き）

いつも通り幕間書いたけどそれしかストックが残ってない…

幕間３　薬剤師の疑念（前書き）

なぁ、知ってるか？
今日でこの「弾丸～」が始まってちょうど一カ月なんだぜ…？

幕間3　薬剤師の疑念

「シュウ、これからは定期的に通院をしてもらいます」
「え？なんでだ？」
「今回はなぜかピンピンしてますが、本来そこまでチカラの内苞量が減少すると昏睡状態になってもおかしくない状態なんです。…と言ってもこの状態で来られても出来ることがありませんので、秋ぐらいになったら永遠亭に来てください。山の近くの竹林のなかにありますので。道に迷ったら因幡の兎に聞いてください」
「お、おぅ」
とにかくこの青年は不可思議な事が多い、一度精密にいろいろと調べさせてもらいたいものね…。
「それでは」
「送りますよ」
「そうだな、玄関までででも」
「大丈夫です、きっと迎えのものが来ています。それに私も弾幕にはそれ相応の自信がありますので」
そういって彼らと別れ、地上へ帰った。

地上に降りるとレイセンが迎えに来ていた。
「師匠、大丈夫でした？」
「問題なかったわ、ただ…」
「ただ？」
「あの青年、本当に人間なのかしら…？」
「…？どう言うことです？」
「チカラの内苞量は里の人間以下なのに実力はスキマ妖怪を玩具にするほどのもの…」
「めちゃくちゃじゃないですか…」
「それに能力が次々と変遷しているらしいのよ」

「そんなばかな…」
「そこで図書館の魔女と白黒な魔法使いと話し合ったのだけど、どうやら人智を超えるチカラの片鱗が少しずつ明らかになっていっているだけの様ね」
「…。確か、患者は外来の青年でしたよね」
「えぇ。でも今の時点で『チカラを物質化する程度の能力』から『全ての構成を司る程度の能力』にまで変遷しているわ。しかも伸び代はまだあると言うのが全体の見解よ」
「…普通自分の能力ぐらい解かるでしょうに。片鱗って…」
「まぁ、自覚してないものは使役しようがないって所かしらね」
「……。」
「まぁ、味方につければこれほど頼りになるものもないでしょう」
「でも、敵に回れば…」
「…。彼はあまり好戦的には思えなかったわ。きっと大丈夫でしょう。それに最近は自分のチカラの強大さを自覚して手加減しているようだし」
「そう、ですか…」
「まぁ、いいわ。とりあえず帰るわよ。いい加減にお腹もへったわ」
「ですね。帰ったらすぐに作りましょう」
「手伝ってよね」
「てゐじゃないんですから、手伝いますって」
「そう言ってくれると思ったわ」

彼は、一個人としてよりも管理者としてのスキマの思惑が絡んでいるように思えるわ…。もしかしたらこの先障害になりうるかしら…？しかし彼は鍵にもなりえる。つぶすのは勿体ないわね…。

にしても本当に何者なのかしら…。

幕間３　薬剤師の疑念（後書き）

次回は書いてあるんですが…。
その先がなぁ…。
アイディア降りてこないかなぁ…

真実　襲撃の因果（前書き）

シリアス二連投ですが。

真実　襲撃の因果

これは２１０４年の春のこと。
八雲紫は日本にいた。いや、日本だった所に佇んでいた。理由は簡単。幻想郷が”決壊”したからであった―。

時は遡り２１世紀になったばかりのころ。
その時は弾幕ごっこが行われていた。
かく言う私も「スキマの妖怪」として弾幕に勤しんで…はいなかったがそれなりにやっていたし異変解決の手助けもしていた。
あるものは魔法を放ち、またあるものは妖術を駆使し、皆が「命を奪わない戦い」をしていた。
その頃からであった、幻想郷に”チカラ”が充満し始めたのは。

初めはスキマが開きづらくなった程度だった。直に博麗大結界の輝が直しづらくなり、綻びが多くなってきていた。

私は危惧していた。このままでは幻想郷が持たないのではないかと。
藍も言っていた。
「幻想郷の内部圧力が高まっている」と。
霊夢も言っていた。
「博霊大結界が何らかの力によって負担を強いられている」と。
図書館の魔女でさえも言っていた。
「このまま圧力が高まれば幻想郷は崩壊する」と。
私は幻想郷を守るためにあらゆる方法を考えた。
博霊大結界の一部を解放したらどうか。とか、内部の力をなんとか固めて別の場所に移せないか。などと。
しかしそれらの考えはその場凌ぎのものにすぎない。でもやるし

かなかった。私はスキマを使ってチカラを外に流していた。
圧力の原因は弾幕が消えた際に分散するエネルギーだと判っている。しかし、この弾幕は幻想郷にとってなくてはならないものになっていた。
元凶を取り除く事が出来ない。
―これはシステムの破綻を示していた…。

―そして私はついにスキマを開くことが出来なくなってしまった。
なので私はこのチカラを外に流すためにスキマ経由で流すことが出来なくなってしまった。
私は霊夢に頼んで外の博麗神社との繋がりを強くして少し濃度を下げて貰うことにした。

初めて、土下座をした。とても、屈辱的だった。

霊夢は結界が一気に崩壊するのを恐れて、最初は拒んだが、じきに折れてくれた。「短時間、一度きり」という条件のもと。
そうしてなんとかスキマを開いた。
そしてその結界の先にある亡骸を見つけた。
その青年の亡骸は吹きつけるチカラを結晶として自らの躯に纏わらせていた。
そしてその結晶はチカラを分散することなく消えていった。
私は驚愕していた。彼がいれば、私の幻想郷は消えずに済むのではないか。
しかしこの亡骸では間に合わない。彼が幻想郷で力を振るう必要がある。だからその青年が最も力のある時代へと、時間の境界を弄ってとんだ。
でも以下に過去といっても今の時代では既にチカラによる圧迫は

始まっていた。
だから私は戦場にいた彼を更に過去の幻想郷に送ったのだ。

でもまさか、別の次元の幻想郷に送っただなんて。
しかもそれに気がつけなかっただなんて、
私は思いもよらなかった。
きっとそれほどに私は疲れていたのだろう。

私がもとの時代に帰ると結界は圧力に耐えきれずに決壊していた―。

里のものは土地を失い、餓死したものが多かった。そうして人が消えたため、信仰が薄れた神々は消えていった。妖怪達は争いを始め、殆どが散っていった。
霊夢もいなかった。魔理沙も咲夜も。幻想郷での異変を始末していた実力者もいなければ、レミリアや幽々子、さとりなどのカリスマを持った者もまた、誰一人いなかった。

―私の幻想郷が、私が管理をして守り続けた幻想郷が、あとかたもなくなっていた―。

私は藍と橙を連れてかつての幻想郷に飛んだ。
しかしそこには私が送った青年はいなかった。
私は必死にさがした。藍も橙も手伝ってくれた。

そして見つけたのは別の次元だった。
そして彼らは笑っていた。
私も、みんなも。
誰一人、欠けることなく。
なんの憂慮もなく、笑っていた。

彼を返してもらう。
彼を見つけたのは私。
彼の力の恩恵を享受する権利があるのは私なのに。
なぜ私たちは大事なものを失い、
彼らは幸せの享受しているのか。
なにがなんでも奪い返す。
全力で。

そう決意し、私たちは準備に取りかかった―。

真実　襲撃の因果（後書き）

物語は大きく動き出す！…のか？

第三十八章　傭兵と唐揚げと河童と

「…シュウ、蛙の唐揚げが食べたいわ」
「……。いまなんと？」
「蛙の唐揚げが食べたいの。飛びきりに強い蛙の唐揚げが」
「幽々子さん。それはちょっと…」
「妖怪の山の上に食材はあるわ」
「聞いてます？」
「そこにある神社に祀られている蛙が食べたいの」
「祀られている！？それってどういう―」
「とにかくいって頂戴」
…。仕方ない、断ることは出来ないのだから…。
「って、無理でしょう！？」
「えー…。じゃあ妖夢に頼もうかしら」
「無理です、幽々子様」
お茶を持ってきた妖夢に即答で却下されていた。…と言うかそこで「いきます」と言われても俺としてはいろいろと考えなおさなきゃいけない事態なんだが。
「仕方ないわ…自分で取りに行ってこようかしら？」
「私がいきます」
「妖夢！？」
何事！？なんで妖夢が蛙狩りに行くことになってるんだ？…と言うか祀られてるものを勝手に唐揚げにして食べる訳にはいかないだろう…。賞味期限もやばそうだし。
「じゃあ、行こうか、シュウ」
「そして俺も当然の様に駆り出される訳だ」
「私と一緒じゃあ、いや？」
「いこうか妖夢」

…。とことん自分の意思が弱いな、俺…。

「…どうしてこうなった」
「どうしたの？シュウ」
「いや、普通に妖怪の山の上に祀られてる蛙ってあの土着神の頂点だよな？」
「そうだね」
「唐揚げには出来ないだろう」
「だから行くだけいって『無理でした』って報告したら―」
「また行かされるんじゃないのか？」
「…。その時はそのときだよ」
まさかのノープランだった。

妖夢と二人、魔法の森を越えて妖怪の山へと向かう。近くに川が流れているのを見つけたので俺たちはなんとなく河に降り立つことにした。
河はとてもきれいに澄み渡っている。川底が見えるくらいだ。まだ夏なこともあってか葉っぱ一つ流れてはいない。……。

少女は流れてきたが。

その少女はピクリともせずに流れてきて俺たちの目の前で担いでいたリュックサックが岩に引っかかって止まった。問題は―

腰から下が透き通って、地面が見えてるんだよなぁ…。

「シュウ…。アレ、上半身しかないよね…」
「いや、見えてないだけかもしれな―」
「下半分ないよね」
「…ないな」

「……。」
「……。」
「…死体？」
「いや妖怪だったら体がぶっ飛んでも命は間に合うかもしれない」
俺たちはとりあえずその少女の上半身を岸にあげることにした。
少女は思ったより軽く簡単に持ち上がった。（リュックはバカみたいに重たかったが。）そして岸にあげた時に、唐突に下半身が「現れ」た。
そして地面には存在があやふやな布切れが一枚。…これは、もしや、光学迷彩ッ！？
「謎の技術…胸元の鍵…。河童の子だね、きっと」
「だろうな、俺も聞いたことがある」
「うぅぅ…ん？んぁ…」
少女は眼を覚まし、俺たちをみると眼をまん丸にしておどろいた。
「に、人間！？」
「そうだな」
「私は半人半霊だけどね」
「あわわ…光学迷彩、光学迷彩…。……。光学迷彩はどこだ！？」
「ここに」
俺が光学迷彩を差し出すと少女はそれをかぶって逃亡を図ろうとした。
「ふぎゅっ」
「なぜ逃げるし」
「逆になんで逃がしてくれないのさ」
「せっかく捕まえた現地の者なんだから道案内ぐらいは頼んでもいいだろう？」
「悪い事は言わないから帰りな、盟友」
「そこは俺が決めることだ」
「警告はしたんだがね…。一応こっちでも警告するよ。」
そういうと少女は弾幕を手に浮かべた。

「私の名前は河城にとりってんだ。所謂技術屋の河童さ」
「そうかい、俺はシュウだ。で、こいつが妖夢」
「シュウに妖夢だね、覚えたよ。…。二対一は辛いね…。」
そう言いつつにとりは河の上に移動した。すると河から水柱が立ち上り、無数の弾幕となってにとりに追従する様子を呈した。

「こういうとき、姉さんがいてくれたら…」

「なんか言ったか？」
「いいや、なんでもないよ。始めようか、盟友」
にとりの眼の色が好戦的な瞳に変わった―。

――ｔｏ　ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

第三十八章　傭兵と唐揚げと河童と（後書き）

はい、物語なんて動き出しませんでした。

俺がネタ切れた宗を友人に伝えるとアイデアをくれました。

そう。「蛙の唐揚げ」です。

どんな味か彼に試させてみたいです。俺は食いたくないですが。

第三十九章　傭兵と河童の水技（前書き）

この作品の弾幕描写には作者の妄そ――想像が多分に含まれています。

第三十九章　傭兵と河童の水技

「始めようか、盟友」
にとりはそういうと弾幕と放った。
「シュウ、早いとこ終わらせよう」
「それは同感だ」
俺と妖夢は手早く意思疎通を図り、作戦を実行した。
まず妖夢はにとりに向かって切り込んでいく。そして俺がバックファイヤを務める。
「覚悟ぉぉおお！」
「まさか、そんなんで決まるとは思ってないよね？盟友」
妖夢が河の上に差し掛かった瞬間、河から水柱が立ち上り、妖夢を飲み込まんとする。それをサイドステップでかわすがその先からも水柱は現れる。その上それらの柱はただの水柱ではなく、龍をかたどったものでさながら本物の様にうねり、追跡をかける。妖夢はそれらを切り伏せ続けるが次から次へと現れる。
「この程度だったのかい？だったら尚の事通す訳には―」
「相手は一人じゃねぇぞ」
「―ッ！？」
そうしてにとりが妖夢に気を取られている間に俺は背後を取って、創り出した金属バット（純金製）を叩きつける。しかしにとりもただでやられる訳もなく背中のリュックから飛び出したロボットアームを交差させて俺の攻撃を受けとめる―かと思いきや弾かれて吹き飛ぶ。そして自ら出した水柱に両足をついて止まった。その間も妖夢には大量の水龍の攻撃が降り注ぎ続けている。
「バットだなんて不良みたいな武器使うんだねぇ」
「不良は純金バットなんて持ってないだろ」
「それもそうだ。」

そう言うとにとりは俺にも水龍をけしかけてきた。…正直面倒だ。さっさとカタを付けよう。そう思った俺はスペカケースを展開し、「武装シリーズ」から一枚取り出す。

武装「回転式散弾銃」

俺の左腕を包むのはガトリングマシンガン…いや、使用する弾が散弾なのでマシンガンではないのだが。とにかく俺はそいつを起動して周囲の水龍に鉛玉を叩きこんでいく。すると水龍はしぶきを飛ばして崩れていく。そしてその弾は水程度で止められるわけもなく―。

「あわわわっ!?」

にとりにも降り注ぐ。にとりは対抗して水龍を増やす。…これじゃあ埒が明かないな。俺は上位スペルに切り替えることにした。

武装「回転式散弾銃＜四門仕様＞」

腕についている銃がギミックを変え、腕回りに四門のガトリングを装着する。

「なんなのさ～!?もうこっちもスペル使うしかないよ!」

水符「河童のフラッシュフラッド」

―ドドド

「な、なんだってー!?」
「そいつは弾幕だよ。あんたたち以外に害はないさ」
「そうか、それなら安心―」
「出来ないよ!?そこはホッとしちゃ駄目だよシュウ!?」
「そうだな、ちょっと待ってろ」

隔壁「マテリアル・ウォール」

俺が展開した壁に身を隠し衝撃に備える二人。しかし結果から言って衝撃は訪れなかった。

水符「河童の幻想大瀑布」

にとりが次のスペルを発動したからだ。それでなぜ鉄砲水が来ないのか不思議に思い、河を見ると「日上がって」いた。そして直後日が陰る。
「「え?」」
上を向くと、さっきの弾幕の数十倍の弾幕が落下してきていた。この河の水が全て弾幕となって上空に移動したのだ。それらが一気降り注ぐ!
「逃げるぞ!」
「うん!」
妖夢と二人上空に逃げる。横に逃げなかったのは地面に当たった時のしぶきを考慮してのことだったがそれらのしぶきは今度は水柱としてレーザーのごとく飛んできた。しかもそれらに混ざってミサイルが飛んできている。絶対ににとりの仕業だ。さっきの岸でレーザーとミサイルを撃ちながらにとりがニヤリと笑った、気がした。
俺はスペルカードを取り出そうとしてふと

―妖夢の半霊がいない事に気が付いた。

次の瞬間、レーザーが妖夢を貫く。それと同時に宣言が聞こえる。

人符「現世斬」

”にとりの近くの茂みから飛び出した”妖夢はにとりへと切りかかる。貫かれた方の妖夢をみると半霊がふわふらと浮いていた。つまりこの妖夢はデコイだったのだ。

にとりの顔が驚愕に染まる。そして今切りつけようかと言う時間に割って入る「白い」影。

「あなたたちの目的が何かは知りませんが、私の親友は私が護ります」

妖夢の斬撃を受け止めたのは「紅葉柄の盾」。

「…椛」

そこには白狼の哨戒天狗、犬走椛が堂々と立ちふさがっていた…。

――ｔｏ　ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

第三十九章　傭兵と河童の水技（後書き）

嫁キタ――――――

第四十章　傭兵と戦いの思惑

「あなたたちの目的が何かは知りませんが、私の親友は私が護ります」
「椛…」
にとりの前に堂々と立ちふさがる白狼天狗。…なんか俺たち加害者になってないか？
「俺たちはにとりに危害を加えるつもりはないんだが…」
「あれだけ戦っておいてなにを」
「それはそうなんだけどさぁ…。とにかく目的は妖怪の山を登ることだから」
「シュウ…。哨戒天狗にそれ言っても逆効果だと思うよ」
「尚の事通せません。あなたたちはここで撃退させてもらいます」
「妖夢、幽々子さんの依頼を断る口実が出来たぞ」
「なんて報告するつもり？」
「そりゃ…」
哨戒天狗に負けました、だろう。……。なんかすげぇ腹立つな、下っ端に負けたって言うのは。
「妖夢」
「なに？」
「ぶっ潰そう」
負けましたなんて言えないな、こんな下っ端相手だと尚更。
「そうなると思ってた。…でも私はあの天狗とは相性が悪いかな？」
「妖夢、倒せないの？」
「叩き斬ろうかな、気分的に」
そう言って刀の峯を撫でる妖夢。…個人的にいつぞやの厨房で見たマジギレ（未遂）の妖夢がフラッシュバックしてきて怖いんですが。

「…。こうなる前に追い返したかったんだけどなぁ…」
「どうしたの？にとり」
「いいや、独り言さ」
「そう？」
「そうそう。……ねぇ椛」
「なに？」
首をかしげる椛。ちなみに耳がピクピク動いていて、そのうえ尻尾が揺れているので戦いを控えてそわそわしているのが分かる。
「あの二人、相当強いよ」
「確かにあの少女の一撃は私の盾に傷を入れたしね」
「いいや、本当に強いのはあの青年だよ。どんなにけしかける水龍を増やしてもいかにも『面倒だ』とでも言いたげな表情を浮かべるだけで焦ってもくれなかった。余裕の証拠さ」
「それにやる気になったみたいだよ？」
二人がシュウ達を見ると軽く殺気を放っていた。…実際椛やにとりに非はないのだから逆恨みのも近いのだが。
「私は撤退を奨めたいけど、無理そうだよね」
「うん。私は職務としても引けないし―にとりは光学迷彩で逃げて。」
「…ちょっと無理かな」
「にとり……」
「だってさっき破けちゃったし」
「そこは『椛の事を置いていくなんて出来ないよ！』じゃないの！？私の感動を返して！」
「そんなこと言ったって事実を述べただけじゃないか、そろそろ始まるんじゃないかい？」
再びシュウ達を見ると殺気は薄らいでいるものの、戦闘意欲は健在な二人が目に入った。…。と言うか、待っててくれるんだ…。
待たせても悪いと思い、にとりは意を決した。

「待たせて悪いね、こっちは準備出来たよ」

「あぁ、こっちもヤる気は充分だ」

「そうみたいだね…」

「始めようか、戦いの宴を、ね」

シュウがスペカケースを展開し、妖夢が二本目の刀を抜き、にとりはリュックのサイドポケットに手を入れ、椛が盾と剣を構えた。

あたりを緊張感が支配して…暫く時間が経つ。

風が吹いた。

戦いの火ぶたを切って落とすには十分だった―。

――ｔｏ　ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

第四十章　傭兵と戦いの思惑（後書き）

次話でようやく戦います↑

第四十一章　傭兵と河童の技術力（前書き）

河童の技術力は世界一いいいい

第四十一章　傭兵と河童の技術力

最初に動いたのは椛。

彼女は真っ先に突っこんできた。そして同じように飛びだした妖夢と切り結ぶ。そして止まるはずもなく、妖夢は流れるように踊るように斬り、椛は周囲を飛びまわりながら、或いは蝶の様に斬る。

弾幕よりも自分の剣に磨きをかけた二人の互いの技量のみの戦いが続く。―かと思っていたがその魅入る様な（実際シュウは魅入っていたが）二人の乱舞に水を差す河童が一人。

にとりはサイドポケットの中で何やら操作をするとリュックの下の部分から二つの長い棒を取り出し腋に抱えた。その棒はバチバチと電気を迸らせている。それを見てシュウの脳裏にある単語が浮かんだ。

―電磁砲（レールガン）―

マズイ。そう思った時には動いていた。

「妖夢！離脱だ！」

そういいつつシュウはスキマの構成を組み立てていく。妖夢も危機を察知したのか横っ跳びに飛んだ。直後―。

―ビゴォォォン！！―

直前まで妖夢がいた場所に二本の筋が奔り、電気の残滓を散らしていった。同時装填は出来ないらしくにとりは右側の砲塔の少し弄っていた。が、どうやら装填が完了した様で再び地面を踏みしめ、構えた。

シュウはそれを撃たせまいとにとりへと翔ける。にとりは自分に

向かってくるシュウに照準を合わせ、引き金を引いた。そしてシュウがスキマを展開したのも同時だった。結果として亜音速で飛来する物体はスキマに引き込まれ、同時展開したもう一つのスキマから飛び出した。

―にとりに向かって―。

反応出来る訳もなくにとりは微動だにしなかったが、シュウもまた狙いをつけられなかったのでにとりに直撃することはなかった。が、左側の砲塔を消し飛ばした。

その時の衝撃は直撃でなくとも大きく、にとりはリュックごと後ろにふき飛んでいた。

「スキマ…だって…？そんな、あのスキマ妖怪じゃあるまいし…。」

腰を抜かしたにとりのリュックからはみ出していた右側の砲塔を「分解」し両腕に「再構築」する。そしてそれをにとりにつきつける。

「…むちゃくちゃじゃないか」

「悪いがそれが俺の能力なんでね」

「らあぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

にとりと話していると椛が背後から迫ってきていた。俺はレールガンのうち片方を椛に向けて約一秒間隔で「連射」する。しかし椛も予想していたのかそれらをかわして迫る。妖夢がさらに後ろから追跡してきたのでレールガンを止めてスペルカードを起動する。

火流符「ラヴァトレント」

手早く火炎系魔法を組み立てたシュウは椛に向かって高圧、大量の炎を洪水のごとく放つ。流石の椛もこれは抜けられないと思ったか上空に逃げる。が、先に動きを読んだ妖夢が上から大上段の構えで椛に肉迫し、振り下ろす。椛はそれを盾で受け止めたが勢いを殺

しきれず炎の中へと撃墜された。
「椛！」
動こうとしたにとりの耳元をレールガンの射撃が通り過ぎて後ろの木が砕けて倒れた。動きを奪うにはそれで十分だった―。

戦闘が終わると椛（直前でシュウが術式を停止したので軽くはないが火傷で済んだ）は「上司に報告します。帰った方がいいと忠告はしました」と悔しげに残して飛んで行った。
にとりはと言うとシュウの能力に興味を持ったのか工具セット片手にじっとシュウを見つめている。…そんなに期待に満ちた目で見られても特にすることはないんだが…。
「シュウ。そろそろ進もう？」
「そうだな」
「また来ておくれよ、盟友。普段はこの河の下流に居るからさ」
「んー。気が向いたらな」

そう言ってにとりとは別れた。

第四十一章　傭兵と河童の技術力（後書き）

しまった！ビームライフル撃たせるの忘れた！↑

第四十二章　傭兵と壊れた彼女（前書き）

いま宿題が修羅場なんだがなぁ…。
とりま次話投下～。
明日はどうなるか分かりません。

第四十二章　傭兵と壊れた彼女

にとりと別れた俺たちは再び妖怪の山の登山を再開した。
太陽は空高くあがり時間は昼過ぎを迎えていた。
「妖夢、そろそろ昼飯に―」
「暑いね」
「妖夢、俺さぁ。腹減っ―」
「にしても日差しが強いなぁ」
「ようｍ―」
「タオル持ってくればよかったかなぁ」
「……」
「……」
「……」
「なに？シュウ…」
「せめてさ、会話はしようぜ」
「なんかごめん」
「そろそろ昼飯にしないか？」
「忘れちゃった」
「そうか、仕方ないな」
「仕方ないね」

「――って昼飯どうすんのさ！？」

「てへ☆」
「……」
この期に及んで『てへ☆』で済ませようとする妖夢。まぁ可愛いからいいけど。……。ここで許しちゃう俺も俺だな…。
「さて、どうするよ」

「現地調達？」
「夏の妖怪の山でなにが採れるか？」
「♪♪♪～♪～♪♪♪～」
そんな話をしている時に目の前を横切る夜雀。と
「そっち行ったらマズいって！妖怪の山には怖い天狗がいるんだよ！？ねぇ！待ってよみすちー！」
それを追いかけるリグル。
「ねぇ、シュウ」
「なんだ？」
「今、私さ」
「うん？」
「無性に焼き鳥が食べたい」
「「「……」」」
何も返せない俺と、いまの発言で凍りついた夜雀たち。暫くしてからゆっくりとこっちを振り向くミスティア。その視界に入ったのは
未だに硬直から抜け出せないリグル。
目を合わせようとしないシュウ。
そして
「……」（じー）
ミスティアを見据えたまま鯉口を切ってそわそわしている妖夢。
この時ミスティアは思った。

（リグルの言うこと聞いて妖怪の山に入らなければ、もっと長生きできたのになぁ）

「妖夢」
「なぁに？」
「焼き鳥は、無理じゃないか？」
「なんで？火はシュウが用意出来るし、鳥はそこに―」
「それ以上は言っちゃ駄目だ」
「……」
「一旦刀納めようか」
「？…うん？」

なぜか首をかしげながら納刀する妖夢。シュウは思った。妖夢は熱と空腹で頭がやられてしまったんだ、と。決して主に似てしまったとは考えたくなかった。妖夢が再び無意識に抜刀しようとした時―

「みすちーは僕が守るよ！」

突如振り返って叫んだリグル。妖夢はそのまま抜刀してリグルをじっと見つめた。リグルの頬を汗が伝い、両目に涙を浮かべて―

「みすちぃぃぃぃぃぃ！」

ミスティアに泣きついていた。ミスティアも流石に不憫に思ったのか優しく抱きしめて、頭を撫でている。あぁ、可哀想に。

そしてこの時、シュウは思った。誰か、食べ物をくれ。妖夢に食わせて正気に戻してくれるなら蛙の唐揚げでも何でもいいから。―と。

「お？何やって―。どういう状況だ、こりゃ？」

そこに現れたのは魔理沙だった。彼女は片手に袋を提げていた。

「魔理沙じゃないか！ちょうどいいところに」

「？」

「なにか、食べ物はないか？あと、冷やすもの」

「阿求に貰った煎餅ならあるが…？」

「おぉ！それをくれ！」

―事態収拾中―

「…ごめん。迷惑かけて」

「いや、いいんだ。もとに戻れば」

結局あの後（魔理沙に指摘されてようやく気がついたのだが）魔法で温度を下げて物質化で水分を取らせ、しばらく安静にする事で妖夢は正気を取り戻した。

「みすちぃ…。」

「大丈夫？リグル」

ちなみにリグルは未だミスティアにしがみついて…いや、抱きついていた。

…いつまでああしているんだろうか？「あやや？今回はちょいと遅かったですかね？庭師が発狂したと聞いて来たんですが」

「発狂はしてないんだが…」

狂ってしまってはいたが。…と言うか間に合って良かった。このままじゃあ新聞のネタにされるところだったな。

「とりあえず、俺達は先に進むか」

「そうだね」

「ちょっと待ってください」

妖怪の山を登るべく進みだした俺達に文が立ちふさがる。

「あなた達でしたか、報告にあった”侵入者”と言うのは」

「天狗に用事はないんだがな…」
「一応建前だけでも闘いませんと、私にも立場がありますので」
そう言うと手帖を扇に持ち替えて
「今回はシュウ、”あなたの戦い方”を取材させて貰いますよ。」
そう言ってニヤリ、と笑った。

――to be Continued・・・

第四十二章　傭兵と壊れた彼女（後書き）

はてさて、文が相手とか攻撃が当たる気がしねぇｗｗｗ
しかも書く時間ないしｗｗｗ
とかいいつつ書けるように努力はします。
投下されなかったらきっと宿題で死んでいる事でしょう。

第四十三章　傭兵とやり過ぎな戦い（前書き）

気がついたら風神録に…

第四十三章　傭兵とやり過ぎな戦い

「今回はシュウ、”あなたの戦い方”を取材させて貰いますよ。」

文はそう告げるとシュウへと突撃してきた。

「疾走風靡」

文は風をまとって詰めてくる。シュウはそれを動き回ってかわすものの同時に文が放つ風圧弾に動きを阻害され、何度か捕まりそうになる。そして文はなかなか捕まらないシュウから一旦距離を取って再び宣言した。

風符「天狗報即日限」

宣言直後文の姿がかき消える。―いや、視認できなくなる。そして全方向から迫る弾幕をかわしながら嘆息する。

「……ふぅ」

「どうしました？全く手も足も出ません？それはそれで取材にならないんですが」

「こんな風に見せつけられると…

―その自信、とことんへし折ってみたくなる」

「…やはりとんだ戦闘狂ですね」

「やはり、とは心外だな」

「以外でも何でもありませんよ。以前から彼女の事になると見境なくなる傾向にありましたし。戦闘狂の素質は充分かと」

「そんな素質はいらん」
「で？どうやって私の自信をへし折るつもりです？」
「もちろんこうやってだ」
シュウはそう言うとおもむろにスペルカードを宣言した。

武装「ブースター」

シュウの両手足にブレスレットの様な機械が装着される。…と言っても見た目はただの金属の装甲の様なのだが、これはチカラの伝達効率を向上させる端末。つまりは出力が上がるも同然と言う事。
「何か装備したようですが、認識出来なければ意味がないのでは？」
「問題ないさ」
シュウは端末にチカラを流して、爆発させた。
「あややっ！？」
その爆発は純粋なチカラの暴風。いかに風を操ろうとも防げない。
文はそのチカラに圧力によって上空に打ち上げられた。
そして無防備になったその体躯に追い打ちをかける。

砲弾「タンク・キャノン」＜三連装＞

１８００ｍｍ滑空砲が文に向かって炸裂する。ぎりぎりで態勢を整えた文はそれを紙一重でかわす。二発目もかわしたが、その直ぐ背後で爆発が起こる。文はまたしても、今度は前方へと吹き飛ばされる。すると三発目をもろに食らってしまいさらに打ち上げられる文。
そこにさらに攻撃を加えるシュウ。

疾風「テンペスト」

文の周りに暴風が立ち込める。それには雨も含まれており、文の

体を濡らす。
「…っく…。私相手に風の攻撃なんて、随分なめた真似をしますね…。風は、ただ起こすだけじゃないんですよ！」
竜巻「天孫降臨の道しるべ」
ふもとの河の水まで巻き込み、さらに肥大化する竜巻。その中には風圧弾が無数に混ざっており、その場に留まる事すら困難になる。しかし、これはかえってシュウに有利に働いた。シュウは風と同じ速度で文の周りを旋回しながら竜巻中の水分を＜水素＞と＜酸素＞に分解した。そしてシュウはスキマで風力圏から離脱して新たにスペルカードを発動した。
雷符「ヴィジテイションサンダー」
ここで皆さんには中学の化学を思い出してもらいたい。水素を酸素を混ぜた気体に点火するととどうなっただろうか。一気に爆発し、水が精製されたはずだ。それもごく少量ながら大きな爆発音を伴って。何が言いたいかと言うと、試験管程度であの爆発なのだから台風並みの水分量で行ったら…。想像を絶する爆発になる事がおわかりだろうか？つまりはそういうことである。
――ドオォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォン……――
上空高くで起こった大爆発は幻想郷を揺るがした。中心にいた文は流石は妖怪と言うべきか黒こげで済んでいた。…と言うかそれでも壊れていないカメラは実は凄いんじゃなかろうか？俺はあらかじめ避難させておいた妖夢と合流した。
「ねぇ、シュウ」
「ん？」

「さっきから、ちょっとやりすぎてない？」
「そう、だな…」
「今度は見つからないように行こうか…」
「あぁ」
さっきの爆発で出来た水が降り注ぐなか二人でこっそりと頂上を目指すことにした。

第四十三章　傭兵とやり過ぎな戦い（後書き）

やりすぎた…

第四十四章　傭兵と早苗（前書き）

腋巫女その2登じょ（ｒｙ

第四十四章　傭兵と早苗

「ついに、着いたね…」
「あぁ…」
シュウ達は守矢神社に到着していた。―が、
「早速用事を終わらせるか」
「だね」
「……」
「どうしたの？」
「用事って何だっけか？」
「何言ってんの？用事っていったら…」
「言ったら？」
「……」
「……」
「なんだっけ…」
二人して目的を失念していた。その後、思いだそうと鳥居のそばで考え込んでいると階段を上がってきた少女に声をかけられた。
「あの…大丈夫ですか？」
「え？」
「大丈夫ですか？」
「あぁ、問題ない」

「…。そこは違うでしょう…」

後ろを向いて何か言いたげに呟く少女。
「なんか言ったか？」
「いえ。なんでしたら上がっていきます？」
「妖夢、どうする？」
「え？あ…うん。それじゃあお言葉に甘えて。よろしくお願いしま

す…えぇと…」
妖夢が名前を呼ぼうとして言葉に詰まった。少女はそれを正しく汲んで自己紹介を始めた。
「東風谷早苗です。早苗、でいいですよ。それじゃあどうぞ」
二人は誘われるままに母屋へと足を踏み入れた。

「あ、それじゃあ私はお茶を入れてくるのでそこで待っててください」
早苗はそう言って奥に行ってしまった。自然と二人が客間に残される。立ったままと言うのも何なので座ろうとしたが、座布団が一つしかなかった…。
二人共相手が使うと思ったのか座布団を挟んで座っていた。
「シュウ、座布団使わないの？」
「妖夢が使っていいぞ」
「私はいいよ。シュウが―」
「いやいや、妖夢が―」

「お待たせしま…」
「あぁ、どうも」
「……／／／」
早苗が言葉を失ったのはシュウが座布団に胡坐をかいていてその上に背後から抱かれるように妖夢が座っていたからである。ちなみに妖夢は羞恥で紅くなっていたりする。
「シュウぅ…やっぱり普通に―」
「家ではいつもそうしてるんですか？」
「そうだな…」
「こんな体勢したことないよ！？」
「そうなんですか…」
話しながらお茶を配り終えた早苗が二人の対面に座り、本題を切りだした。

「それで…。今日はどんな用事だったんですか？」
「それが、主に言われてきたのは覚えてるんだが…。」
「…覚えてないんですか？」
「何せ道中が激しかったしな」
「もしかして、さっきの落雷って…」
「あれは俺が」
「へぇ…。強いんですね」
「…そうか？」
「シュウ…自覚持った方がいいよ？」
「自覚、なぁ…」
ちなみにこの時シュウは妖夢の方を向いて話したのだが、体勢上そうなると耳元で囁く形になり、妖夢がさらに赤面していたりする。

閑話休題。

「それにしても…用事が思い出せないと、どうにも…」
「そうだな…」
話題が行き詰まり始めた。その時
「おーい。早苗ー。頼まれたものを持ってきたよ―おや？」
現れたのはにとりだった。
「もうできたんですか！？」
「うん。これが注文の品だよ！」
そう言って指差したのは。
「パワードスーツ…ッ！？」
「にとりさん！早速着てみても！？」
「いいよ。最初は動きに慣れるまでセーフティモードで動くようになってるから」
そう言って早速着用する早苗。メタリックなボディから早苗の顔が出ていてなんだかラノベの世界の様だった。
「まるでラノベだな」

「ライトノベルをご存じで！？」
「え？まぁ外来だしな」
「それじゃあ！来週あたりに秋葉いきませんか？」
「え？幻想郷に秋葉が？」
「博霊神社からそとに出られますよ？…まぁ特別な許可が必要だったり持ち込み制限があったりしますが」
「なん…だと…ッ！？」
「あー。早苗」
「はい？どうしました？にとりさん」
「着た感じはどうだい？」
「全然違和感ないです。むしろこの普段より軽い気がします」
「反重力装置も上手く動いてるみたいだね」
「なんでまたパワードスーツなんて作ったんだ？」
「モビル〇ーツが良かったんですけど流石に大きすぎるのでしまうところが無いじゃないですか」
「しまう場所があったら作らせたのか？」
「もちろん！巨大ロボは人類の浪漫ですから！」
「……」
「えぇと…シュウ。これ何？」
「ん？あぁ、妖夢は知らないか。これは戦闘用強化外骨格ってところだな。これを着れば耐久性、機動性、筋力とか…その他もろもろが補助、強化されるんだ」
「それじゃあ、実践テストと行きたいんだけど…シュウ、相手してくれるかい？」
「構わないが、耐久性は？」
「レールガンぐらいなら耐えられるよ」
「武装は？」
「一応マシンガンとか”いろいろ”ついてるけど…あんまり使わないだろうね。弾幕張ったほうが実践的だし。一応オートリロードはついてるけど」

「充分だ。それじゃあ早苗。”銃弾戦”といこうぜ」
スペルカードケースを展開しながらシュウはそう言った。

――to be Continued・・・

第四十四章　傭兵と早苗（後書き）

…。最近バトルばっかりだな…。

第四十五章　傭兵と本職＜幻想版＞（前書き）

ようやく、ようやく銃弾戦が書ける…。

第四十五章　傭兵と本職＜幻想版＞

「充分だ。それじゃあ早苗。”銃弾戦”といこうぜ」
そう言うとシュウは武装シリーズからスペルカードを発動した。

完全武装「バトルセット」

シュウは身体の”生体情報”の構成を書き換え、皮膚に不可視の”対銃弾装甲”を展開。両手にＰ９０を展開し、またその他の銃火器を一瞬で出せるようにチカラの状態でセットした。
その後一応この庭全体に岩を突出させ”盾”を創り出した。
「俺は準備完了だ」
「早苗。ヘルメットから”アクセス”してみな。必要な動きが”身体に”覚え込まれる（インストールされ）から」
「分かった」
そう言うと早苗はヘルメットをかぶり、暫くしてゴーグルの中で目をあけた。
「こっちもいいよ。”覚えた”から」
「二人とも。一応言っておくけどこれは耐久性と機動性のテストだから。一発も当たらないんじゃ困るし、その場でじっとしたまま撃ち合われても困るからしっかりと”動いて当て合って”ね」
「「了解」」
二人の間に風が吹いた。

開幕すると初っ端から早苗は両腕から機関銃（どうやらスーツの備え付けの様だ）を打ち放し始めた。
俺は近くの岩場にハイディングしながら”早苗の視界に映らないように”岩場を移動した。

そして側面から二丁とも一気に撃つ。突然の側面からの衝撃に早苗は一瞬たたらを踏んだが、手早くこっちに向き直るとまたしても撃ちまくる。こんなに無駄弾を撃ってると普通はすぐに弾切れを起こして蜂の巣になるんだがなぁ…。

俺は隣の大きな岩場を登り、対物ライフル（ヘカート?）を早苗の肩に照準を合わせ引き金を引いた。すると俺の予想に反して”傷一つつかず”に早苗を転倒させた。

俺は狙撃の鉄則に従ってその場を離脱しようとして、――足場を失った。

早苗をみると構えている得物がマシンガンからレールガンになっており、俺の足場たる岩をばらばらに砕いたのだ。早苗は落ちている俺に一瞬で肉薄し、”高圧電流を纏った”拳を構えた。俺はとっさにランチャー（パンツァーファウスト?）を撃ちこみ、爆風でその場を脱出した。

この短時間でわかったが、あのスーツは化け物だ。”現代兵器では”全く歯が立たない。それではどうするか。”幻想の兵器”で対抗するまでだ。

俺は銃火器の展開を止め、スペルカードは発動した。

嵐風「バレット・ストーム」＜追従型＞

俺は自分の両脇に対物ガトリングを二十挺待機させた。これが今までの兵器と違うのは弾が”タダの金属”ではなく魔力、妖力、霊力、神力を混同させたものから出来ている事だ。つまり”内苞するチカラの量”が圧倒的に違うのだ。

煙の中から出てきた早苗に鉄の暴風を浴びせる。弾が着弾するたび細かな”キズ”が入っていく。そしてさっきの戦闘で把握したことだが、「ダメージは与えられなくても衝撃は通る」のでこれだけの物量を当てれば”多少は”ひるむだろう。

しかし早苗は着実に歩を進め、跳躍した。そこに俺は別のスペルを合わせる。

終末「バレッツ・アンブッシュ」

地面に転がった銃弾が一斉に上空めがけて飛びだす。流石の早苗もこれには驚いたようでゴーグルを両手で保護しながらさらに上空へ後退した。

さらに俺は追撃をかける。

照準「レッド・ポイント」

上空に浮かんでいる弾幕（銃弾）が一斉に早苗に殺到する。そして弾が全弾命中したのを確認してからそれらの弾を全てチカラに還元してそのチカラを「重力」に変換した。

結果上空高くに居た早苗は何十倍にもなった重力によって亜音速で地面にたたきつけられて停止した。

第四十五章　傭兵と本職＜幻想版＞（後書き）

この小説を書き始めたのが東方で銃弾戦をしたいってことだったんですな↑

第四十六章　傭兵と早苗的黒歴史（前書き）

銃弾戦のあとで明るみになった真実、もとい黒歴史

第四十六章　傭兵と早苗的黒歴史

「早苗！大丈夫かい！？」
にとりが大慌てでヘルメットをはずすと目を回した早苗の顔が出てきた。命に別条はないようだ。
「シュウ、あんたちょっとやり過ぎじゃないかい？」
「思いっきりやるように言ったのはにとりじゃないか」
「…。衝撃緩和装置付けといてよかった…。」
「シュウ、最近戦いにやるとハメはずし過ぎだよ」
「うぐ、そう…だな。」

ちなみにスーツには細かいキズこそ入っているが基本的には大した損傷もなかった。
「これなら、後は衝撃緩和装置を強化して…」
「なぁにとり」
「なんだい？」
「そのスーツ、ねじられても大丈夫なのか？」
「え？」
「衝撃に耐えられても、たとえば俺みたいなのが関節技で骨を折りにいったらどうなってた？」
「…割れてたね、このスーツ」
「そうか。その辺も考慮したらどうだ？」
「うーん。そうか…それじゃあここの稼働域を―」
ちょっとしたアドバイスをするとにとりは何やら書きなぐって考え込んでしまった。
暫くすると妖夢が早苗の部屋から出てきた。
「目覚めたみたいだよ」
「そうか。にとり」

「でもここの装甲を削るとここの素材が露出するから耐久性が―」
「妖夢、にとりは行けそうもないな」
「みたいだね」
そう言うと二人で早苗のもとに向かった。

「シュウさんやっぱり強いじゃないですか…」
「そうみたいだな」
「スーツもあるし、最初の攻撃弾いた時点ではいけると思ったんですけど、最後のなんですかぁ…。むちゃくちゃじゃないですか…」
「まぁ、なんだ。経験？みたいなのもあるし。あとは俺の能力がちょっとね。特殊なんだ」
「チートの間違いじゃない？」
「…これだからビーダーは」
「βテストに参加した覚えはないぞ」
「そうでしたね」
あはは、と笑って見せる早苗。「でも、」と続けた彼女の表情は多少曇ってみえた。
「最後のは凄い怖かったんですよ？」
「あー。高速で地面が迫ってる訳だしな…」
「むしろ亜音速だったよ、あれ」
「あれってどうやったんですか？」
「銃弾をチカラに変換してそれを重力に変換したんだが…」
「…そもそもそれって物理法則が仕事放棄してません？」
「そういう能力なんだよ。第一幻想郷自体が物理法則が怠けてるとしか言いようがないじゃないか」
「それもそうですね」
そう言って笑いあっているとふすまが開かれた。
「早苗！大丈夫なの！？」
「あ、諏訪子様」
「銃弾で蜂の巣にされた揚句マッハで叩きつけられて意識不明って

聞いたけど！？」
「あながち間違ってないです」
「あってるの！？なんで生きてるの！？」
「落ち着いてください…。混乱し過ぎて酷いこといってます…」
「だって早苗が不死身に…。さては月の蓬莱人の仕業だね！さっさととっちめて―」
「落ち着いてくださいよ！」
「大丈夫！ガンキャノン連れていくから！今すぐにでも出撃し―」
「落ち着いてくださいってば！」
そいうと早苗がどこからか出したお祓い棒で思いっきりその頭をはたいた。諏訪子は頭を押さえて「あーうー」と唸っている。
「早苗…神に対する態度じゃないよ…」
「家族なので構いません。私だって神ですし」
「早苗…」
「シュウさん！？違いますよ！？決してイタい人じゃないですからね！？」
「そう言えば早苗、こっち来たばっかの頃『私は新世界の神に～』とか言ってたよね～」
「諏訪子様！余計なこと言わないでくださいよ！」
「早苗…やっぱり…」
「妖夢さんまで！？違いますから―！！」

結局その場が収まったのは日がすっかり落ちてからだった。

第四十六章　傭兵と早苗的黒歴史（後書き）

ちなみに作中のガンキャノンはキャノ子で…おや、誰か来たようだ…。

第四十七章　傭兵と狩りの気配（前書き）

気がつけば前回で５０話も上げてたですよｗｗｗ

第四十七章　傭兵と狩りの気配

気が付くとすっかり夜になっていたので俺たちは帰る事にした。
「ホントに私はイタい子じゃなくて―」
「分かったから」
「投げやりに答えないでくださいよ。信じてくださいよ」
「はいはい。とりあえず俺たちは帰るな」
「じゃあね、早苗」
「私が普通の子だって信じてくれるまで帰しません！」
「スマン、妖夢。俺、泊っていくわ」
「私も帰して貰えそうにないなぁ…」
「二人とも！？」
「冗談だってば…半分くらい」
「だから私は―」
「早苗、そろそろいい加減にしな」
「あぅ…」
「私は分かってるから」
「諏訪子様…」
「早苗は普通のイタい子だってね！」
「諏訪子様ぁ！」（泣）
「…じゃあ」
「さよなら～」
こうして俺たちは長かった旅路に幕を下ろすべく家路に就いた。

…のだが。

「なぁ妖夢」
「んー？」

「白玉楼はどっちだ？」
「……」
「……」
「とりあえず山下りるか」
「そうだね」
完全な暗闇でさっきまで蝋燭が煌々と室内を照らす場所にいたせいもあって全く視界が利かなかった。だからどっちに向かえばいいかさえ分からなかったが、とりあえず水の音のする方へ向かった。

俺たちは暫くすると滝の上に突き当たった。その滝は夜だからか視界が利かず、底まで見とおすことはかなわなかった。そういえば来るときにこんな所は通らなかった気がするな…。

―キラッ―

そんな風に滝を眺めていると遠くで何かが光った―気がした。その光はおそらく「月の光を受けた刃」のもの。つまりそこには刀を抜いている何かがいると言う事。直後妖夢と俺の間を何かが通り過ぎていった。これが昼間だったら視認出来ただろうが、あいにく今は夜。目が上手く相手をとらえられない。
「あなたたち、天狗に用はなかったのでは？」
不意に聞こえてきたのは聞き覚えのある声だったが、人物の特定は出来なかった。
「……」
ここで黙ってしまったのは天狗ならば土地勘があるだろうから山を抜けられるかもしれないなどと考えていた間だったのだが相手には問いかけに対する黙秘として取られたようだ。
「忠告はしたはずですが、飽くまで引かないつもりですか」
言葉こそ疑問を呈しているが、その言葉には既に覚悟がしっかりと刻まれていた。

「ならば私がお相手しましょう」
一言ずつ噛み締めるように、相手の意識に響くように、ゆっくりと言葉を紡ぐ。
「それが哨戒を任された私の使命…」
そう言って”椛”はゆっくりと眼を開き俺たちを射竦めてから見せつけるように嗤った。犬歯を見せつけながら嗤うその姿、その雰囲気は
―狩りをする悦びに打ち震えているようだった。

――next battle is ”momiji inubasiri” ―Phantasm―
――to be Continued…

第四十七章　傭兵と狩りの気配（後書き）

椛（ＰＨ）登場です！！

第四十八章　傭兵と目覚めた白狼（前書き）

椛の実力とは…

第四十八章　傭兵と目覚めた白狼

「飽くまで引かないつもりですか」
「ならば私がお相手しましょう」
「それが哨戒を任された私の使命…」
そう言って嗤う椛。その笑みを前にして俺は「そういえば今日は満月だったな…」などと場違いなことを考えていた。
「ねぇ、シュウ」
「どうした？」
「あいつ、かなりヤバイよ…」
「と言うと？」
「満月の持つチカラに完全に呑まれて箍が外れてる」
「なるほど、それであの殺気と言う訳か」
「この期に及んで雑談なんて、随分な余裕ですね」
突然割って入った声に危機を感じ取り、俺は妖夢の手を引いて急上昇した。直後、さっきまで俺たちがいた場所を”刃”が通り過ぎた。”刃”としたのは刃物が反射した月明かりしか視認出来なかったためである。
「妖夢！散開だ！視覚は当てにならない！気配でかわして反撃するんだ！」
「わかった！」
とは言うものの純粋な敵意、いや害意はしっかりと察知出来るが気配となると話は違った。椛は高速で動き続けており、それでいて気配を殺している。攻撃を仕掛けてくる一瞬のみが反撃の好機だろう。
俺は直線でしかない銃弾では分が悪いと考え、初めて軍に入ったころから愛用しているコンバットナイフを手元に召喚し、両手にはメリケンサックを装着した。メリケンサックの突起部分には相手の行動を阻害する術式をスタンバイさせた。ゴーグルをかけ、その内

部であるＮＶＧ（Ｎｉｇｈｔ　Ｖｉｓｉｏｎ　Ｇｏｇｇｌｅｓ。別名暗視ゴーグル）を半起動させる。

そうしている間に妖夢は椛の襲撃にあっているようだったがこれだけ高速で飛びまわっていると寧ろ参戦すれば妖夢の行動を妨げてしまう。

まだこっちに来るようすはないのでさらに準備をすすめる。

武装「ブースター」
完全武装「バトルセット」

不可視装甲と行動補助装置を装着。これで”人の身でありながら妖怪と同等の出力、耐久力”をそなえる。こうでもしないと箍が外れた妖怪と近接格闘なんて出来やしない。

一方妖夢。

「こ…の…っ！」

妖夢は苦戦していた。相手の太刀筋はおろか、姿すら視認できないのだから。しかしこうして張り合っているのはひとえに訓練の中で培った危機回避能力、要するに直感だけを頼りに相手の攻撃を防いでいるからだ。しかし後手後手になっており、戦況はあまり芳しくない。

「あぁもう！」

魂符「幽明の苦輪」

本来ならば「幽明求聞持聡明の法」を使いたかったがあまり消費する訳にもいかない。同期までに時間はかかるがそこは自分自身で時間を稼げばいい。

―結果としてその判断は間違いだった訳だが。

同期するにはどうしても多少なりともそちらに意識を割く必要がある。椛がそこを見逃す訳もなく高速移動の慣性と速度、パワー…全ての乗った一撃を振り下ろした。もちろん妖夢も反応したが本来ならばどう考えてもかわすべき一撃を受け止めてしまった。そうして妖夢が上空高くから地面へと眼にもとまらぬ速さで墜落していった。

――to be Continued・・・

第四十九章　傭兵と終わりの音

シュウは妖夢が撃墜される瞬間を見ていた。
彼女はたしかに椛を攻撃を防いではいたはずだ。だからシュウは妖夢の救出よりも先に追撃をかけようとしている椛の足どめに向かった。
「らあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」
「邪魔ぁ！」
椛はそう言って刀を持たない左手もシュウに向けた。直後、シュウの視界が真っ白に染め上げられた。
（なにッ！？）
シュウは一瞬閃光を疑ったが眼は焼かれていない。そして気が付いたのだ。
―視界が白くなったのではなく、視界を埋め尽くす白い弾幕が迫っているということに―

通り抜けられる間はところどころにある。それで充分だと判断し、シュウは必要最低限の動作で回避しながら前へ進んだ。途中で何発か被弾するが、装甲で弾きながら進む。と言っても弾幕の一つ一つが強力なため、装甲もいまいち信用に足りないのだが。それでも前に進み続けた。
椛は若干の焦りを覚えていた。
ひとつは二人が思った以上に粘る事。久しぶりに本気で動いているのであまり時間に余裕が無いのだ。にもかかわらず視認出来ないはずの攻撃を弾かれ、回避出来ないほどの弾幕をくぐりぬけてくる。今は好機のはずだった。妖夢をたたき落とし、追撃を掛ければ充分

にとどめは刺せるはずだった。シュウもこの密度の弾幕で一旦退くと考えていた。

前回の戦闘でスペカが焼かれてしまったのも痛かった。

（甘かった…。考えがどこまでも甘かった。この二人相手にスペカなしで勝てるなんて…。ましてや油断するなんて…どこまでも甘い！）

しかし後悔しても既に遅い。戦いの火ぶたは切って落とされたのだから。

さっき妖夢が墜落した場所で「二人の」少女がスペカを掲げているのが見えた。

魂魄「幽明求聞持聡明の法」

妖夢は叩き落とされた先で半霊に自らをトレースさせた。そして横から見ると極太レーザーにも見える弾幕を放つ椛に向かって飛翔しながらスペカを発動した。

「「剣伎『桜花閃々』！！」」

二人の妖夢は桜吹雪を撒きながら椛へと肉迫した。しかし椛がシュウに向けていた弾幕を妖夢に切り替えて放った事で半霊がダメージを多く負ってしまい、霊体に戻る。その間に妖夢が椛に攻撃を加えたが盾で弾かれてしまった。

シュウは妖夢の攻撃でひるんだ椛を殴りつけた。それによってあらかじめスタンバイさせた術式が発動し、椛の行動を阻害する。続けざまにもう一発術式をたたき込む。シュウはこれで相手は動けなくなった。だから勝てる。そう思っていた。しかしシュウは失念していた。これが行動を「阻害」する程度でしかない事を。

椛は自分の体が思うように動かないと理解し、近づけさせないために弾幕をめちゃくちゃにばら撒いた。威力だけを重視した大玉の弾幕。しかし油断している上に触れ合う距離にいたシュウに当てるには狙いなど必要なく（また、狙いをつけるだけの余裕もないのだが）、何発か被弾したシュウは吹き飛び、地面を何度かはねて巨大な樹に衝突して止まった。椛はなりふり構わずシュウに弾幕を放ち続けた。

シュウは暫く気絶していたようだ。目を覚ますと大量の弾幕が迫ってきておりそれを妖夢が必死に弾いていた。どうやら戦況を整理するとかなり不利なようだ。椛はさっきの術式に反発しようとした反動か、狂ったように弾幕を放っている。その弾幕を浴び続けた後ろの大木もそろそろ限界なのか今にも倒れそうだ。このままだと潰されてしまう。

シュウは「切り札」を使うことにした。

「妖夢」
「シュウ！大丈夫！？」
「あぁ、大丈夫だ、問題ない。それより時間を稼いでくれ」
「え？」
「決めに行く。だからこのままの状態で時間をくれ」
そう言うとシュウは弾幕の一つを物質化して掴んだ。その構成から椛そのものにアクセスする。

解析「崩壊の序曲」

――――――……！！

言葉に表現出来ない音が響きわたる。強いて言うならば澄んだ鈴の音が近いだろうか。いや、むしろその残滓か。

その音が響いた瞬間飛び交う弾幕は”存在から消え去り”椛は意識を失ったように地面へと落下していった。

第五十章　傭兵と夏の日の終わり

「え？」

椛は茫然としていた。なぜならば今まで放っていた弾幕がかき消え、さらに自分からチカラが一瞬にして抜け落ちて飛行することすらままならなくなってしまったからだ。

「う…そ…？」

どんどん速度を増して落下する。着地しようにも突如現れた”異常なまでの疲労感”の所為で身体が言う事を聞かない。

（このままじゃ受け身もろくに取れずに落下する…っ！？）

あまり考えたくない類の想像が椛の頭をよぎる。…が、衝突することはなかった。

「あやや…。なにやってんですか」

文が椛を受け止めてゆっくりと着地する。

「文…様…？」

「満月で気が昂ぶってるからって、見境なく襲うんじゃただの獣でしょうが」

「でも、彼らは侵入者で―」

「えぇ。でも侵入者が『帰るところ』を襲撃してどうすんですか、全く」

「……」

「動きが良くなってる事は認めますが、判断力が足りなすぎです」

そういって締めくくると「さて、謝りにいきましょう」といって椛を引きずってシュウのもとに向かった。

「シュウ、大丈夫？」

「あぁ。問題ない」

「ところで今のって？」

「相手の体の構成をちょっと弄っただけだ」

「え？それって―」
「ちょっと良いですか？」
「いつぞやのブン屋じゃないか」
「えぇ。清く正しく射命丸です」
「知ってるって」
「今のは定型ですのでおきになさらず。さて、さっきはうちの部下（もみじ）が迷惑をかけたようで…申し訳ありません」
「いや、俺は大事にはなってないから大丈夫だが、妖夢は？」
「私も特には」
「じゃあ俺たちは別に問題ないから」
「ですが―」
「ただ、代償といってはなんだが。道案内を頼めるか？」
「道案内…ですか？」
「戦ってるうちに帰り道を見失ってな」
「それじゃあ…里のはずれまで送ります」
こうしてシュウ達はようやく帰路に就いたのだった。

「ただいま～」
「ただいま帰りました」
「遅いわ。妖夢、シュウ。…それで唐揚げは？」
「「あ……」」
「二人とも？」
「すいませんでした、幽々子様」
「幽々子さん、忘れてた」
「酷いわ！二人とも！」
そう言って泣き崩れる（仕草をする）幽々子さん。今の会話を聞いていたリリーが食ってかかってきた。
「そうですよ！酷いです！二人が何の作り置きもなしに出かけるから私は働き詰めだったんですよ！」

「え？煮物を置いてきたんだけど…？」
「え？なかったですよ？」
「あ、煮物なら今朝食べたわ」
「……」
「とにかくシュウも妖夢ももう一回行ってｋ―」
「「嫌です」」
「…酷いわ、二人とも」
こうして白玉楼の夏の日は過ぎていった。

第五十章　傭兵と夏の日の終わり（後書き）

酷い酷い言ってますけどゆゆさんに酷いって言う資格ないと思ったりｗｗｗ

幕間４　山の神の疑念

「…帰ったかい？」
「あ、神奈子様。どこにいってたんですか？」
「ちょっと地下の様子を見に行ってきたよ。それにしても随分やられた様じゃないか」
「まぁ、彼はちょっと…反則だろうね」
「ですね」
「諏訪子もそう思ったか…」
「…神奈子様？」
「いや、彼は面白いし第一使い道があると思ってねぇ」
「神奈子、うまく取り込めないかい？」
「……」
「神奈子？」
「ただ、取りこんでもいいのかね…」
「……」
「どういうことですか？」
「私たち三人掛かりでも彼を制御出来そうもないってところが問題なのさ」
「道具と考えるのではなく、仲間として考えたらどうです？」
「河童じゃあるまいし…と、言いたいところだけど現実そうするしかないだろうね」
「いざとなったら切れるし、それなら問題ないか…でも―」
「切るって事は捨て駒にするってことですか？」
「あぁ。でもそうすると問題が発生する」
「「？」」
「彼は、幻想郷に欠かせないものかもしれない」
「どう言う意味だい？説明しとくれよ、神奈子」

「いや、『神の勘』としか言いようがないんだがね」
「それでどんな問題が？」
「私たちみたいな神の分際で手出しするなっていいことだね？」
「そういうこと」
「神の分際って…」
「早苗、私たちだって幻想郷に生きるものなんだよ。だから幻想郷に仇なす事は出来ないってこと」
「それにそろそろ何か起きそうだし」
「早苗はいつも通りに過ごしな」
「はぁ…」
早苗はいかにも納得できないと言った感じだったが、その場では口に出さなかった。
「そろそろ何か起こりそう」と言う神奈子の発言が気になったからかもしれないが、何故黙り込んでしまったのか本人でもよくわからなかった。

幕間４　山の神の疑念（後書き）

これにて風神編は終了です。今後の更新については未定ですが、明日更新出来たら更新しようと思っています。

第五十一章　傭兵と欠けた月（前書き）

永夜抄突入！

第五十一章　傭兵と欠けた月

ある日、昼ごはんを作っていた時の話。妖夢は唐突にこんなことを言い始めた。

「そう言えばシュウは“レイセン”ってしってる？」

「ん？冷戦か？冷戦はアメリカとロシアが」

「あぁ…と。優曇華院の方の」

「うどん毛ＩＮ？なんじゃそりゃ、そんなもんは食いたくねぇが」

「食べないでよ。幽々子様じゃあるまいし。レイセンは兎の妖怪みたいなもので、月兎といったところかな」

「知らないな」

「彼女も銃弾の弾幕を使うんだって。ただ原理は全く違うみたい」

「というと？」

「彼女は狂気の波長で相手を狂わせて弾幕が当たってる錯覚を起こして当てる…みたいな？感じだって」

「外道じゃねぇか」

「仕方ないんじゃない？それが彼女の能力だから」

そんな話を聞かされたので彼女の第一印象（会ったことないけど）は外道の一言だった。

その夜はとても静かだった。

どこか不気味なくらいには。

白玉楼の夕食後。縁側に四人で腰かけてくつろいでいると唐突に幽々子さんが話しかけてきた。

「シュウ」
「どうしました？」
「月を見てみなさい」
「……。それがどうしました？」
「月が欠けてる…」
「そうなのか？」
「分かってないのはシュウさんだけみたいですねー」
「ぐぅ…」
自分だけわかっていない状況だったがぐうの音はでた。
「二人とも、これはちょっと由々しき問題よ」
「…そうなのか？」
だんだん宵闇の妖怪みたいな受け答えになってきたな…。と頭の片隅で思いながらシュウはそう答えた。
「少なくとも妖怪たちにとっては大事件だと思うけど…」
「妖精にとっても大変なこtー」
「だから二人には解決に向かってほしいの」
「はぁ…。なるほど」
「お三人方ー？私を無視しないdー」
「分かりました。どこに向かえばいいか幽々子様はおわかりで？」
「ぐず…酷いです…」
「いまいち分かってないわ」
三人で話し合っているとリリーがいじけてしまった。涙目で指先をくっつけたり離したりしている。が、シュウを含め誰一人相手にしようとはしなかった。
「いまいちって事はだいたいの検討はついてると言うことか？」
「いえ、全く。」
「「……」」
三人の間に沈黙の帳がおりる。そこにリリーがぐずる声だけが響いていたがリリーは「あ」と何かに気が付いた様な声をあげた。
「どうした、リリー？」

「そう言えばこの前来た銀髪のお医者さんが月からきたって言ってました」
「月人？永琳が？」
「よく分からないですけど、月の事なら月の人に聞いてみたらどうでしょうか？」
さっきまで泣いていた所為もあって潤んだ瞳で力説するリリー。
「まぁ、当てもなく行くよりはいいんじゃないかな？」
「そうね、それじゃあ二人とも言ってきて頂戴」
そうしてシュウと妖夢は永遠亭目指して旅立つ事にした。
「なんだか今日は月の話題が多いな」
「他になんか月の話題あったけ？」
「…うどん毛ＩＮ」
「え？」
「いや、なんでもない」

第五十二章　傭兵と動き出した少女たち

―アリマリｓｉｄｅ―

―コン、コン―

真夜中の霧雨邸にノックの音が響いた。ノートに今日行った実験の考察をまとめていた魔理沙は訝しげに眉をひそめた。
「こんな時間に誰だ？」
『魔理沙ー。まだ起きてるかしら？アリスだけど。開けてくれない？』
「アリスか、珍しいな。あいつなら『常識的に～』とか言って来そうもない時間だがな」
『と言うか居るんでしょう？開けないとこの扉ぶち破るわよ』
「…ホント、珍しいな。こんなに荒れてるなんて…。しかたない…。いま開けるから待ってろ！」
そう答えるとノートやらなんやらをすぐに開けるように、ページが分からなくならないようにしまうと（と言ってもまとめて閉じただけなのだが）扉を開けた。
「こんな時間に悪いわね」
「ホントだぜ」
「ところで魔理沙。月は見たかしら？」
「…いや。月がどうした」
「欠けてるのよ、今日は満月のハズなのに」
「それにちょっと歪だな」
「だからこれは異変よ。一緒に解決しましょう」
「…アリス。ホント今日のお前は珍しい事だらけだな」
「なにか言ったかしら」

「いや、なんでもない。ちょっと待っててくれ、いろいろ準備していくぜ」
「あんまり待たせないでね、夜は短いのよ」
魔理沙は部屋着からいつもの魔法使いスタイルに着替えて、スペルカードなどを帽子に詰めて箒と八卦炉片手に飛び出した。
「待たせたな！」
「魔理沙にしては早かったわね」
「こんな夜はなかなか無いからな」
「そうそうあって欲しい物でもないわ」
そう言って二人は夜の空を駆け出した。

―レミ咲ｓｉｄｅ―

紅魔館のテラスに二人の人影があった。
「ねぇ、パチェ。今日の月はおかしいと思わない？」
「そうね。私は夕方頃からおかしいと思ってたわ」
「なら、調べはついてるでしょう？」
暫く間が開いてからパチュリーは答えた
「…。これは確証のある話じゃないわ。それを念頭に置いて頂戴、レミィ」
「珍しい前置きね」
「仕方ないじゃない、資料が少なすぎるもの」
「それで、原因は？」
「月の秘術って事だと私は思うわ」
「秘術？」
「詳しくは分からないけど、月人関連でしょうね」
「それが欠けた月の正体？」
「おそらく」
そういって肩をすくめるパチュリー。おそらくはこれ以上の事はわからない、と言いたいのだろう。とレミリアは理解した。

「まぁいいわ。咲夜」
「はい」
主の声に音もなく突如として現れる従者。
「私がこの異変解決に向かうわ。だからついてきなさい」
「お嬢様、了解しました」
咲夜の答えをきくなりレミリアは準備をすると言って部屋に戻っていった。
「咲夜、珍しいものね。貴方なら危ないからと止めると思ったのだけど」
「お嬢様に敵うものなど居るはずもありませんから」
そう言うと咲夜もまた「準備がありますので」と残して虚空に消えた。「博麗の巫女には負けたじゃない」なんて台詞でも吐こうと思ったがその場に咲夜が居ない事を理解し、代わりにため息を一つ吐いた。
「巫女と魔法使いはなにをしているのかしら。こんな月を放っておくだなんて。あるいは―」
そこで一旦区切ると紅茶を一口含んでから誰に向けるでもなく呟いた。
「それほど苦戦する相手なのかしらね…」
彼女の呟きは歪んだ月をたたえる夜空に消えていった。

第五十二章　傭兵と動き出した少女たち（後書き）

永夜抄は三組の視点で進行していきます。

第五十三章　傭兵と魔法使いとホタル（前書き）

ホタルといったら…

第五十三章　傭兵と魔法使いとホタル

―シュウ・妖夢ｓｉｄｅ―

二人は永遠亭を目指すべく夜空を飛行していた。
「シュウ」
「どうした？」
「月がこんな”みょん”なことになったのは、いつからだったんだろうね…。…。シュウ、なに笑ってるの？」
「”みょん”…だって…くふっ、くくっ」
「んな…。そ、そんなこと言ってない！」
腹を抱えて笑っているシュウの指摘に顔を真っ赤にして憤慨する妖夢。おそらく羞恥も何割か混ざっているだろう。
「いや、言ってた言ってた…くくっ、ふ、ふはっ」
「言ってない！」
「分かった言ってないから、それでいいだろ？なぁみょん」
「私の名前は妖夢！みょんじゃない！」
そんな風に二人はじゃれあいながら追いかけっこをするように飛んでいた。その所為か二人は雑談に気を取られて迷いの竹林を通過した。

―レミ咲ｓｉｄｅ―

紅魔館のエントランスに一組の主従ペアがいた。
「咲夜、行くわよ」
「はい。…どうなさいました？パチュリー様」
今まさに飛び立とうとしている二人のもとにパチュリーがやってきた。その手には何やらびっしりと書き込まれたメモと一冊の分厚い本が抱えられている。

「間にあったわね…。二人とも、月をすり替えた術について調べてきたのだけど」
「なにが分かったの？対抗術？」
「違うわ。どうやらこれは一夜限りの術ってことが分かったの。あと、直接の害意はないわね」
それを聞いたレミリアはニヤリ、と笑みを浮かべた。
「つまりはチャンスは一度きり、しかもあまり時間が無いって事ね…。面白い事するじゃない。咲夜、分かってる？」
「はい、お嬢様。時間を遅らせてあります」
即答する咲夜。完璧で瀟洒なメイドに抜かりはない。
「そう、二人とも心配はいらなかったかしら？」
「紅の悪魔に死角はないわ」
「…レミィ。自信と驕りを同一視しないようにしなさい」
「紅霧の異変の時に思い知ったから大丈夫よ、同じ過ちは起こさないわ」
「…そう。今回は強敵みたいだから注意したのだけど、問題なさそうね」
二人は自信に満ち溢れた表情で振り返る事もなく紅魔館を後にした。

―アリマリｓｉｄｅ―

「なぁアリス」
「なに？」
「どこに向かってるんだぜ？」
「あっちよ」
そう言ってこともなげに正面を指差すアリス。
「要領得ないなぁ」
「…あれは、何かしら？」
目の前に浮かんでいたのは淡い光の群れだった。

「ホタル、だな」
「…そう、それなら別に良いわ。行きましょう」
関係ないと判った瞬間興味を失ったようで先を急ごうとするアリス。その顔は『余計な事に時間を使いたくない』と言っているようだった。
「ちょっと待ちなさいよ！」
「そうだぜ、アリス。ちょっと待つんだぜ」
突如現れ、（と言ってもかなり前から二人には見つかっていたが）叫ぶリグルとそれに同調する魔理沙。アリスは正直うんざりしていたが律儀に答えた。
「なによ」
「ホタル様がでたって言うのに喜ばないやつなんｔ―」
「ホタル狩りをしよう」
「え〝？」
真面目くさった表情でそんな提案をする魔理沙にアリスは割と本気で頭痛を覚えた。なぜなら魔理沙の表情は『面白い事を見つけた』時の表情で、こうなったら満足するまで突っ走るのが彼女だからである。
「…雑魚にかまってる暇は無いのよ」
「いいだろ？別にどうやら時間もゆっくり流れてるみたいだしな」
確かに月を見るとさっきに比べてゆっくりと動いていた。きっとあれは咲夜の能力だろう。そうなれば急ぐ動機もなくなった（と言ってもあまりゆっくりしている時間もないのだが）。アリスは魔理沙につき合った方が彼女のモチベーション的にも、トータルの時間的にも合理的と判断し、しぶしぶ了承した。
「…そう言えばそうね。どうやら紅魔館も黙っていられなかったって事かしら」
「だから、一狩りしようぜ！アリス！」
「その言い方だと人狩りに聞こえるわよ」
「別にこまけぇこたぁいいんだぜ」

「それよりホタル、だったわね」
「……。」
二人の魔法使いに睨まれて硬直するリグル（涙目）。直後、吹っ切れたように（或いはやけくそに）弾幕を張り始めた。
「う、うわあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」
「自分から仕掛けた癖に…」
「いや、狩るのは私たちだぜ」
「話がずれてるわよ、魔理沙」
そう言うと二人は呆れながらも臨戦態勢に入った。

――next battle is "Wriggle Nightbug" -lunatic-
――to be Continued…

第五十三章　傭兵と魔法使いとホタル（後書き）

バトルに入ります！
実はこのリグルＶＳアリマリの構想は紅魔の時からあったりします。
…といっても、やりたいなぁぐらいのものでしたが。

第五十四章　傭兵と蟲の嵐と星の嵐

「う、うわあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

喧嘩を吹っ掛けておきながら睨まれて錯乱したかの様に見えたリグル。しかし完全に忘我していた訳ではなかった。（ちなみに錯乱はしている）

（拙い拙い拙い！相手は格上二人でこっちは一人きり…。みすちーはこの時間屋台を引いてるし、助けを呼ぶにも呼べない…。使い魔を呼ぶしかない！）

リグルは伝令の使い魔を飛ばし、ありったけの蟲を集める事にした。

「それで魔理沙、ホタル狩りって捕まえるんじゃなかった？」

「そうだな」

「捕まえてどうするつもり？」

「ついてきそうだったら使い捨ての盾にするぜ」

二人はそんな風に会話しながらも弾幕を避けていく。

その時アリスはちょっとした胸のざわつきを感じていた。

（そろそろ動き始めてもおかしくない。だったらこっちから仕掛ける！）

リグルは暫く時間をおく事で平静を取り戻し、大量の蟲を茂みに隠しながらもまだ集めていた。そして自分の弾幕で少しでも時間稼ぎを、と考えたのである。

蠢符「ナイトバグトルネード」

リグルが弾幕を帯状に何重にも展開していく。そしてその帯は少

しずつ解かれ、交差する弾幕の嵐になり変った。

「お？スペカみたいだな」

のんきな口調でそんな事を言っている魔理沙の表情は余裕だと言わんばかりだ。そしてその発言に見合う動きですいすいと弾幕をすり抜けて前に進んでいく。

「おいおい、そんなもんか？もうちょっと楽しませてほしいぜ」

「そう？だったら―」

そこでリグルは言葉を区切りニヤリと笑って右手を上につきあげた。

その時アリスの胸のざわつきは最高潮に達していた。そして目を見張る光景を目の当たりにした。

リグルの背景が黒く塗りつぶされていくのだ。その影の正体は蟲、つまりおびただしいほどのリグルの眷属たち。そしてそれはアリスや魔理沙の背後や、横、上までも覆い尽くし、真っ暗闇な世界が出来上がった。

「魔理沙！」

「大丈夫だ、アリス」

思わず叫んだ相手の声が耳元で聞こえてアリスは別の意味でびっくりしてしまった。

どうやら魔理沙はアリスと背中合わせの位置まで戻ってきていたようだ。

「お姉さんたち、こんな暗闇で戦えるの？」

リグルのさっきまでとは違う、余裕すら感じられる声が響く。

「アリスは攻撃を防いでくれ、周りは私がなんとかするぜ」

「分かったわ」

周囲の蟲達が一斉に弾幕を放った。アリスは二人を囲むように人形を展開し、防御魔法を展開する。その間魔理沙は帽子の中身をごそごそとあさっていた。

「魔理沙、まだなの？」

「カウントで防御を止めてくれ、準備が出来たぜ」
「そんなに時間がかかるなら実践には不向きなんじゃない？」
「二人とも、やられっぱなし？どんどん蟲は増やすよ？早くしないと相方さんが持たなくなるかもね」
リグルは格上を追い詰めた格好になっている事に悦びを覚え、テンションが上がっていた。その所為か言動も無駄が出てきて、なおかつ油断していた。
「うるさいぜ。3、2、1、今だ！」
アリスが防御魔法を中止すると同時に魔理沙のスペカが発動する。

黒魔「イベントホライズン」

魔理沙からあちこちに魔法陣が飛び出す。そして魔理沙自身とその魔法陣から眩いほどの星の弾幕が飛び出す。それらの星は蟲を墜とし、弾幕をかき消していった。
「んなっ！？」
「知ってるか？魔法は光を与えるためにあるんだぜ？暗闇なんて怖くもなんともないな」
そう言って次のスペルを構える魔理沙と新たにスペルカードを取りだしたアリス
「アリス？」
「私は防御要員じゃないんだけど」
「ははっ、それは悪かったな。…でもコイツは私が貰うぜ」
「渡さないわ」
「早撃ちで決めようじゃないか」
「望むところよ」
「ちょっと、二人とも…。私はもう降参するから―」
「「問答無用！」」

魔砲「ファイナルスパーク」

呪詛「蓬莱人形」

魔理沙の超極太レーザーが、アリスの大量・高圧レーザーがリグルを襲い、文字通り吹き飛ばした。

「アリス、大人げないぜ。あんなに何本もレーザーを突き立てるなんて」

「あんな極太レーザー撃っといてよく言えるわ」

二人はお互いに毒を吐いてから、どちらからとなく笑い合った。

歪な月は怪しく二人を照らしていたが、特に気にするでもなく本来の目的通りにアリスのガイドに従って進み始めた。

第五十四章　傭兵と蟲の嵐と星の嵐（後書き）

リグル君が強くなってるのはルナだからってのもありますが、力量格差が詰まってるって事もあります。

第五十五章　傭兵と饅屋台（前書き）

戦闘シーンでもないのに長い…だと…ッ！？

第五十五章　傭兵と饅屋台

―シュウ・妖夢ｓｉｄｅ―

迷いの竹林を通り過ぎて暫く立つ頃、二人は落ち着きを取り戻したものの道に迷っていた。
「シュウ、ここどこ？」
「…さぁ？」
「もとはと言えばシュウが変なあだ名をつけようとするから―」
「それを言ったら妖夢が…いや、止めよう。この話を続けても道が分かる訳でもないしな」
「むぅ…。自分だけ大人ぶって…」
妖夢の機嫌はあまり直っていないが、追いかけ回すでもなく並んで飛んでいるのはシュウの説得と謝罪のたまものだろう。
二人が並んで飛んでいると、前方に小さな赤い光が見えた。
「…敵、かな…？」
「あれ…提灯じゃないか？」
一瞬刀を抜きかけた妖夢だったが、シュウの言う通り、その光は屋台の提灯だった。妖夢は先ほどとは別の意味で訝しげな視線を向けている。
「こんな夜中に里の外れで屋台だなんて…。妖怪に襲われでもしたらどうするつもりなのかな？」
「一応注意がてら覗いてみるか。もしかしたら道を教えてもらえるかもしれないし」
そうして二人はその屋台の暖簾をくぐった。
「いらっしゃい」
そう明るい声で出迎えてくれたのはミスティアだった。中は案外

広くて、五人ぐらいならば落ち着いて料理を広げられそうなぐらいにはスペースが取ってあった。そして中には先客もいた。とりあえず二人は空いてる席に腰かけた。

「あ、シュウさんと妖夢さんじゃないですかぁ」

妙に上機嫌で間延びした声を掛けてきたのは早苗だった。その顔は赤らんでいて、いかにも酔っているようだった。

「早苗…呑んでるのか？」

「えへぇ、まぁ呑んでますよ？お二人もどうです？」

そう言って御猪口と徳利を差し出す早苗。その間も「にへらっ」と笑っていた。早苗って笑い上戸なのか？と二人は思っていた。口には出さなかったが。

「いや、今はいいや」

「うん、今度ね」

「むぅ…。つれませんねぇ」

「まぁ、屋台引いてるのが里の奴だったら注意しようと思ったんだが、心配し過ぎだったみたいだな」

シュウがそう言うと鰻を返しながらミスティアが笑った。

「まぁ、最近じゃあそんな事する奴はいないよね」

「それもそうか。それじゃあ―」

シュウが道を聞いて帰ろうとすると「おや？」とミスティアが首をかしげた。

「ホントに呑んでいかないのかい？」

「そうだな…。ちょっとくらい」

「だめだよ。シュウ」

シュウが旨そうに呑んでいる早苗を見て揺らいだが、妖夢に釘を刺されていたかにも「仕方ない」と言わんばかりに肩をすくめた。

「だよなぁ」

「んー。せっかく良いモノが入ったからと思ったんだけど。用事があるんじゃしょうがないね」

「折角なのに呑まないんですかぁ？」

「今なら”ご奉仕”できるんだがね」
「なんだって？」
「シュウ…」
幻想郷では聞きなれない言葉にシュウが反応すると、妖夢が横からジトーッとした視線をよこした。その光景をみてきょとんとしていたミスティアだったが、合点すると今にも吹き出しそうになっていた。
「そっちじゃないよ。”ご奉仕”ってのは安くしとくよって意味で言ったんだけど、そっちの意味がよかったかい？」
「なんだったら私もやりますよぉ？」
「え、いや…」
「シュウ…断らないの？」
自分の勘違いが恥ずかしいやら突然の展開についていけないやらでシュウが曖昧な答えしか返さないでいると、妖夢がさらにジトッとした視線をよこしていた。
「いや、今のは不可抗力だろ？急な展開についていけなかっただけで」
「今はどっちも断るべきだと思うんだけど」
「屋台に入って何も注文せずに出てくのは無粋かなぁ。なんて思ってるんだが」
「無粋も何もないよ。もう行くよ！」
「だって勿体ないぜ？折角の上物が」
なおも食いつくシュウにだんだんイライラし始める妖夢。
「だったら取っておいてもらいなよ！用事が終わってからって思えば早く終わらせる気になるでしょ！？」
「そんなことしたら早苗に飲み干されちまうぜ」
「とにかく！お酒もご奉仕も帰ってから！」
妖夢はいつまでも屋台に居ようとするシュウに業を煮やしたのか、

そう叫んでいた。とくに考えなしの発言だったが、内容にちょっと人前で言うのは憚りたいものが混ざっている事に気が付けなかったようだ。現にミスティアと早苗の二人はきょとんとしたのちにニヤニヤとした視線をシュウと妖夢に向けていたし、早苗は肘でシュウを突いたりして冷やかしていて、シュウも困った表情を浮かべていた。

「妖夢…そういうことはなるべく二人のときにだな」

「熱いねぇお二人さん」

「見せつけてくれるじゃないですかぁ」

「え？」

そこで妖夢は自分の言った事の内容に気が付いて赤面し、話題をそらすことにした。

「と、とりあえず今は異変が優先だよ…」

「そうだな、早いとこ解決しないといけないし…」

「異変ですか？」

シュウ達が話を締めに掛った時に「異変」と言う単語に早苗が反応した。その瞳は真面目さを帯びていて、さっきまでの間延びした酔っぱらった早苗とは別人のような切り替えだった。（ちなみにまだ顔は赤らんでいる）

「あれ？早苗は気が付いてなかったのかい？」

「…屋台にこもってたのに気が付いたの？」

「気が付かない妖怪は居ないよ。それに屋台を引っ張ってるときは外に居るしねぇ」

「……。異変って一体なにが？」

「満月が欠けたんだとさ」

「月食？…なにはともあれ、異変解決は信仰のもとになりそうですし、ついていきます！」

そう言って力強く立ち上がり宣言する早苗。それをみたミスティアは気遣わしげに水をさしだした。

「一応酔いを醒ましときな。気休め程度だけど」
「ん。ありがと」
礼を言って受け取ると水を一気飲みした。幾分かしっかりした顔になったがテンションは未だに上がり続けているようだ。やる気に満ちた顔になっている。
「異変と言えば戦闘！つまり、パワードスーツ実戦投入の好機！取ってきますんで鰻でも食べて待ってて下さい！」
早苗はそう言って飛び出して行った。どうやらあのスーツ（この前の戦闘後さらに改良した）を早く動かしたかったようだ。ちなみにお勘定を置いていくあたりしっかりしていると思う。
「早苗も帰ってくるまで時間あるし、ちょうど焼きあがったから鰻でも食べなよ」
「それじゃあ食べよう」
「シュウ、なんか嵌められた気分だよ」
「うまそうだし良いだろ？」
結局二人で仲良く鰻を半分ずつ分けて食べることにした。ミスティアは「やっぱり熱いねぇ」なんて事をしみじみ呟いていた。

第五十五章　傭兵と鰻屋台（後書き）

早苗は笑い上戸で甘え上戸なイメージがあるんですよね…

第五十六章　傭兵と従者と守護者と（前書き）

一応流れと言うか順番は原作通りに進んでいきます。

第五十六章　傭兵と従者と守護者と

―レミ咲ｓｉｄｅ―

紅魔館の主従コンビは人里に差し掛かっていた。咲夜はなぜこちらに飛んできているのか見当が付かず、戸惑っているようだ。
「お嬢様」
「なにかしら？」
「なぜこちらに？永遠亭とは方向が違うように思いますが？」
「喉が渇いたの。要するに燃料補給をしようと思ってね」
「……」
咲夜は紅魔館の評判悪化を懸念して頭が痛くなってきていた。評判が下がると仕入れ先の相手の対応がおざなりになるのだ。「はやく帰ってくれ」とでも言いたげに。咲夜としてはなるべく避けたいと考えていた。良好な関係を築いておいて損はないのだ。
とは言っても主に逆らう様な事はしないのだが。

先ほどの会話の暫くあと。二人は人里が”あった”場所を見降ろしていた。
「咲夜、ここでよかったわよね？」
「えぇ。本来ここは人里のハズですが」
「やはり歴史を保護しておいて正解だったな」
そう言って現れたのは慧音だった。
「歴史を保護？」
「いや、なんでもない。”ここには何もなかった”からさっさと通り過ぎるがいいさ」
「ここは人里だったはずなのだけど？」
「もう一度言うぞ？”ここには何もなかった”」

慧音は語気を強めて再びそう言った。その眼には強い光が宿っている。
「お嬢様、人里が消えたのは人為的なものの様です」
「分かってるわ。ただ、人のいない人里には居る意味もない」
レミリアは人里に対しての興味は既にないようだ。しかし咲夜は何度も訪れた関係上、知り合いも何人かいる事もあり、この慧音の口調が気になった様子だった。
「……」
「不服そうね」
「いえ、そういう訳では」
「どうしても気になるなら自由にしなさい。ただ私は動かないけど」
「ありがとうございます」
レミリアはそう言うと後ろの方に陣取り、腕組みしながら成り行きを傍観するようだった。咲夜はレミリアが退いたのをみると、手元に数本のナイフを取り出した。
「二人とも。話は聞いていたのか？”ここには何もなかった”と言っただろう」
「じゃあどうしてそんなにも私たちをここから離そうとするのかしら？」
「私は事実を述べているだけだ」
頑なに慧音の言葉を聞き入れない咲夜に慧音はだんだん苛立っていた。それに適切な間合いを取るために少しずつ下がっていたが、これ以上下がる訳にはいかなかった。なぜならそこは人里の堀があるべき場所。その後ろは本来人里の領内だ。これ以上の後退は進入を許すことだった。
「言い方が不自然ね。…もう下がらなくても良いのかしら？」
「うるさい。良いから帰るんだ」
「出来ないわ」
咲夜のしっかりとした拒絶で慧音の決心も固まった。排除するしかない、と。

「そうか…。それならば――お前たちの歴史も喰ってやる！」
「ようやく本性を現したかしら？」
二人は少し距離をあけた状態で臨戦態勢に入った。

――ｎｅｘｔ　ｂａｔｔｌｅ　ｉｓ　”Ｋａｍｉｓｈｉｒａｓａｗａ　Ｋｅｉｎｅ”　－Ｈａｒｄ－

――ｔｏ　ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

第五十七章　傭兵と傷つけられた自信（前書き）

傭兵関係ないのにこのサブタイ縛りはきつくなってきた↑今更ｗｗｗ

第五十七章　傭兵と傷つけられた自信

「――お前たちの歴史も喰ってやる！」
そう言うと慧音はスペルカードを発動した。

野符「義満クライシス」

慧音の周囲に三つの固定砲台が現れた。それらは独立して楕円状の弾幕を放ってくる。弾幕はお互いに交差し絡みあいながら咲夜に迫る。咲夜は自分に向かっている弾幕の速度を落としながら確実に回避していく。しかし三点射撃によって立体的に交差する弾幕に苦戦し、攻撃まで手が回らないことに焦りを覚えていた。そこで咲夜はある技を使うことを考えた。
（こ…の…っ！厄介な軌道…！こうなったら…バニシングエブリシング！）
咲夜が二枚のトランプを残して消え去る。
「なに…ッ！どこに消えた！」
「よそ見とはいい度胸…ね！」
「…ッ！？」
慧音が危機を察知して横に飛ぶとさっきまでいた場所にナイフが「後方から」飛来した。それらのナイフはそれぞれの固定砲台に突き刺さり、消滅させた。
咲夜は厄介な攻撃を撃破した事に安堵しつつ、気を引き締めた。次は何が来るかわからない、と。そのうえで相手を威圧する事も忘れない。
「さあ、砲台は潰させてもらったわ」
「お前、何者だ…。いや、それは今問題じゃないな。理屈も感想も後回し、とにかく今は―」

「戦いの最中に考え事なんて随分な余裕ね？」　慧音は今目の前で起こった「瞬間移動」に対する驚きを隠しきれず、自分をおちつけるために思考していた。咲夜はその時間を与える訳もなく慧音に肉迫した。そしてこの隙で決めるためにスペカを発動する。

傷魂「ソウルスカルプチュア」

　両手に握ったナイフを超高速で慧音に振るう。秒間何十もの斬撃をたたき込む。慧音もただやられるのではなくとっさに引いたり回りこんだりしているが殆どかわせずに受けてしまう。そのため皮膚は切り刻まれ周囲は紅くなり始めていた。そうして避けられない事を悟ったのか、はたまた慧音の中で何かが切れたのか、慧音は激昂した様に攻勢に打って出た。

「いい加減に…しろ！！！」

「え？」

　慧音は咲夜に突進すると肩に拳をあて、左右に振りきって咲夜の両腕を開かせた。そしてがら空きになった顔に全身全霊を込めた頭突きを叩き込んだ。

　その頭突きは咲夜にとって二重の意味で予想外の行動だった。まずはこんな攻撃手段を相手がとったこと。もうひとつは自分の攻撃を受けても動きが鈍っていなかったこと。

　その事であっけにとられていた所為でろくに防御もせずにくらってしまった。その衝撃で口から流血している。咲夜は攻撃を中断し、退いた。

　咲夜は改めて妖怪という生物の打たれ強さを感じていた。それ以上に慧音から感じるプレッシャーは多くのもを背負っている者のものだった。咲夜は自分にこの妖怪を退ける事が出来るのか不安になっていた。それだけ自分の攻撃が効いている手応えがないと言うのは精神的に堪えるのだ。

「やはり、貴様は危険人物だった様だな」

「なんで立っているのよ…」
「咲夜」
あれだけの攻撃を受けていながらしっかりした様子の慧音に咲夜が自信を喪失しかけた時、背後に居たレミリアが声をかけた。その眼にはしっかりとした光が宿っており、真摯に咲夜を見つめていた。
「咲夜は私の従者なのよ？しっかりしなさい」
「申し訳ございません…。時間を取ってしまって―」
恐縮する咲夜にレミリアはかぶりを振った。
「そうじゃなくて、自信を持ちなさいと言ってるの。自分が信じないで何が成せるの？」
「お嬢様…」
「血を拭いたらもう一度向かいなさい。毅然とした態度で、しっかりと。自分が決めた事、自分が成すべき事を、自分の力で遂行するのよ」
「…はい。お嬢様」
レミリアはそれだけ言うと再び後ろに下がっていった。あくまで咲夜の戦いに手出しはしない様だ。その態度に再び決意を新たにした咲夜に迷いはなく、慧音を視線でしっかりと射抜いていた。

―to be Continued…

第五十八章　傭兵と冷酷な”悪魔”

再び目の前に立った咲夜に慧音は血を拭う事もせず（拭える量ではないのだが）訝しげな視線を向けた。
「まだやるのか？そんなに何に拘っているのかは知らんが、この先は通せんぞ？」
「その先に用事はないわ」
その答えに尚更眉間にしわを寄せる慧音。
「だったら引き返したらどうだ？わざわざ傷つけあうこともないじゃないか」
「これは私の誇りの問題よ。お嬢様の従者として、紅魔館のメイド長として。そして私そのものとしての誇りのね」
「私が割と一方的にやられてた気がするんだが？」
「立ちはだかる者を地に臥させる事が出来なかった。それがいけないのよ」
そこで慧音はある事に気が付いた。自分が思っているのと相手が思っているので、目的に違いが出ている事に。
「つまり目的は私を倒すことか？」
「それで構わないわ」
「…それならば何も今ではなくても良いだろう」
「何を言ってるのよ。今こうして戦った。その結果として相手が立っている。それが気に食わないって言ってるの」
「戦闘狂め」
「人間を守護するものならこの程度の我が儘聞いてくれてもいいんじゃない？」
「人里を守護するものだ。力をある人間は自立するべきだろう」
「…とにかく私は貴方を攻撃する。貴方がどうするかはご自由に」
そういって咲夜はナイフを取り出す。表情こそ飄々と嘯いて見せ

ているものの内心は雪辱戦（あくまでも咲夜の主観でだが。）に燃えていた。慧音はそれを見て呆れたようにつぶやいた。
「やはり幻想郷で力をもつ奴らはどこか荒っぽいな」
慧音はスペカを取り出した。その眼には諦めと闘志が燃えていた。
「それは自虐かしら？」
「…さぁな。…おしゃべりはここまでだ。いくぞ」
二人は再び戦い始めた。
先に動いたのは慧音だった。その手に握るスペカを発動する。

国符「三種の神器　鏡」

慧音が宣言すると彼女の頭上に鏡が出現した。その鏡は月の光を浴びて怪しく光を湛えている。その光が一層強くなったと同時に満月を模した巨大な弾幕が列をなして咲夜に襲いかかる。その弾幕の軌跡には小さな弾幕が尾を引き、それらもまた嵐の様に降りかかる。
咲夜は大玉な弾幕に複数のナイフをクロックアップさせて突き立て、嵐の薄いところを潜り抜けて慧音へと迫る。クロックアップの際に空中に待機させておいたナイフを再起動させて自らの背後から援護射撃を行いつつ慧音まであと三メートルのところまでくぐってきた。
それと同時に慧音の鏡の中に剣が写り込む。そして直後、さらに小さく、鋭いかたちの弾幕が溢れだすように現れ、弧を描いて咲夜に殺到する。
「次から次へと…ッ！…クローズアップマジック！」
咲夜がそう叫ぶと同時に咲夜の周囲に大量のナイフが展開し、咲夜を中心に高速回転を始める。これらのナイフで剣の弾幕を弾き飛ばす。
「…あと少しッ！」
「効かない…！？それならば、これでどうだ！」
慧音はそう叫ぶと剣と月を同時に写した。すると月型弾幕が大量

に隙間なく現れ、帯状に軌跡を辿る小粒弾幕から剣の弾幕がスプリンクラーの様に飛び出して迫ってきた。
「なんて濃い弾幕…ッ！タイムパラドックス！」
叫ぶと未来軸の咲夜が現れて突撃していく。そしてそのもう一人の咲夜は全ての弾幕を”身体”と”手に持ったナイフ”の両方で蹴散らしていく。そしてその背後に続いてさらに肉迫する。その手にはスペルカードが握られている。
「これさえも凌ぐ…ッ！？」
「喰らいなさい！歴史喰いの妖怪め！」

「デフレーションワールド」

咲夜はスペカを起動するとナイフを超至近距離で複数放ち、そのまま突撃し自らの手でも突き立てた。
スペカの効果で放ったナイフの時系列が圧縮され、過去の、現在の、未来のナイフが一斉に襲いかかり、突き立てられた。
「ぐ…ッ！？」
「これで終わりよ」
突き立てられた衝撃で出たうめき声など気にもかけず、咲夜はナイフを一斉に抜き去る。すると身体の支えを失って慧音は前のめりに倒れて血だまりに臥した。

「お嬢様、お待たせいたしました」
「随分えげつないのね」
「成すべき事をしたまでです」
そう言って微笑む咲夜。レミリアは咲夜の手を取ってその手についた血を舐めとった。そして、その血を味わうように目を細め悪戯な笑みを咲夜に向ける。
「手が汚れたままだったわ」
「申し訳ございません」

口では謝っているものの、その目はあまり真摯とは言えなかった。
「まぁ、いいわ。それよりアイツは放っておいていいのかしら？」
「大丈夫です。すべて身体を動かすのに問題ない場所を攻撃していますし、仮にも妖怪ですので」
「ワーハクタクだけどね」
レミリアは呆れ気味にそう返した。
「人間でないのなら同じでしょう。月に宛てられるぐらいですし」
あくまで、悪魔で冷たくそう言って二人は月人のもとに向かった。

第五十八章　傭兵と冷酷な”悪魔”（後書き）

最後の「あくまで、悪魔で」って言うのは誤りじゃないです↑

第五十九章　傭兵と「魔法使いの」ロボとの遭遇（前書き）

この話は五十四章と五十五章の後にあたります。

第五十九章　傭兵と「魔法使いの」ロボとの遭遇

―早苗＆アリマリｓｉｄｅ―

アリスと魔理沙は着実に竹林に近づいていた。その時目の前から迫りくる人影があった。そしてそれは、まさしく「影」だった。

闇夜に溶け込む様なその身体には月光が怪しく反射している。装甲が何重にも重なっているにもかかわらず、身体にフィットする作りになっており、関節は円盤状の駆動部を有している。そして腕の部分が他に比べて膨らんでいる様にもみえた。

「アリス、ありゃあ何だ？」

「一応人型みたいだけど」

アリスと魔理沙は初めて見るロボットを前にただ呆然と疑問を呈する事しか出来なかった。

「こちらワルキューレ１。交戦許可を」

『あー。早苗。今のは何だい？』

早苗はヘルメット内部のマイクに通信回線を開き本部（にとりの家）に交信した。するといかにも眠そうで、気だるげなにとりの声が内部スピーカーから聞こえてきた。

「そこはノッてよ！こう言う戦闘部隊にコードネームは基本でしょ！」

『部隊って…早苗一人じゃないか。なんでコードネームなんかが必要なんだい？』

「散って行った仲間の思いをその身にに受けて、生き残る決意を新たに戦場に赴くたった一人の部隊長…。一人になってもみんなで戦ってる事を忘れないためにかつてのコードネームを―」

『あー。分かった分かった。聞いた私がバカだった。自分の世界に

没入するのは後にしな』

「むぅー。これからが盛り上がるのに」

いかにも呆れた声が回線に乗って聞こえてきた。どうやら結構不機嫌なようだ。

『第一、なんでオペレータが欲しいなんて言い出したのさ。オペレーション機能が付いてるのは知ってるでしょ？』

「ロボットで、戦闘なんだよ？ロボのバトルはパイロットと機体だけじゃ成り立たないの。機体の状態を逐一伝えるオペレータや戦況を俯瞰して作戦を決定する本部の人達だって必要…。ううん。それだけじゃない。整備士とか―」

『だから、機体情報はこっちじゃ分からないの。戦況も早苗が教えてくれないと判らないし、作戦を考えるのは私の仕事じゃない。整備士に至っては戦闘中は出番なし。とにかく私はいまこうして通信している意味はないでしょ？』

「冷たいよぉ！にとりぃ！」

『とにかく私は普段寝てる時間帯なの。せっかくいい夢見てたところだったのに。勝手に家に上がられてたたき起された揚句に、その用事が居る意味もないオペレータなんて勘弁だよ。用件がそれだけなら私は寝るよ』

普段の彼女からは到底考えられないほど無愛想な声でそう言うと回線を切られてしまった。きっとモニターが付いていたならば、恨みがましい表情のにとりと言う珍しい彼女が見られただろう。

「つめたいよぉ…」

「なぁ、アリス」

「なに？」

にとりと早苗が交信している頃、アリスと魔理沙は「早苗の声だけがスピーカーから流れてくる黒い人型の何か」をじっと見つめていた。

「あの声、早苗だよなぁ」

「そうね。彼女、いつから一人でしゃべるようになったのかしら？」
「きっとなんか辛い事があったんだぜ」
『冷たいよぉ！にとりぃ！』
交信相手に愛想を尽かれた様な台詞を吐く早苗。魔理沙はそれを聞いてさらに可哀想になってきた。
「妄想の中でも愛想を尽かされるなんて…。不憫だぜ…」
「妄想なんだからその辺は自由なんじゃない？きっとMに目覚めたのよ。精神的に」
「そんな巫女はいやだぜ」
その時早苗（パワードスーツ姿）が顔をあげて二人が近くに居る事に気が付いた。そして、外部スピーカーの電源を切り忘れていたことも。
『あ、魔理沙さんにアリスさん。どうもです』
「いまさら遅いぜ、早苗」
『あの…。聞こえてました？』
「大丈夫よ、早苗。私は誰にも言わないであげるから」
「私は言いふらすぜ」
『何をですか！？』
早苗にとってはにとりの声が外に出ていない事など知る由もないので、心当たりがロボヲタぐらいしかなかった。しかしその事は以前既にばれているので、今更になって言いふらすだの何だの、と言った話になると見当が付かなかった。
一方アリスと魔理沙は早苗が誰かと話しているなんて知る由もないので、（通信技術自体を知らないので）なぜ心当たりがないのか理解できず、きっと彼女が妄言を垂れ流していた事に気が付かなかったのだと結論付けた。
「何をって…なぁ」
「…ねぇ」
『せめてそれだけでも教えてください！』
「聞かない方が身のためよ」

「そうだぜ。聞いたらきっと立ち直れないぜ」
『そんなに酷いんですか！？』
「「そりゃあ…酷いな（わね）」」
憐れみを込めた表情で、なおかつステレオで断言されてしまい、ショックを受ける早苗。…と言ってもヘルメットの所為で二人にはショックを受けている事が伝わっていないのだが。
『私の何を知ってしまったんですか…？』
「言えないぜ」
『どうしたら…いえ。弾幕で勝ったら教えてください！』
「教えるのは無理だが、口封じぐらいならいいぜ。負けるつもりはないが」
「早苗、口封じにしといた方がいいわよ。そうしないとコイツ本当に言いふらすから」
『…そうですか。とにかく内容は後で決めます』

――next battle is
”marisa kirisame” & ”Alice Margatroid”
VS ”sanae kotiya” in Enhanced combat exoskeleton
――to be Continued...

第五十九章　傭兵と「魔法使いの」ロボとの遭遇（後書き）

Ｅｎｈａｎｃｅｄ　Ｃｏｍｂａｔ　Ｅｘｏｓｋｅｌｅｔｏｎ　は戦闘用強化外骨格の意味です。要するにパワードスーツですね。

第六十章　傭兵と魔法使いの絶望（前書き）

パワードスーツの本領発揮！

第六十章　傭兵と魔法使いの絶望

『それではお二人とも、弾幕勝負をはじめましょうか』
早苗はそう言ってオペレータのスイッチを入れ、右腕を振った。すると腕の装甲から棒状のデバイスが飛び出してきて、それを正面に構えた。
そのデバイスは細長い円柱状で、機械仕掛けの白銀の魔法の杖、と言った印象を受ける。しかし先端には薄い板が付いており、その板には札と同じ印が刻印されている。にとりと神奈子曰く、「信仰の力を電子制御した結果」だそうだ。
アリスはその様子を見て魔理沙に忠告しようとした。
「魔理沙、相手がどういうものかが分からない以上、下手な手は打てな―」
「先手必勝、一撃必殺！と言う訳で私から行くぜ！」
「ちょっと、魔理沙！？」
が魔理沙は聞いておらず、早苗の斜め上に陣取るとスペカを発動した。
星符「ドラゴンメテオ」
魔理沙は上から押しつぶす様に極太レーザーを撃ちおろした。もし被弾してもけし飛ぶことはないだろうと思い
魔理沙は普段の様に絞る事をせず思いっきり撃った。しかし、レーザーを放ちながらも嫌な予感がしていた。直後、アリスの声が聞こえた。
「魔理沙！上！」
「上がどうしたっていうん…だ…。あぁ！？」

奇跡「白昼の客星」

魔理沙が上を向くと同時に強烈な光が降り注ぎ、軽く目を焼かれてしまった。そして見計らったかのように弾幕が滝の様に落ちてくる。魔理沙は視力が回復していないので見る事が出来ず、高度を下げながら箒の上で蹲るぐらいしか出来なかった。背中に大量の弾幕を浴びながら降下してきた魔理沙の前に早苗が現れた。装甲には煤一つついておらず、寧ろ淡い光を帯びている様に見えた。（魔理沙には見えていないが）

『魔理沙さん。そんなにゆっくり下りてくるなんて、狙ってくれと言っているようなものですよ？』

「ッ！？」

早苗は魔理沙の耳元でそう囁くと距離を取って、左腕の装甲を開けて、レールガンを展開した。と言っても、これは弾幕用ではない（威力が高すぎる）ので、絶対的に有利な状況から生まれた「威嚇射撃でビビらせてみよう」と言った一寸した悪戯心だったのだが、それを見たアリスは（表情が見えないので）本気だと勘違いした。魔理沙は八卦炉と箒をぎゅうと握りしめ、早苗が弾幕を放つ気配を感じてから逃げようとしていた。

『ふふふ…。魔理沙さん、絶体絶命（チェックメイト）ですね』

「魔理沙！危ない！」

戦符「リトルレギオン」

アリスはスペカを発動すると早苗に人形騎士を突撃させると同時に、魔理沙を回収するための手ぶらの人形を紛れ込ませた。早苗はアリスの事が頭から抜け落ちており、今から他の行動を取るには時間が足りないと判断した。そのためレールガンの弾倉（マガジン）に弾を多めに装填し、人形の迎撃に宛てた。

早苗が一度目の引き金を引く。すると同時に人形が爆散した。そ

の後の空間には砕けた盾と柄だけの剣、微かな焦げた繊維しか残らなかった。早苗はその威力に驚くだけの余裕もなくリロードと迎撃を繰り返した。

アリスはその間に魔理沙を人形に連れてきてもらっていたが、レールガンの威力に戦慄していた。なぜならあの人形騎士に持たせている盾と剣と鎧は魔力強化を施したもので、並みの弾幕程度ならば防いだり切り伏せたり出来る仕様になっているはずだった。それがいとも簡単に壊れ、鎧に至っては跡かたもなくけし飛ぶなんて思いもよらなかったのだ。

だからアリスはこの光景を唖然として見る事しか出来なかった。

「アリス、あの音は何なんだぜ…？」

「……」

「アリス？」

読んでも反応しないアリスに魔理沙は若干回復し始めた目で訝しげに見つめた。

「え？あ、魔理沙。目は大丈夫かしら？」

「なんとか少しずつ回復してきたぜ。それよりアリス、ありゃどう言う状況だ？」

魔理沙は回復し始めた視界の中に、聞いた事のない音とともに光る早苗の左腕と、同時に爆散する人形がぼんやりと見ていた。

「レールガン…」

「なんだって…？レールガンって前に河童が持ってた、山に穴をあけたあの砲台か？」

「それを小さくして左腕に隠してたのよ。今はそれを連発してる」

「嘘…だろ…」

二人の間に絶望が広がっていた。

第六十一章　傭兵とオペレータ（前書き）

オペレータはオペレーションシステムの事で、人じゃぬぇですよ。

第六十一章　傭兵とオペレータ

レールガンの存在に絶望している二人とは裏腹に、早苗は焦っていた。なぜならある問題に直面していたからである。その問題は「電池切れ」。レールガンは消費電力が激しいのであまり撃てない事をオペレータに忠告されるまで忘れていたのである。しばらく使用を控えて動いていれば充電出来るのだが、この暫くがどの程度なのか把握できていなかった。節約しようと出力を下げたら一度耐えられそうになってしまった。

［残り電力２０発分］

リロードをしたら視界の右下端に残弾ガイダンスが表示された。一方、マルチスコープを使ったレーダーによると敵の人形は残り２６体。全部命中させてもあまる。早苗はその事実に舌打ちをした。いくら出力を落としたとはいえレールガンを防げそうなほど堅牢な守りをこの手で破れるのだろうかと言う疑念が頭をよぎった。しかし本来の目的がこの戦いでない以上、弾切れまで粘るのは得策ではない。そう思い、使う武器を右手の機関銃と左に持ち替えた補助デバイスに切り替えた。

「お…？アリス。レールガンが止まったぞ」

「弾切れかしら…？」

そこで魔理沙はハッと何かに気が付いた様だ。

「…。と言うかなんで私たちはぼーっと見てるんだぜ！？」

「…それもそうね。挟むわよ」

そう言うと二人は散開した。

早苗の視界ディスプレイに二人が行動を開始した事がウィンドウ表示された。風で人形を覆い、カマイタチの要領で切り裂きながら挟まれまいと移動する。

「アリス！弾幕薄いぜ！」

「分かってるわよ！」

魔理沙の指摘でアリスが人形を新しく２０体追加する。

『キリが無い…。元を断つしか…ッ！』

アリスに狙いを移行した。それはアリスにも伝わった様だ。早苗はアリスに向かって肉迫する。自速にスーツの性能が加わった高速域でアリスの近くまで潜り込む。アリスは早苗に手元の人形を向かわせる。早苗はデバイスを格納し銃を左に持ち替えて右手で人形を殴り飛ばし左の銃を突き立てゼロ距離射撃で黙らせる。そうして人形の包囲網を突破しさらにアリスに迫る。

「アリス！」

「大丈夫！構わないで！」

魔理沙が援護射撃をしようとするが、二人は旋回しながら高速移動しているので迂闊に攻撃出来ない。もし、精密射撃が苦手な魔理沙が攻撃しようものならアリスもろともあたってしまうだろう。アリスは後ろに下がりながらスペカを発動した。

偵符「シーカードールズ」

突破した際に後ろに残してきた人形とアリスが新たに取り出した人形で挟み撃ちにするようにレーザー照射の網で早苗をとらえた。ゴーグルを守りながらもレーダーを元にアリスを追い続ける早苗の目の前にウィンドウが現れる。

［対魔法装甲に切り替えますか？］

［ｙｅｓ／ｎｏ］

『対魔法装甲？』
『魔力を動力に変換し機動性と耐久力を高めるモードです』
思わず漏らした早苗の疑問にオペレータが答える。受け答えが出来る事に驚きながらも魔法装甲を展開してみる早苗。すると、下側に表示されている機体情報の数値がアリスのレーザーを受けて上昇していく。しかし、駆動部の負担もまた、増えていく。これを見た早苗は早期決着を心に決めてアリスに向かって突撃した。
「効いてな…ッ！？」
アリスは視界を覆い隠すレーザーの網から飛び出してきた早苗に反応出来なかった。そしてお互いに触れられる距離になったところで、早苗がアリスの鳩尾に掌底を叩きこむ。アリスの手から魔導書がこぼれおちる。
「くぁ……っ！」
「アリス！…あぁ！もう！」
魔理沙が苛立だしげな声をあげてスペカを起動した。おそらく何も出来ていない自分への苛立ちが多分に含まれているのだろう。
彗星「ブレイジングスター」
魔理沙は最大速度で二人のもとに特攻した。早苗がアリスに追い打ちを掛けようとした時アラームが鳴った。魔理沙の攻撃によるものだ。
［Ｅｎｅｍｙ　急速接近］
［危険度　高］
早苗はアリスのこめかみに一発いれるとその反動を使って離脱した。そしてアリスを魔理沙に向かって飛ばす。
「「――ッ！」」
魔理沙は急いでスペカを中断してアリスを受け止めるべく急ブレ

ーキをかける。が、止まりきれる訳もなく、とても強い衝撃とともにアリスを抱えて離脱していった。
「アリス！大丈夫か！？」
「魔理沙…。気にかけてる場合？ちょっと脳を揺すられた程度よ」
額には脂汗が滲み、身体と声が震えているにも関わらず、アリスはそう言って突き放した。
「…アリス」
「それよりも魔導書を落とした事も痛いわね…」
「アリス」
「さて、どうしようかしら…？私は並行感覚が曖昧だから動きづらいし」
「アリス！」
自分を置いて話を続けるアリスに魔理沙は怒鳴りつけていた。
「…なによ」
「アリスは下がってろ」
「んな…」
アリスの顔から色が失われる。直後怒りにも呆れにも似た声で魔理沙に語りかけた。
「今の見てなかったの？魔法がてんで効かないのよ？一人じゃ辛いのが目に見えて―」
「アリス。無理してんのが丸分かりだぜ」
魔理沙の指摘に言葉を失うアリス。
「とにかく下がってろ。さっき私は何も出来なかったからな」
「で、でも…」
反論しようとしたがその時にふらりとバランスを崩して落下しそうになるアリス。その表情には足手まといになってしまう事に対する悔しさと申し訳なさが入り混じっているようだった。
「アリスは頑張ったぜ。だからちょっと、地面に腰をおろして待っててくれよ。な？」
魔理沙はそういうとアリス頭に手を置いて、わしわしと撫でてか

ら早苗のもとに向かった。

第六十二章　傭兵と方眼交差の檻

早苗は対魔法装甲を解除してから、今の短い近接戦闘の間にかかった駆動部の負担の大きさに顔をしかめていた。アリスでさえこの負担なのだ。さらにすばしっこい魔理沙となるとその負担は一気に増加することは想像に難くなかった。

『ったく…どうしろって言うんですか…』

『作戦の提案があります』

『え？』

早苗は思わず漏らした愚痴にまで律儀に反応するオペレータにも驚いたが、まるで意思を持つかの様に受け答えをする事に驚いていた。だから、実は本部につながってるつもりになればこれぐらいどうってことはないか。と思う事にした。戦闘中に関係ない事で動揺するのはあまり得策ではないからだ。

『目標は空中制御を飛行デバイスに頼っています。よって目標をデバイスから剥離する事を推薦します』

『つまり魔理沙を箒から落とすってこと？』

『情報の祖語、見られません』

しかしそこである疑念が早苗の頭に浮かんだ。手持無沙汰だったので腕組みしながらオペレータに質問をぶつける。

『その程度で戦えないようなら異変解決なんて出来そうにないんだけどなぁ』

『目標の基本戦術は遠距離からの高火力レーザーによる制圧・破壊ですので、そのような事態に陥った事が無いのではないかと仮定する事で生じる弊害は無視できる範囲内です』

『まぁ、負担を少なくしたまま倒せるなら良いんだけど』

そう言って彼女たちを見やると魔理沙が一人でこっちに飛んできていた。

魔理沙は一人で腕組みしてこっちを見降ろしている（魔理沙の主観においては）早苗を見て、あまりいい気はしなかった。
「隙を突く必要もないってか…！」
魔理沙は早苗の周りを飛び回りながら早苗に弾幕をたたき込んでいく。が、早苗も最小限の動きでかわしつつも、風の弾幕で応戦する。
ここは互いに弾幕の腕に覚えがある者同士、なかなか当たらない。魔理沙はこのまま膠着状態にあることはただ疲れるだけだと思い、戦術を変えることにした。一気に近づいて弾幕をばら撒いて離脱する魔理沙。早苗はその弾幕をかいくぐって魔理沙の箒に手を伸ばすが届かない。箒を掴んでしまえば慣性で魔理沙は前に飛んでいくと考えたのだろう。こうして何度かヒットアンドアウェイ（当たっていないが）を繰り返していた。魔理沙は早苗の上から下に抜けた時、急に止まってスペカを発動した。
星符「エスケープベロシティ」
直前まで降下していたところでの急上昇を使った箒によるアッパー。今までとは意味の違う接近。早苗は肩に攻撃をくらいながらも負けじとスペカを取り出す。その顔は魔理沙よりも少し上を向いている様だ。それをみた魔理沙の脳裏に浮かぶのは開幕最初のスペル。位置関係までそっくりそのままな状況に危機を感じて魔理沙は早苗を避ける様に急降下した。
しかしこれは早苗にとって計算通りだった。最初はスペカを取り出しているのを見てその場に留まる訳が無いぐらいの考えだったが、まさか急いで”好ポジション”に向かってくれるなんて最高だ、と早苗はほくそ笑んだ。
秘法「九字刺し」

早苗は魔理沙の上からレーザーを発射した。しかしこれは彼女を狙ったものではなく空間を区切るものだ。まずは地面に向かって縦に4本線を引く。するとその線に沿って虹色の膜が現れる。同じように横にも5本の線を。結果、魔理沙はこの膜の方眼交差の中にとらわれた。

「いったい何なんだぜ？これは」

魔理沙は訝しげに弾幕をぶつけたが膜には傷一つ付かなかった。この時魔理沙は早苗の意図が読めなかったが、方向が決まるのならこれほど有利な事はない、と思った。横からは入って来れないし、下は地面なのだから上から来るのが分かっているのだから。と上に八卦炉を向けて魔力を充填していく。同時にスペルも待機する。しかしいつまで待っても姿を現さない早苗。

（まさか他の方向から来るのか？いやしかし無理だろう…。）

自分で無理だとは思いつつも周囲が気になり見まわしていると地面から人影が飛び出してきた。早苗がスーツで強化された筋力で穴をほって地面から現れたのだ。

「逃げ場はないぜ！早苗！」

魔砲「ファイナルマスタースパーク」

魔理沙は箒から身を乗り出し、この空間に収まりきらないほどの極太レーザーを放った。完全に逃げ場はない。しかし早苗は同時にスペルを発動していた。

開海「モーゼの奇跡」

早苗の姿がぶれて、音もなく、弾幕を残して消える。しかし魔理沙は自身の放ったレーザーによってその様子は見ていない。直後、魔理沙の上に現れた早苗は急降下し、魔理沙の身体に全力の拳をた

たき込んだ。
『やあああぁぁぁぁぁぁぁ！！』
「うがッ！？」
地面の水の弾幕に撃ち落とそうとしての攻撃だった。事実、魔理沙の体は箒から落とされていったが弾幕は既にレーザーの餌食となり消えている。そしてレーザー発射の反作用で吹き飛ばない様に下に推進力を働かせていた事もあり、魔理沙は地面にたたきつけられた。その地面はレーザーで抉られ、とてつもない熱を帯びていた。
「ぐぇっ…熱ッ！」
さらにその時魔理沙はあまりの熱さに八卦炉の制御を手放してしまい、行き場をなくした魔力が爆発を起こした。魔理沙は膜の消えた空に投げ出されアリスのもとに落下した。

第六十二章　傭兵と方眼交差の檻（後書き）

激しすぎたｗｗｗやりすぎか？←まぁ、いっかｗｗｗ

第六十三章　傭兵と、ある夜明けと、ある夜の始まり。（前書き）

タイトルなげぇｏｒｚ

第六十三章　傭兵と、ある夜明けと、ある夜の始まり。

「魔理沙！」
いきなり降ってきた魔理沙に驚きながらもアリスは声を掛けずにはいられなかった。
「あぁ、アリス。ちょっと失敗、だな…。ははは」
「魔理沙、大丈夫なの？」
「大丈夫ですか？」
アリスは「ちょっと失敗」で済ませる魔理沙に呆れていた。それと同時に早苗が箒と八卦炉をもって、ヘルメットを腋に抱えて現れた。
「お、持ってきてくれたのか」
「あ、はい。ホントに大丈夫…みたいですね」
「魔法の実験に爆発はつきものだぜ」
「そんなミスするのは魔理沙ぐらいよ」
「そうなんですか？」
「そうそう。爆発なんてめったに起こらないのよ。魔理沙はロクな考えもないのに雑な術式で実験するからそうなるのよ」
「心外だな、そんなことはないぜ」
妙に自信満々に答える魔理沙。その様子に早苗は期待に満ちた目を向ける。が、アリスは呆れを通り越して白い目をしていた。
「じゃあ、参考までに聞くけど、なにを考えて実験したら爆発なんて起こせるのかしら？」
「この実験は面白そう！ってことだけだぜ」
「へぇ～、実験ってやっぱり危険なんですね…」
「早苗、違うから。…ちなみに術式に掛ける時間は？」
「5分もあれば充分だぜ」
「……、それは爆発するわ。実験が必要なほど高度な命題に使う術

式が5分で組みあがる訳が無いわよ」
　早苗は魔法使いではないから、その辺の時間の基準も分からないし、話についていけなかったのでアリスに説明をもとめた。
「…もう少し詳しく言ってもらってもいいですか？」
「そうね、魔法使いじゃないと分かりづらいわね。まず、5分やそこいらで組みあがる様な術式はその辺の魔導書漁れば出てくるのよ、結果付きで。それに―」
　こうしてアリスによる、魔理沙にとっては耳の痛い、早苗にとっては興味深い話が始まったのだった。そして気が付いたら太陽が昇ってきていた。
「―つまり、こう言った現象を術式によって再現するには―」
「アリスー。太陽が昇ってきたぜー。異変はいいのかよー？」
「「あ、異変…」」
　アリスと早苗が異変解決に向かっている途中だった事が気が付いたころには太陽は昇りきっていた。

―シュウ・妖夢ｓｉｄｅ―

「「遅い…」」
　時はさかのぼって早苗が魔理沙達と戦闘を始めた頃。
　ミスティアの屋台に取り残された二人は待ちぼうけをくっていた（あたりまえだが）。
「二人とも、流石に何かを食べる気分でもないだろう？」
「あぁ、結構食べたしな…」
　二人は酒が飲める状況でもなかったので料理をちまちまと摘まんで待っていた。最初は鰻のかば焼き、次に牛もつ煮込み、枝豆、豚の串焼き、天ぷら、そして、新メニューとしてだすおでんの味見までした。（ちなみに全て少しずつしか食べていないので、あまり時間が潰れる訳もないのだが）
「こんなところを幽々子様に見られたら―」

「なにが見られたら大変なのかしら？」
「「――ッ！？」」
妖夢が今しがた話題にだした幽々子がミスティアの屋台に顔を出していた。
「ところで二人とも」
「すみませんでした、今行きますので―」
「私を置いてこんなに美味しそうなものを食べるなんて酷いじゃない」
「え、そっちなの？」
思わずシュウが尋ねると扇で口元を隠しながら怒っている様なそぶりを見せた（が、目の前の料理をまのあたりにして顔がほころんでいる）。
「二人とも、早く異変解決に向かいなさい。夜は短いのよ。はふはふ…」
串焼きをほおばりながらも注意する幽々子。二人は幽々子の機嫌がいいうちに店を出る事にした。

第六十四章　傭兵と血の匂い（前書き）

放置されてたあの人、出てきます。

第六十四章　傭兵と血の匂い

―シュウ・妖夢ｓｉｄｅ―

「やっぱりこの時期になると夜は冷えるな…」
「そうだね。私もちょっと寒いかな…」
屋台を後にして永遠亭に向かって飛んでいるとき、シュウが唐突にそんなことを言い始めた。妖夢も特に異論はないようで、腕をさすっていた。妖夢はシュウがじっとこっちを見ている事に疑問を覚えた。
「シュウ？どうしたの？」
「温かそうだな」
「へ？」
シュウは妖夢の前に回りこみ、正面から抱きしめた。
「え、ちょ、ちょっと？」
「あ～。やっぱりあったかい」
「ね、ねぇ。ちょっと離し…誰か見てるかも―」
「こんな真夜中に空飛んでる奴なんてそうそういないって。それにあったかいだろ？」
屈託のない笑顔でそう告げるシュウに妖夢はさらに赤面した。
「それは…うぅ…。あったかいけど…恥ずかしいし…」
「誰も見てないってば。あったかいし、可愛い妖夢も見られて一石二鳥」
「かわ…。うぅ～…」
妖夢は照れと恥ずかしさでシュウの顔が直視できなくなった。だからシュウに乗っかり、首元に顔をうずめて、恥ずかしそうに呻くのがせいぜいだった。

そうこうしているうちに二人は人里の近くにやってきていた。二人がある事に気が付いたのはその時だった。
「…ねぇ、シュウ」
「血の匂いか？」
「あ、うん。やっぱりするよね」
「満月の夜に大量虐殺なんて話は創作で充分なんだがな…」
「…笑えない冗談だよ、それ」
「笑わせるつもりで言ったんじゃないんだけど…なっ、と」
シュウは里の中央通りに降り立ち、妖夢も腕を解いて周囲を見回した。里の中は平和な夜そのもので、家が壊されてることも、ガラスが血塗られている事もない。
「特に変わった様子はないが…？」
「でも、血の匂いはすぐ近くだよね」
「…つまりは里の人間のものではない…のか？」
「とりあえずこの匂いの元を探そうよ。もしかしたら怪我した誰かが動けなくなってるのかもしれないし」
「そうだとしたら、生きてるといいな」
「さっきから縁起でもないよ、シュウ…」
そっけなく、不機嫌そうに顔をしかめて毒を吐くシュウをたしなめながら妖夢は里の門がある方へ歩き出した。夜も深まっているからか、里の人々に気が付いた様子はない。門に近づくにつれ、匂いは強まっていった。妖夢は匂いに顔をしかめ、シュウは表情を険しくした。門をでて暫く歩いた頃になって、里のそばの堀の中で血だまりに浸かるように倒れている慧音を発見した―。

第六十五章　傭兵と手術

「慧音さん！」
「ああ、シュウか。どうしたこんな時間に」
「どうしたは慧音さんだろうが…なにがあった？」
慧音は横向きに倒れていて、声もかすれてどう見ても大丈夫には見えなかった。よく見ると流石は妖怪というべきか、出血は止まっているようだった。
「ちょっと弾幕勝負で負けてな」
「ちょっとじゃないだろ、その傷」
「はは…違いない。…と言うかここは？」
乾いた笑みを浮かべるその姿は血だまりの中でなければ自然だっただろうが、この状態だと無理をしているようにしか見えなかった。
「里の横手の堀の中だ」
「なに…？そうか、能力が途切れてたんだな。里を隠さないと」
生乾きでべっとりとしている血に顔をしかめながらも、もう一度起き上がって能力を行使しようとする慧音。しかし、それは出来なかった。
「ぐっ…」
「まだ動ける状態じゃない。とりあえず落ち着くんだ」
「しかし、この月だ。異変が起こっているのだろう？里に何かあってからでは遅いんだ」
そう言って動こうとする慧音をシュウがたしなめていると、今まで会話に参加してこなかった妖夢が堀の上から険しい声で割り込んできた。
「シュウ。血の匂いに反応した獣が集まってきてる。流れ出してる妖気に怖気づいて数を集めてたみたい。いまじゃだいたい三十ぐらいは視界に居るけど…」

「そうか…拙いな。慧音さんは動かせる状態じゃないし、動かせても里に逃げるわけにはいかない」
「シュウ、身体の構成を弄って治せないの？」
「簡単に言うけど人体は複雑なんだ。ちょっと弄って戻せるものでもなければ、弄り方を間違えれば何が起こるか分からない。障害が出るかも知れないしな。…と言ってもそれしかないよなぁ。…妖夢」
「分かってる。時間稼ぎでしょ？」
「頼んだ」
「焦らないでいいから」
「分かった、と言ってもあまりゆっくりもしてられないがな」
妖夢は一つ頷くと、獣の群れに突撃していった。シュウは獣たちが戦闘に意識を切り替えたのを肌で感じると、慧音に向き直った。
「慧音さん。これから簡易的に手術をする」
「手術…だと？」
「と言っても傷をふさいで、動いても激痛が走らないように神経をつなくだけで、傷が治せる訳じゃない。…と言うかそれが限界だろう」
「能力で精密作業が出来るのか？」
「構成を読んでからじゃないと断言出来ないが、今はそれしかないからな」
「そうか…安静にしていた方がやりやすいだろう？」
そういって慧音は瞳を閉じた。直後全身から力が抜けて小さな呼吸音だけが聞こえる様になった。疲れて寝てしまったのか、或いは出血が多い中で気を抜いた事による失神か。
（原因は分からないが身体を弄られる時の不快感を与えずに済むのはよかったと言うべきだろうか…。）
シュウは頭上で妖夢が獣を屠る音を聞きながら慧音の「手術」を始めた。
「手術」が終わると空が白んでいた。途中で上での戦闘の音が止

まっていたが妖夢は降りてこなかった。シュウが気を散らさない様にと言う彼女なりの配慮だろう。
「ふぅ…」
「シュウ、終わった？」
「あぁ。一応これで大丈夫なハズだが…。まぁ、結構感覚も掴めたしな」　シュウが妖夢と話していると、慧音が目を覚ました。
「ん、うぅ…」
「慧音さん、大丈夫か？」
「あぁ、違和感はない。それに、月も元に戻っているようだな」
「え？」
　シュウには分からないが妖夢も戻っていると感じているようなのでそうだろうと判断した。もとに戻したのは魔理沙か、霊夢だろうと予想しつつも今は慧音を優先することにした。
「誰にやられたんだ？さっきのキズは」
「紅魔館のメイドの十六夜だったきがするが、知ってどうする」
「…咲夜が？とにかくカタを付けないとな」
「私の為なら無用だぞ？」
　その咲夜と、咲夜が同行していたレミリアが異変解決に向かったまま帰っていないと聞いたのはしばらく後だった。

第六十五章　傭兵と手術（後書き）

はい。
レミリアと咲夜が失踪です。
いったいなにがあったのか！？
はっきり言って決めてません！→（え

第六十六章　傭兵と出立の朝

シュウは月の以上が解決した（していた）事を幽々子に報告するためにミスティアの屋台を訪れていた。ちなみに妖夢は幽々子が白玉楼にいる可能性を考慮して、そっちに向かっている。屋台の前に降り立つと、いかにも常連の様にのれんをくぐった。

「よっす、幽々子さんまだいるか？」

「帰ってきたんだね、シュウ。でもねちょうど入れ違いかな」

「と言うと？」

「幽々子さんは今帰ったよ」

そう言って曖昧な笑みを浮かべると、仕込みに戻ってしまうミスティア。シュウは礼を言って帰ろうとした。その時ミスティアの屋台にある人物が現れた。

『いや～参ったよ…。アリスさんと話しこんじゃって…』

「早苗？」

『シュウさん！？まだいたんですか？…と言うか、なんで疑問形…？』

「いや、顔見えないし。あと、今戻ったってところだな」

屋台に現れたのはスーツで顔の見えない早苗だった。その手には分厚い本が握られている。

「…その本は？」

『魔理沙さんから「死ぬまで借り」てきました。魔導書ですよ』

「魔法には魔力が…いや、魔法談義は今度にｓ―」

シュウがそこまで言いかけた時外に気配を感じた。その気配は屋台に駆け寄ってきた。

「お嬢様と咲夜さん見てないですか！？」

入ってきて開口一番にそう訊いてきたのは美鈴だった。

『私は見てないですけど？』
「屋台に来るような人たちに思えないけどねぇ」
早苗とミスティアは知らない様だ。美鈴は早苗の姿にぎょっとしながらも落胆を隠せないでいた。そして「どうせ駄目なんだろうな…。」と考えているのが丸見えな表情でシュウにも訪ねてきた。
「…シュウさんは何か知りませんか？」
「みてはいないが、情報はあるぞ」
「ですよね…。簡単に見つかる訳ｇ―。…え…？」
「だから情報ならあるって」
美鈴は一瞬固まったが、すぐに復帰してシュウの両肩を掴んで詰問してきた。
「なんでそれを先にいわないんですか！！？？それでっ！情報って！？」
「昨日の夜に二人が人里を襲撃したってこと。それで今、刺し傷だらけになった慧音さんが療養中だ」
「なんでそんな事を…。それに、それだけじゃあ場所は特定出来ないし…。どっちに飛び去ったとかは見てないんですか？」
「めった刺しにされた奴にそれを期待するか？」
「……。」
美鈴は下を向いたまま動かない。その場に気まずい沈黙が訪れる。早苗が沈黙に耐えかねて何かを言おうとしたがその前に美鈴が動いた。腰から折るように深深と頭を下げたのだ。
「お願いしますっ…手を貸して下さい。私たちにはあの二人が居ないとだめなんですっ…」
「二人は異変解決に向かったんだろ？」
『となると永遠亭ですかね』
「二人とも…」
「あたしもそれとなくお客に聞いてみるよ」
「みんな…ありがとうございますっ」
美鈴の瞳には涙がたまっているように見えたが、それを指摘する

ようなものはこの場に居なかった。シュウは早苗とともに永遠亭にむかうことにした。美鈴は情報収集を続けて紅魔館で待機しているパチュリーのもとに報告に行くそうなので別れた。

『あ、結局これ必要になったな…』

「これ？」

そう言って早苗が取り出したのは小さな木片だった。

「なに、これ？」

『御神木の欠片…だって。神奈子様がシュウさんに渡してくれって』

「この木片にいったい何が…」

そう言って受け取ったシュウは木片から感じるチカラに人為的なものがある様な気がした。気になって構成をスキャンするとそこには神力の術式が組まれていた。

『それの使い方は―』

「大丈夫、理解した」

『え？』

シュウは早苗に少し離れる様に言ってから術式をなぞって力を流した。すると目の前に木の柱が下から突き上げるように飛びだしてきた。

『…。御柱…』

「まぁ、何かに使えるだろうな。とりあえず向かおうぜ」

二人は永遠亭に向かって飛び立った。

第六十六章　傭兵と出立の朝（後書き）

弾丸の永夜抄は夜が明けても終わらない！（ぇ

第六十七章　傭兵と罠

シュウ達は永遠亭に到着した。門に鍵は掛っていない…かと思いきや、門の内側にへし折られた閂（かんぬき）が転がっていた。どうやら無理やりに開けたようだ。よく見ると扉に爪のあとの様な傷が残ってい て、表札には銀のナイフが突き立てられている。屋敷の壁には切り裂かれた時につくような血しぶきが付いており、咲夜とレミリアがこの門を突破した事が分かる。…ただ、シュウや早苗が知っている咲夜はもっと温厚だった気がするが、ナイフなどの物証があるので中に居るのは確かなようだった。

「…かなり荒れてたみたいだな」

『本当に本人たちなんでしょうか?』

「ナイフの柄に刻印がしてある。これは紅魔館のもので、銀のナイフを使うのは咲夜だけだ」

『…。ここで話していても解決する訳ではありませんし、詳しくは本人に聞きましょう』

そうしてシュウと早苗は永遠亭の中に乗り込んだ。

―白玉楼―

「…遅いなぁ。シュウどうしたんだろ?」

妖夢は幽々子に報告を済ませ、二人で縁側に並んでシュウの帰りを待っていた。その表情は不満げで、さみしげだった。

『すみませーん』

門の方で声がしているが、幽々子に聞き覚えはなかった。妖夢はシュウが気がかりでならないのか、聞こえていないようだ。

「妖夢」

「へ…?あ、はい。なんですか?」

「さっきからお客さんが呼んでいるわ」
「すみません…。いま出てきます」
そう言って門に向かう背中は小さく見えた。

「あのー。いませんか？」
「すみません。遅れてしまって。…どちらさまで？」
妖夢が門の外に出ると小柄な赤い髪の少女が背中の羽をはばたかせて浮かんでいた。飛ばせたままと言うのもなんなので中に入ってもらい、屋敷に向かって歩きながら話を聞く。
「あ、私は紅魔館の図書館で司書手伝いをしている小悪魔です」
「はぁ。どんな御用で？」
「ちょっとある情報を集めてまして」
そう言って小悪魔は二枚の似顔絵を取り出した。そこには咲夜とレミリアが描かれている。
「この二人なんですけど、こっちのメイド服の人が十六夜咲夜さんで、こっちがレミリア＝スカーレットさんなんですけど、見てないですか？昨日人里に居たところまでは確認出来てるんですが…」
「人里から先の消息がないと…？」
「はい」
小悪魔の耳と頭についている小さな羽がシュン…としおれた。
「私も人里までしか知りませんね…。それも直接見た訳じゃないですし」
「そうですか…」
ちょうどその時に白玉楼の屋敷についたので幽々子に紹介してから咲夜やレミリアについて質問するが結果は同じだった。
「…それで、皆目見当がつかないのかしら？」
「はい。今はパチュリー様が紅魔館に本部を構えて、美鈴さんと私が情報収集をしてますね。あと、シュウさんと早苗さんと言う方が永遠亭に調査に向かってくれています」
「シュウ…なんで私に一言もくれずにいっちゃったんだろう…」

「美鈴さんが屋台に情報集めの為に顔を出した時に西行寺さんを探しに来ていたシュウさんと、彼を探していた早苗さんに事情を説明して、その場の流れで行く事になった。と聞いてますが…」

妖夢は暫く考え込んでいたが、なにかを決心した様で幽々子に向き直った。

「幽々子様、私も永遠亭に―」

「駄目よ」

即答だった。妖夢にとってこれは意外だったようで目を丸くしている。

「な、何故ですか？」

「今の永遠亭は危険だわ」

「…なにか知っているのですね？」

幽々子は黙り込んでいたが、口外厳禁と言う条件で話し始めた。

(ちなみに小悪魔は頑なに聞こうとしたがなんとか帰ってもらった)

「紫がね、帰ってきてないのよ。もうすぐ一カ月になるかしら、『最近永遠亭で結界の揺らぎが多くなっている』って言って式の藍をつれて永遠亭に行ったっきり。家を訪ねようとしたらマヨヒガもなくなってたわ。橙はついて行ってないはずなんだけど、彼女も見つからない。つまり今、八雲一家がいなくなっているの。それを聞いた霊夢は調査に行ったけど、彼女も行方不明。これがどれだけ異常な事態かわかるでしょう？」

「私がシュウを連れ戻しに行ってきます！」

「駄目と言ったでしょう」

「見捨てるんですか！」

そう言って妖夢は幽々子の胸倉をつかむ。従者としてあるまじき行為であったが本人にとってそんなことはどうでもよかった。

「相手が永遠亭にすむ月人だけとは限らないわ。それに目的も原因も分からない以上は冥界が狙われている可能性も考慮しておかなければならないわ。私たちには冥界を守る責任があるの。分かって」

「それでも見捨てる事なんて…」

「それに誰が見捨てるって言ったかしら？私はシュウなら帰ってくると信じて何もしないと判断したのだけど。妖夢はシュウが信じられない？シュウの強さは貴女が一番そばで見ているでしょう？」

「それは…そうですけど…ッ！」

二人の表情は苦しげで、複雑だった。

第六十七章　傭兵と罠（後書き）

明日公開予定の次話の前後に以前の「真実　襲撃の因果」をよんでおくと今後の背景がわかりやすいかと。

真実2　「八雲紫」の手記（前書き）

割とクライマックスな予感

真実2　「八雲紫」の手記

私はシュウが辿りついた幻想郷にやっとの思いで到着した。本来同じ世界に同じ人物は存在出来ないんだけど、境界を弄って短時間だけど割り込む事に成功した。

さしあたってこの世界の八雲紫を始末する必要があった。

ちょうどその時こちらの紫と藍が迷いの竹林に入ってきた。人目につかずに始末できるのは今しかない。そう思った私はその場で不意打ちを掛けてこちらの紫をスキマで私が元いた世界に結界で身動きを取れなくしてから送り込んだ。藍は力の差があったので簡単に捕えることが出来た。そうしてこちらの紫と藍を始末した私は私の式の藍を呼び寄せた。その時こちらの世界の橙が竹林から出て行ったのが見えたが、こちらでは俯瞰で探す事ができないので断念した。

それから一カ月掛けて身体をこっちに馴らした。途中で霊夢が私（ではなく紫）を探しに来たが、だまして背後から紫と同じようにしてとらえた。

そうして終わらない夜が始まった。竹林の中で気配を殺して張っていたが来たのは紅魔館の主従コンビだけだった。私は適当に理由をでっちあげて同行し、永遠亭を制圧した。その時に兎を何匹か確保しておいた。そして散々戦って消耗したレミリア、咲夜、永琳、輝夜、てゐをとらえたが、優曇華院を取り逃してしまった。でも、藍がここからは出られない様に結界を張っているので取っておいた兎の意識の境界を弄って取り出した。出現時間を多元的にして一匹を兎を大量に複製し、彼女を追わせた。

「彼」が奇妙なロボと乗り込んできたのはその時だった。

私は向こうの世界でかき集めた銃器を持たせて迎撃を指示しながら、理由のない焦燥に駆られていた―。

真実2　「八雲紫」の手記（後書き）

この後がですね、全く展開が見えてないです。
いや、断片的には出来てるんですが、繋がらないんです。
なので次話は遅れるかもしれません。
もし投下出来そうになかったら並行して書いていた新シリーズの方を上げようと思ってますので、そちらを呼んでもらえれば（宣伝ｗｗ）
ちなみにそっちはシュウ達とは関係ないですがあしからず。

追記：
８０００ユニーク突破です！ありがとうございます！
もうすぐ１００００００ＰＶでもあります！
頑張っていいものを掛けるように頑張ります！

第六十八章　傭兵と前線基地攻略（前書き）

ついにシュウ達が進行を始める…。

追記：８／１６
タイトルが「～章」で終わっていたのを修正しました。
あと８５００ユニーク達成です！
これからもよろしくお願いします！

第六十八章　傭兵と前線基地攻略

―永遠亭―

シュウ達が玄関をくぐると中は異様なまでの静けさに包まれていた。遠くで声がしているのが微かに聞こえるだけである。廊下は不自然にまっすぐ伸びており、床は紅く染まっているのにも関わらず、両サイドのふすまは汚れ一つ付いていなかった。廊下の途中にはいくつかのふすまが「横向きに立っていた」。

「早苗、一応いつでも戦えるようにな」

『はい』

シュウは手元にスペカと自動小銃を、早苗は右手のガトリングを展開しゆっくりと廊下にあがった。グリップの事を考えて靴は脱がなかった。一歩踏み出すたびに「ゴト…」と、硬質な足音が響く。ふと早苗がガトリングを前に突き出して構えた。

『前方の遮蔽物の影、生命反応多数です』

『だそうです』

「だろうな、あの立ち方は不自然だ」

オペレータの音声に二人が首肯すると同時にふすまの影から「アサルトライフルを構えた」ウサギの少女たちが上半身を乗り出した。銃口はシュウに向いている。

「早苗、スマンが装甲になってくれ！」

『ここは私が倒しますのでシュウさんは頃あいを見計らって手前のふすまへ！』

「了解！」

早苗が立膝の状態になってその後ろにシュウが隠れた。それと同時にウサギ達のアサルトが火を噴き、早苗の装甲に火花を散らす。しかし早苗はそれを気にも留めずにガトリングを掃射する。すると一斉に彼女たちが隠れて遮蔽物に身を隠した。が、遮蔽物と言って

も所詮はふすま。結界で多少強化されていようと本質は手でも破れる程度のもの。それゆえに弾は貫通し、ウサギたちを掃討した。
確かに全てのものが倒れたはずであった。しかし最前列を除いてウサギの少女は立ち上がった。
『嘘…なんで立ちあがれるの…？』
「疑問はあとだ！とにかく遮蔽物まで走るぞ！」
シュウは早苗の影から飛び出し、倒れかけのふすま目指して走った。もちろんウサギはシュウに発砲する。シュウはふすまとは反対の壁に進路をかえた。ウサギは予想外の行動に狙いが外れた。
（あと3メートル！）
ウサギ達はシュウが移動したのを追いかけるように横なぎに撃っている。シュウは反応が思ったよりも早い事に内心舌打ちしながら「壁を蹴った」。もともと壁に向かっていた事もあり、その反動は大きく、壁からの力を一身に受けたシュウは血糊で摩擦の少なくなった床を滑った。結果、シュウは無事に手前のふすままで辿りついた。シュウはふすまの内側に鋼鉄の板を創り出し、身をゆだねた。そこに早苗があるいてきた。集中砲火を受けているが気にしている様子はない。
『凄い身のこなしですね…』
「早苗、とりあえず隠れろ。火花が散っててそっちを見づらい」
『そうですか。…どうなってるんですか？なぜアサルトなんてものが幻想郷（こっち）にあるんですか？』
「知らない。言える事は何者かが介入しているってことぐらいだろ」
奥の方の喧騒がだんだん近づいてきているようだ。微かに聞き取れる言葉の雰囲気では誰かを追っているようではあった。
『誰かが逃げ回っているようですね』
「とりあえずそいつと会ってみたいな。場合によっては戦力になるかもしれない」
『そのためにもここを突破ですね』
「だな」

シュウはさっき取り出したスペカを発動した。

神威「ホーリーランス」

魔法系統聖属性の直線攻撃である。シュウの前方に魔法陣が現れ、その中から巨大な槍が飛んで行った。立ち上がる者は2，3匹だった。そのウサギの少女は後ろを気にしているようだ。その頃になって奥の喧騒が何を言っているのか理解できるほど大きくなっていた。

『そっちに逃げた！』

『大丈夫！あっちは侵入者用の基地がある！』

『基地が壊滅したらしいよ！』

『だったら残ってる奴らをこっちに回して挟み撃ちにするんだ！』

『基地は！？』

『諦める！』

「とにかく残ってる奴らを向かわせるとまずそうだな」

『ですね』

そう言ってる間にも二人で銃を撃ち放して残りのウサギを制圧した。その時だった。ウサミミコスプレ少女が現れたのは。

第六十八章　傭兵と前線基地攻略（後書き）

間に合いませんでした！すいません！
最近プライベートの用事が多くて書ける時間がありませんでして…。

ご迷惑かけますが、今後もよろしくお願いします。

第六十九章　傭兵と護衛

玄関前のウサギたちを掃討して中に進むとブレザーに身を包んだウサミミ少女が現れた。彼女はかなり焦っているようだった。逃げ回っていたのは彼女だろうと容易に想像できた。

「うそっ！？ウサギ以外に追手が！？」

その少女はそういうとスペカを取り出した。

『ちょ、ちょっと待ってうどんげ！』

「え…？その声…早苗？」

どうやら彼女は「うどんげ」と言うらしい。…愛称であるのはほぼ確実だろうが。

「早苗、知り合いか？」

『あ、はい。彼女は永遠亭の薬をいつも届けてくれるんです』

「そういうことか、それで―」

「とにかく匿って！」

シュウが言葉を続けようとしたのに合わせて「うどんげ」は叫んだ。それもそうだろう。先ほどまで逃げ回っていたのだ。いつ追手が来てもおかしくないのだ。三人は玄関に向かって走り出した。そしてそれを待っていたかの様なタイミングで追手が現れる。

「やっぱり基地が崩壊してる！」

「外に出られる前に追いつくよ！」

「「「おー！」」」

「なんだかな…」

『どうしました？』

「いや、追手の台詞がなんとなく緩い印象と言うか…」

『まぁ、少女の声ですし…』

そうこう言っている間に玄関に到着したが先陣を切っていた早苗

がドアを開けようとした。しかし、どんなに力を込めても引き戸はビクともしなかった。
『どうして…!?スーツの力をもってしても出力が足りないの…!?』
「早苗!追手を潰してくれ!俺が代わる!」
シュウと早苗が立ち位置を変わる。早苗はガトリングでウサギたちを食い止めている。シュウは引き戸に手を置くと、その扉を「分解」した。分解された扉は砂になって足元に落ちる。
「今だ!」
シュウの掛け声で三人が一斉に外に出る。シュウは三人が外に出たのを確認すると砂を変換して扉があった場所にコンクリートの壁を創り出した。
「ふぅ…」
『なんとか出られましたね…』
「ありがとうございます…。あ、自己紹介がまだでしたね。私は鈴仙・優曇華院・イナバと言います」
「よろしく、俺は村島秀だ」(うどんげいん…どこかで聞いたな…)
一人何かを思い出そうとしているシュウを置いて、早苗は状況説明を求めた。シュウは思い出すのを諦めたのか、すぐに会話に戻ってきた。
『ねぇ、うどんげ。何があったのか話してくれない?』
「あ、うん。まず昨日私たちは月の使者から身を守るために月に細工をしたわ。正確には師匠がだけど」
「それが昨日の月の異変か」
「たぶん…。それで紅魔館の主とその従者とスキマ妖怪が一緒に攻めてきて…」
「紫が一緒に?」
『あのスキマが一緒に?』
「うん。で、師匠と輝夜様と紅魔館の二人をまとめてスキマに閉じ込めて、一気に永遠亭を占拠し始めて…。てゐも一緒に逃げてたん

だけど、途中で捕まって…。」
『それじゃあ、あのウサギたちは―』
「スキマから出てきたものよ。見覚えがないもの…。それに出てきた奴らは武器を持ってた」
『それじゃあうどんげ―』
早苗は再び何やら話していたがシュウの頭はまたしても思い出そうとしていた。
(うどんげ…うどん、げ?うどん毛ＩＮ!?こいつ、外道か!)↑
(五十一章参照)
シュウをある種のカルチャーショックが襲う。その所為か、シュウは思いっきり声に出していた。
「外道か!」
「『へ?』」
突然の叫び声に固まる早苗達。二人がシュウの方を向いたとき、後ろの「地面から」人影が飛び出してきた。その人影は小柄な少女で頭にはウサミミ。その手には巨大な杵。
「外道と呼ばれちゃ、出ない訳にはいかないね!」
そう言って飛び出した少女はその杵でうどんげを思いっきり横なぎに打ち据えた。遠心力や梃子まで使って全力で放たれた打撃は彼女を吹き飛ばし、永遠亭の壁に衝突して止まった。
「…てゐ。どうしt…うわぁ!?」
うどんげはそこまで言ったところで壁に開いたスキマへと呑まれてしまった。いまの発言からして目の前の杵を持った少女はてゐと言うらしい。そしてそのスキマから大量の武装ウサギが現れた。
「お前たち、生け捕りなんて面倒な仕事は終わった。残るは獲物の人の子」
そう言って杵を地面にたたきつける。先端部が地面に埋まって容易に抜けそうにない。
「これからは狩りの時間だよ!」
そう言って杵を柄を持ち上げると、木の太い部分が地面に残り、

刃が姿を現した。その得物はどう見ても鎌だった。

第七十章　傭兵とラビットハンティング

「狩りの時間だよ！」
てゐは扉の方に飛び退って鎌をこちらに向けながらそう叫んだ。
するとシュウ達とてゐの間に扇状に展開していた武装ウサギたちが一斉に銃を構えた。その眼は赤く怪しく輝いている。シュウは銃口を向けられるよりかすかに早くスペカを発動した。

完全武装「バトルセット」

シュウは自らの生体情報を書き換えて皮膚を覆うように不可視の装甲を展開した。そして両手に充分なチカラが充填される。それと同時に武装ウサギたちの銃器が火を噴く。直後、シュウと早苗を銃弾の嵐が襲う。
『シュウさん！』
「大丈夫だ、皮膚をそのスーツより頑丈に作り変えた」
『…心配して損しました』
銃弾の嵐の中、平然と会話をする二人。武装ウサギ達はその光景を信じられないと言った様子だったが、銃撃の手を止める気配はない。それをみていたてゐは腹立たしげに叫んだ。
「えぇい！何やってるんだい！ちゃんと狙いな！」
「当たっても効きません！」
「ロボ撃ってどうすんだい！」
「生身の方も効きません！」
「…下がる訳にはいかないよ。銃撃はやめるんじゃないよ！少しでも足止めしつつ増援を待つよ」
そう言うとてゐも自動小銃で二人の足を打ち始めた。増援を呼ぶためか伝令ウサギが何匹か走り去って行った。

『シュウさん、相手は諦めモードみたいですね。増援待ちのために足止めに徹底するようです』
「なんで分かるんだ？」
『集音機ついてますから』
今更ながら河童の技術に感嘆しつつ呆れたシュウは肩をすくめた。
「…そうかい」
『でも、ゴーグルを保護しないといけないんで戦うのが面倒なんですよね…』
「ゴーグルは脆いのか？」
『目に迫ってきて怖いだけです』
シュウは、それは保護するのではなく目を覆ってるだけではないのか？と思ったりしたが、口には出さず、代わりにため息をはいた。
「はぁ…とりあえず俺が倒せばいいんだろ？」
『お願いします。私は二日酔いが抜けてないので後ろで休んでます』
「はぁ…」
『冗談ですよ？』
今度は聞く耳を持たずにシュウはウサギ達の方へ向き直った。
（…さて、どうするかね…？この装甲展開するのも疲れるし、早くカタをつけたいところだが…）
そうしてしばらく適当に銃で応戦しながら鉄の雨の中で考えていたシュウだったが、ある作戦を思い付いたようだ。
（一番近いのは…あいつか）
もっとも手近にいた武装ウサギ少女に狙いを定めるとスペカを取り出した。しかし、シュウはなかなか作戦を実行する事が出来なかった。なぜならこの作戦はシュウの中で確立しつつある仮定に基づいたモノだった。
（もし、俺の憶測が間違っていたら…。いや、それは今考える事じゃない）
シュウは迷いを振り切るようにスペカを発動した。

第七十章　傭兵とラビットハンティング（後書き）

ラビットハンティングはウサギの狩りとウサギ狩りのダブルネーミングです。日付変わるまでに間に合わなかったのが「傭兵と」の後を考えていたからです。すみませんでした。

第七十一章　傭兵と張りぼての部隊長（前書き）

一話が短くなっているのは勘弁を。

第七十一章　傭兵と張りぼての部隊長

シュウは手近なウサギに狙いを絞るとスペカを発動した。

引力「グラビティ」

狙いをつけたウサギを中心に魔法陣が展開していく。ウサギ達は驚き、逃げようとして――捕まった。魔法系統闇属性範囲攻撃。魔法陣の内側に生じた闇の引力で地面に磔にして、瘴気で身体を腐蝕させる魔法。シュウが質量を変えずに動きを奪う事を考えた末に選んだものだった。瘴気が晴れると、そこには潰れて半分朽ちたウサギが数匹転がっていた。ウサギ達やてゐに衝撃が奔った。相手は格が違う、と。シュウはそのウサギ達をチカラに還元し、身体にまとった。その時、ウサギの構成を読んで、可能性が現実になった事に顔をしかめた。

（やはり…。俺の仮定はあっていたが…。これはこれで辛いな…）

「距離をしっかり保つんだ！」

てゐがウサギ達に号令を出す。ウサギは散り散りに散開しながらシュウの眼や、足元など行動を阻害しやすい場所を攻撃していく。シュウは振り切るように周囲を見回すと、纏ったチカラを運動エネルギーに変えることで、次から次へとッ目にもとまらぬ速さでウサギを分解して回った。すると数分もしないうちにウサギの大半はチカラの塊としてシュウの右手に集まっていた。

「ぐ、ぬ…」

「てゐっていったけか？」

「…なんだい？」

「どう言うことか説明してくれるか？主に目的とか」

「断る、っていったら？」

「始末する。どうせウサギ達（こいつら）と一緒で複製なんだろ？」

てゐは複製という言葉を聞いた瞬間表情を凍りつかせた。
「どうして…それを知って…」
「さぁな」
「う…ぐ…」
「説明する気はない。と言う事でいいな?」
そういうとシュウは手にためたチカラをてゐにぶつけて爆裂させ、吹き飛ばした。彼女は門を超えて飛んで行こうとして—門の上空で静止した。まさに越えようとした瞬間門の上から敷地を囲うように結界が現れ、磔にしたのだ。てゐは目を見開いて痙攣しているようにみえた。それを見ていた早苗はシュウのもとに駆け寄ってまくしたてた。
『シュウさん、なにがどうなってるんですか?それに複製って?なにか秘密を握って—』
「おちつけ、一つずつ答えていくから。それにしても厄介な結界だな」
シュウがてゐを見上げてそうつぶやくと、さらに質問を重ねようとした早苗の出鼻をくじくように声がした。
「師匠!」
聞き覚えのある声にシュウが振り向くと橙が門の少し外に立っていた。

第七十二章　傭兵とウサギのシステム

門の少し外に橙がたっていた。
「どうした、橙」
「師匠…藍様が、紫様が…。紫様に倒されちゃった…」
橙の声はふるえていた。
「どう言うことだ？」
「藍様と紫様は先月にこの竹林に入って行ったの。そしたらスキマからもう一人紫様が出てきて…。私の紫様を倒して、藍様も倒してスキマに閉じ込めちゃったの」
「紫が、二人？つまりこれは俺たちが知っている紫の仕業じゃない…？」
「師匠、二人を助けて下さい…」
橙はそう言って頭を下げた。涙は流していなかった。
「分かった、尽力はするさ。あと、この屋敷には入らないでほしい。一度入ると出られないようだ。だから橙は明日になっても俺たちが帰らなかったらみんなに知らせてほしい」
「分かりました」
その後二、三取り決めをして橙は人里に避難していった。早苗が背後から控えめに声をかけた。
『シュウさん、そろそろ説明してください』
「そうだな、とりあえず今回の戦闘と橙の報告で分かった事は黒幕は紫。しかも紫は別人で、俺たちの知っている奴じゃない。この結界もおそらく奴の仕業で、てゐやうどんげが回収されたのもその所為だ」
『複製っていうのはどう言う事ですか？』
「さっき分解したウサギは生体情報が完全に一緒だったんだ。本来ならばあり得ない現象でどんなに似ていても、たとえば同じＤＮＡ

から作ったクローンでも８０％が限度だ。でも完全に一致していたと言う事は同じ存在だと言う事。一人を大量にしているって事」

『そんなのどうやって…』

「さぁな。時間の境界でも弄ったんじゃないか？カマ掛けたら反応した事を考えるとてゐは複製だってことを認識していたみたいだしな」

『そしたら…相手を減らしても意味が無いじゃないですか…』

「だから強行突破の大将首取りしかないな」

そう言うと玄関の壁を消してウサギを蹴散らしつつ二人は屋敷の内部へと駆けた。

第七十二章　傭兵とウサギのシステム（後書き）

現在リアルの方でかなり忙しくなってまして、更新が遅くなるかもしれません。
（とか言ってもいつも更新してんじゃねぇかと思ったけど今回はむりぽ）
なんたって休日は大学めぐりしなきゃイカンし、休日じゃない日は宿題やらなきゃイカンしというね。
てな訳で、隔日で投下できたらいいなぁ。なんて思ってます。

第七十三章　傭兵と再会（前書き）

お久しぶりです。
隔日とか言いつつ一週間以上開いてしまってすみませんでした。
心待ちにしてくださった方々。お待たせ様です。
今後も予定が詰まっており、活動報告やｔｗｉｔｔｅｒでご存じの方もいるかと思いますがスランプ気味でして、四苦八苦しながらも書きました。
以降も更新頻度は以前のようには行きませんが、どうか暖かい目で見守ってくれると嬉しいです。

第七十三章　傭兵と再会

―ガガガガッ！！―

二人の銃が火を噴き、ウサギを蹴散らしながらも猛然と永遠亭の内部を駆けている。次から次へと形を変える通路に苦戦しながらも所謂「本陣」へと着実に歩を進める。二人は決して短くない時間を全力で走っているので、アシストが付く早苗はまだしもシュウは相当に疲労がたまっている。はずなのだが、自らの疾走感に酔いしれているのか今にも哄笑をあげそうなほどに昂ぶっているようだ。

『シュウさん！次の通路左側の壁を突き破って突き当たりの壁の向こうに生命反応多数！さらに奥に強大なチカラの反応が二つあります！黒幕ですね！』

「了解！いよいよ本陣ってか！――うらあぁぁぁ！」

威勢よく叫びながら壁に拳を叩きつけて分解し、直後に早苗のレールガンで遠くにある壁までもを突き破る。中に居たウサギも巻き添えになったようだが、今こそは分水嶺とでも言わんばかりに総攻撃を仕掛けてくる。早苗とシュウは装甲で傷こそ負わないものの、圧倒的な物量の鉄の嵐による衝撃で前進を妨害される。

「ぐ…ッ！」

『衝撃が…！』

二人はおよそ５００メートルほどの通路の中間当たりで歩を止めざるを得なくなってしまった。むしろよく磨かれた廊下に血糊がたっぷりとしみ込んだ靴では踏ん張りが利くはずもなく、ずるずると下がり始めてしまっている。

「やられてばかりで、居られるかよ！」

そう言ってシュウが攻勢に出ようとした瞬間、装甲の一部を破って数発の銃弾が皮膚をかすめ、血が滲んだ。シュウは慌てて装甲を補強に回った。結局は現状維持、打開策も見つからずに廊下から押

し出され始める。
「スペカは取り出した瞬間にカードが穴だらけになっちまうし、下手に攻撃しようとすると装甲が破られる…。八方塞がりじゃねぇか…」
『シュウさん。ここは私に任せてください…。一気にあのウサギを蹴散らしてやりますよ。ここまで舐められた真似をされてそのまま下がる様じゃ……この熱く滾るロボット魂が収まりつかないんですよ！』
「早苗？」
早苗はレールガンの先端をガトリングに連結し電力を流し始めた。ガトリングは高速回転しながらも電気を帯びていき、バチバチと放電を始めた。超高圧電流による磁場の関係か銃弾の衝撃が弱まっている。
「おい！そんなことしたら―」
『この機体は私が一番分かってます！それよりもシュウさんは一気に敵の本陣に突入して奥に居る二人組を制圧してください！ここは私が引き受けますので！』
「…了解。上手くやれよ！」
『私を誰だと思ってるんですか！行きますよ…今です！』
早苗は叫ぶと同時に電磁加速されたガトリングを放つ。それらはレールガンほどではなくとも異常なまでの推進力をもってして弾幕を蹴散らし次々とウサギに襲いかかる。シュウは弾幕が薄くなったと同時に駆けだし、突き当たりのふすまを蹴破って中に転がり込んだ。ウサギが追ってこようとしたので自分で壊したふすまを再構成して締めだした。
周囲を見渡すとそこは「応接室」だった。正面にある台座には輝夜が居るはずで、隣には永琳が控えているはずだった。平常時ならば。
「随分荒々しい登場だ事」
しかし響いた声音は別人のもの。シュウは直感的に分かった。い

や、分かってしまった。自分はこの声を知っている。この世界に居た紫ではない。しかしこの声は紫のもの。まぎれもなく、あの日、あの時、すべての始まりとなったあの洞窟で聞いた声。

「久しぶりだな、神隠しの主犯…とでも呼ぼうか」

「覚えていたのね」

振り返ったシュウの正面、台座の上にはスキマに腰かけた紫が、自らの式をひきつれて悠然と。シュウを見降ろしていた―。

第七十三章　傭兵と再会（後書き）

……言いたい事は前書きでだいたい言ってしまったんですが。
もうひとつのシリーズの方はまだ筆が進みやすいようで、多少は更新頻度が高いかと思います。そちらの方もよかったら見てくださると、嬉しいなぁ…。なんて。
宣伝です、すいません。

８／３０追記
１万ユニーク＆１１万五千ＰＶ達成です！ご愛読ありがとうございます！今後もよろしくお願いします！

第七十四章　傭兵と火蓋

「それで、今日はどうしたのかしら？」
紫はその笑みを崩さぬまま白々とそんなことを言ってのけた。
「とぼけるなら、もう少しマシな事を言えるようになってからにしたらどうだ」
「とぼけるつもりなどないわ。一応用事だけでも確認しておこうと思ってね」
紫の発言にシュウは顔をしかめた。それこそ確認するまでもないだろうに。
「紫を返せ。ついでに還れ。じゃないといろいろと面倒なんでな」
「私も紫なのだけれど―」
紫が茶化すような笑みを浮かべて言葉を返している途中で、姿がかすんだ。それは一瞬の出来事だった。現にシュウは違和感を感じた程度であった。が、紫は苦虫を噛み潰したかの様な表情を浮かべた。
「藍。いい加減目覚めた様だわ」
「流石に一カ月も経ちましたし、そろそろでしょう」
「そんなことは分かってるわ。少し、黙らせてくるわね」
「それではここは私に」
「そうね、任せたわ」
「おい待て！」
シュウが立ち去ろうとする紫を呼び手目るが、こちらを見据えたままスキマに消えていった。そして藍がゆっくりと台座の前に移動し、シュウの前に立ちはだかる様に睨んできた。
「悪いとは思わない。シュウには私たちの世界に来てもらうからな、力づくでも」
「異世界人だったか」

「検討はつけていたのだろう？」
「あぁ、予想通りだ」
「そうか…。何はともあれこっちの世界に来てもらう」
「断る」
即答したシュウと藍の間に暫くの沈黙が流れた。そして二人はニヤリ、と嗤った。
「そうか、交渉決裂だな。残念だ」
「とても残念そうには見えないが？」
「そういう君こそ、随分と愉しそうじゃないか」
「あんたほどじゃないさ」
直後―二人は妖気を解き放ち、互いから感じる圧力に笑みを深めながら戦いを始めた。

第七十四章　傭兵と火蓋（後書き）

今回は前話で書き忘れた分なんですが、地味に多かったので短い一話として投稿させてもらいました。

第七十五章　傭兵と動き出した幻想郷

―白玉楼―

シュウが応接室に向かって駆けていた頃、永遠亭に比べて”時間が進むのが早い”迷いの竹林の外では橙がシュウと別れてから二日弱ほど経過していた。その間橙はシュウとの取り決めを忠実に遂行していった。

まずはレミリアと咲夜が捕えられた事を美鈴とパチュリーに告げ、次に妖怪の山に向かい、にとりに早苗と通信をつなぐように試みて貰った。河童の戦闘用機動部隊と萃香、そして文と椛にも事情を説明し、天狗たちとともに永遠亭から外部に攻撃部隊が出てこないか、いつでも迎撃出来るようにと監視してもらった。

―そして最後に、魔理沙とともに白玉楼に向かっていた。

魔理沙は白玉楼の長い階段を飛びながら何度目ともしれない問いを繰り返した。

「なぁ、橙。シュウの伝言は一体何なんだぜ？」

「妖夢さんと西行寺さんにも伝えなきゃいけないから、後で一緒にいうよ」

「それに『長時間戦えるような装備』って…。戦争するわけでもないだろうに」

「……」

橙は返事をしなかった。魔理沙の表情が硬くなる。

「まさか昨日から紅魔館やら妖怪の山が忙しく動き回ってるのは…」

「……」

「橙…？」

「最悪の事態にならない事を願うしかにゃっ…願うしかないよ」

「噛んだな」

「ほっといてよ」
橙が空気を微妙なものにしながらも二人は白玉楼に到着した。
しかし玄関は開いていなかった。しょうがないので上空から庭にはいると、縁側に二刀を抱きしめて俯く妖夢と、隣に扇とスペルカードを持ちながらも表面上はいつもの笑みを浮かべた幽々子が居た。
橙は二人に声を掛けながら二人のそばに降り立った。

「お二人とも、お久しぶりです」
「邪魔するぜ」
「あら…どうしたの？」
「……」
こうして目の前に立ったにも関わらず妖夢に反応はなかった。むしろ先ほどよりも強く二刀を掻き抱いていた。不安を押し殺すように。その様子を見た橙が滅多にない反応に、そしてその様子そのものに絶句していた。二日もシュウが「戦場」から帰ってきていないのだ。その不安に押し潰されそうになっている妖夢はとても儚く見えた。
「…橙？」
「あ、すみません。えっと――シュウさんからの伝言を預かってきました。」
「「――ッ！」」
妖夢と幽々子の表情がこわばり、驚愕に染まった。半ば絶望していたのだろう。直後、妖夢は橙に詰め寄り、胸倉をつかんでいた。
「シュウは！？生きてるの！？今どうしてるの！？ねぇ！」
「お、落ちつけよ」
「妖夢、彼の言葉を聞かないと何とも言えないのだからその手を離しなさい」
魔理沙が妖夢を羽交締めにして、幽々子がたしなめて、ようやく妖夢は表面上は落ち着きを取り戻した。
「すみません。迷惑を掛けてしまって…」

「で、シュウはなんだって？」
魔理沙に促されて橙は話し始めた。幽々子がいるからか、はたまたこれから言う事が伝わるかどうかで緊張しているのか、一生懸命な敬語で。
「今回、永遠亭は別次元の者と思われるスキマ妖怪によって、制圧されています。内部には八雲紫、八雲藍、十六夜咲夜、レミリア＝スカーレット、博麗霊夢。そして永遠亭の住民全員がとらわれています」
「そのスキマ妖怪は紫とは違うのか？」
「それは絶対。私がこの目で見たから…。紫様がさらわれるところを…」
魔理沙が苦い顔をして黙り込んだ。それを見た橙はここで一旦言葉を区切って、気持ちを切り替えてから言葉を継いだ。
「魔理沙さんには白玉楼の警護に参加してもらいます。その他の要所は他のみんなに頼んである…あります。私もここの警護に参加します。だからここは四人体制で―」
橙がそこまで言ったところで妖夢は刀を持って飛び出していた。
「おい！妖夢！どこ行くんだぜ！？」
「白玉楼（ここ）は任せました！私は―
私はシュウの傍にいなきゃいけない気がするんです！！」
それだけ叫ぶと妖夢は魔理沙の静止の声を振り切って永遠亭へと駆けていた。
（シュウ…。生きててくれた…。待ってて…今から傍に行くから…。）

第七十五章　傭兵と動き出した幻想郷（後書き）

今回は割と難産でした…。
なんででしょうね？
と言うかこれで三話分ぐらいの力を使った気がします↑

あ、今回のあとがきは長いので
「小説の内容だけ読めればいいや」
って人は飛ばして貰って結構ですよ？
ぶっちゃけ小説にあまり関係ないですから。

にしても今後は予定が詰まっておりまして、さらに更新頻度が下がる模様です。
なにはともあれうちの学校では明後日から文化祭。
そしてそのあとは大会シーズン入り。
直後に修学旅行で、
帰って来てから一週間もせずに定期テスト。
そのあとは舞台の予定があり、
そんなこんなで年末テスト（ここの定期テスト―年末テスト間は例年一カ月もあかないのです）
その頃にはもう年末で冬コミ準備ｏｒ冬コミを断念して地元に帰省（連行）ですよ。
どんだけ過密スケジュールなの…？
え？クリスマスが無いって？予定があるわけないじゃないですか。
強いて言えば部活があるかもしれないぐらいですかね

あ、話飛びますけど今回と言うか夏休み明けてから更新頻度が下がったのにはこの文化祭も関連してて、出し物で戦争ゲーム（将棋の戦車版みたいな）ものをプログラムで作ってまして。

それが結構ギリギリだったのもあります。

言い訳です。
すいません。
でも楽しく描くのがいいと思うので↑

あと、最近ザ・インタビューズなるものをはじめまして。
質問が来ないんです。原因を考えると宣伝をあまりしてなかったからではないか。
と言う事でやってます。
ｈｔｔｐ：／／ｔｈｅｉｎｔｅｒｖｉｅｗｓ．ｊｐ／ｍａｅｒｉ－ｋｉｒｉ／ｉｎｔｅｒｖｉｅｗ
ここは完全匿名制なので
「ＤＭとか感想とか個人を特定されるのはちょっと…」
と言う人はこちらを利用してください。

ちなみにあまり批判が集中すると凹みます。

第七十六章　傭兵と目的

―永遠亭・応接間前廊下―

『なんとか行ったかな…』

早苗はシュウが応接間に飛び込んでいくのを確認してホッとしていた。ウサギ少女たちはシュウの創り出した壁を突破しようと試みているようだった。

［ｅｎｅｍｙ：出現］

唐突にオペレータがメッセージを展開した。早苗は再び気を引き締めてリロードを行う。そして直後、データ通りにウサギ達を従えてｔｅｗが現れた。その姿を見てから周囲に居た者達も早苗の方を向いて止まった。

『なんの用？』

「いたのかい…？私はてっきり二人で入って行ったものだと思ったんだけど」

ｔｅｗは計算が狂ったとても言いたげに頭を掻くと、早苗を見据えながら指示を飛ばし始めた。

「アイツが居なくなった以上は戦う意味はない。そこのロボットを足止めしながら進軍を始めるよ」

『進軍…？』

「答える義理はないね。さあ！お前たち！もうひと働きしてもらうよ！」

ｔｅｗの号令で一斉にウサギが散開し、一目散に外へと駆けだした。直後、ｔｅｗと周囲に残ったウサギが早苗に特攻を仕掛ける。

「ちょっとでも長く留めな！」

『話が見えないんだけど…。今は考えるのをじゃましないで！』

早苗は一番手前にいたウサギを殴り飛ばし、てゐ達に向かって内蔵のランチャーを放った。そして着弾と同時に屋根が吹き飛んだ。充満する煙に残ったウサギと危機を察知して下がったてゐの動きが止まる。それらをＮＶＧ（熱源可視化ゴーグル）で捕えた早苗が手早くしとめ、状況を確認すべく上空に向かった。すると先ほど飛び出したウサギ達が竹藪にまぎれて出ていくのが見えた。

『狙いは…外！？』

［ｃａｌｌ－Ｂａｓｅ－］

［聞こえるかい！？早苗！］

早苗がウサギの動向に気が付くと同時にオペレーション回線からにとりの声が聞こえた。

『にとり？どうして――』

［やっと繋がったよ。こっちとの連絡をつなぐようにってシュウに言われてね］

にとりの声には多少の疲れが滲んでいるようだった。

『そうなんだ…。そんなことより大変なの！』

［そっちの状況はＯＳ（オペレーションシステム）から聞いてだいたいは分かってる。でもそんなに焦る様な事でもないでしょ？］

にとりのあくまで楽観的に思える発言に早苗は声を荒げた。

『何言ってんの！？ウサギの部隊が外に向かって進軍を始めたの！』

［その可能性もシュウから聞いてたから、迎撃準備は出来てるのさ。だからそっちでも足止めしとくれよ］

にとりの発言に早苗は絶句した。

『シュウさん…。どこまで見越してるんですか…』

［私らが聞いてるのは可能性の話だよ。それを危惧して動いてるのはこっち］

『……』

［とにかく、足止めと数減らし、頼んだよ］

にとりはそう残すと音声回線を切った。

『ったく…。にとりの自分勝手な所は変わってないんだから…』

早苗は一人ごちて視界にとらえたウサギ少女に照準を合わせ。そしてため息一つ、引き金を引いた――。

第七十六章　傭兵と目的（後書き）

事態は大きく広がって行く…！？

第七十七章　傭兵と妖孤　？

―永遠亭・応接間―

応接間にて向きあうのはシュウと藍。二人は自らの妖力を高めて攻撃の機会をうかがっていた。互いに手の内が知られていない上に、相手が自分と同等のプレッシャーを掛けているので二人とも動けないでいた。ピン――と張りつめた空気の中に、轟音が響く。音の発生源は外の廊下、早苗がウサギに放ったランチャーの炸裂音だ。瞬間、二人は同時に動き出した――。

確かに動いたのは同時であった。本来ならば妖怪たる藍が先手を打つハズで藍もまたそう信じていた。しかしシュウは身にまとった妖力の一部を自らの運動エネルギーに変換する事で驚異的な速度を持ってして先手を打った。

一瞬で肉迫するとグレネードを握りしめた拳で藍を殴りつけた。その衝撃は信管に伝わり、瞬時に爆発を起こした。いくら強大な力をもつ妖怪である藍であっても予想外の行動であり、爆風をもろに受けて吹き飛んだ。さらに追い打ちを掛けるためにスペルカードを発動する。

嵐風「バレット・ストーム」＜追従型＞

宣言と同時に周囲にガトリングや機関銃が展開され、一斉に藍が吹き飛んだ場所に放たれる。そしてその向こうからはなんの反応もない。

（随分あっけないな…。まぁ、これで終わるはずがないのは分かるが）

シュウがそう思った瞬間その場所からチカラの塊がシュウめがけ

て飛来した。それは質量をもたぬために銃弾をすり抜けて接近し、シュウの前ではじけて大量の弾幕を炸裂させた。その弾幕はあたりにあった銃器を破壊し、シュウをも襲う。シュウはそれに顔の前で腕を交差させて耐えた。

「ぐっ」

「私がその程度で沈むとでも思ったのか！」

藍が叫び、シュウが「あぁ、思ってなんかいなかったさ！」と内心で自らに毒づくのと弾幕がシュウを通過するのは同時だった。急いで顔を上げるとクナイの様な形をした弾幕が渦を巻くように迫っていた。シュウはそれを身体を移動させ、ねじり、かがめ、やっとのことで潜り抜けた。すると目の前に居たのはスペルカードを掲げ、こちらを見下ろす藍だった。

「手加減はしないから覚悟を決めるんだな」

そう言うとスペルカードを発動した――。

第七十七章　傭兵と妖孤　？（後書き）

みなさんどうも。
ようやく藍とシュウの戦闘がはじまりました。
時系列が進むのが遅くてすいません。一応山場ですのでやりたい事が多くて…。
（動いているキャラがやけに多いのもその所為です。）
なにはともあれ明後日から暫く執筆が出来ない環境になるので、頑張って書き上げました。
折角思い付いても形に出来ないジレンマが俺を襲うのか…ッ！
嘘です。だいたいいつも思い付くのは自宅ＰＣの前なので弊害はないかと。

なにはともあれ七十七章。ぞろ目のこの回でこの展開。
作者は大いに燃えています。（但し執筆が出来ないのでこの情熱をぶつける事は出来ませんが。）
そんなこんなで頑張って行きますので今後とも弾丸と幻想郷をよろしくお願いします。

第七十八章　傭兵と妖孤　？（前書き）

なあ、気づいてるか？
小説内では第五十一章から一日も経ってないんだぜ？↑夜は明けたけど

そんな訳で更新です。
お楽しみください。

第七十八章　傭兵と妖孤　？

藍はスペルカードを掲げ高らかに宣言した。

式輝「四面楚歌チャーミング」

宣言と同時に縦に並んだクナイ弾の壁が現れた。それらは斜めに迫り、交差してシュウを四角い空間に捕えた。その空間はぐにゃりと曲がりながら右へ左へと移動を始めた。

（まさか、このまま押し潰すつもりじゃ…？）

シュウの脳裏に嫌な予感がよぎる。直後、その空間のサイズを優に上回るほど、ひと際大きな弾幕が壁を飲み込みながら飛び出してきた。前は大玉、左右と後ろは壁。逃げ場はどこにもなかった。

（逃げ場がないなら逃げねばいい！）

シュウは眼の前の弾幕を物質化すると練り上げた妖力で思いっきり射出した。その大玉は壁を蹴散らしながら藍に迫る。シュウもそれに続くように距離を詰めていく。そして、大玉は最後の壁突破すると同時に限界を迎えて砕け散った。砕けた大玉の影から現れたシュウを見て藍の表情が驚愕に染まる。

「なっ！？」

「っらあああぁぁぁぁぁぁ！！！」

シュウは手元に大き目の剣を創り出し、藍めがけて思いっきり突きだした。その剣は深々と藍を貫いた。しかし藍の表情は嗤っている。

「なにがおかしい…？」

「いやなに――「こんなに簡単に掛るなんてねぇ！」」

藍が叫ぶと同時にその姿は霧散し、背後から現れた藍がシュウを背後から頭を蹴り抜いた。常人ならば頭が吹き飛ぶほどの威力である。シュウの目の前には貫かれた「掛け軸」があった。

「がっ！？」

「元来狐は騙す事が大の得意なものでな…。それにこれは弾幕勝負なんてぬるいモノじゃなく殺し合いなんだよ」

藍はそう言うと追撃を掛けようとシュウとの距離を詰めた。しかしシュウはそれを迎え撃つ体勢を整える。ポケットから「木片」と取り出してチカラを流しつつ叫んだ。

「御柱よ！」

「なに！？」

すると藍の真正面から御柱がもの凄い勢いで飛び出した。藍は間一髪で右にずれて回避する。しかし追い打ちをかけるように次は天井から、それを退いてよければ背後から、と次から次へと柱が藍を襲う。そしてついに藍の周囲にはあらゆる方向から延びた柱が密集し、身動きが取れない様になっていた。そして、仕上げと言わんばかりに極太の御柱が真下から他の柱をへし折りながら突き上げて、藍を打ち据え、天井を破った。

藍が空高く打ち上げられていく。早苗やウサギ兵士たちが茫然とその様子を見上げる中、シュウは天井と折れた柱を全てチカラに変換して藍のさらに上へと瞬時に移動した。そしてそれらのチカラを運動エネルギーと妖力に構成して全力の拳を叩きおろす。

藍はもの凄い勢いで落下して御柱に叩きつけられた。まるで杭打ちのように叩きつけられた藍はそのまま御柱を縦に砕きながら落下していき、地面に衝突した。その衝撃はよほど凄まじかったのか御柱の破片と壁だけになった応接間を吹き飛ばして破片を散らしていった。

「恨むなよ？だってこれは『弾幕勝負じゃない』からな。そうだろ？」

しかしシュウは自らのテンションが上がり過ぎている所為で気がつかなかった。藍の落下した場所に通常ではあり得ないほどの妖力

が流れている事に――。

第七十九章　傭兵と集う少女

「恨むなよ？だってこれは『弾幕勝負じゃない』からな。そうだろ？」

藍の頭上からそんなシュウの声が降ってきていた。藍は背中に刺さった木片による激痛に顔をしかめながらシュウの様子をうかがう。するとシュウは辺りを見回しており、こちらに気が付いている様子はなかった。

「この程度では沈まぬと言ったのが分からないのか…っ！随分とナメてくれるな」

そう言うと藍は背中の木片を抜き取り周囲に散らばる木片に式を打っていった。

［Ｗａｒｎｉｎｇ］

スーツ内蔵の機関銃でウサギ兵士を狩っていた早苗のディスプレイに警告が表示された。それと同時にウィンドウが二つ展開される。一つはにとり、もうひとつは椛である。

［早苗！そっちに異常な妖力を観測したよ！注意しておくれ！］

［早苗さん、シュウさんの下で偽物の妖孤が不穏な動きを見せています！注意を促してください！］

早苗はその二つの情報が異なる事を差しているとは思えず、嫌な予感が脳裏をかすめて顔をしかめた。そのためさらなる情報を求める事にした。

『了解、にとりは観測地点の座標を頂戴。それで椛、不穏な動きって？』

［何やら永遠亭の残骸と思われる木片に妖力を流しています…何を

しているんでしょうか」
『…とりあえず現地に行くべきかな。椛はそのまま待機、なにかあったら教えて』
「はい、了解です」
「早苗！座標送信したよ！ちょっと離れてるから急いだ方がいいかも！」
『了解！二人とも、情報ありがと！後は何とかするからにとりは仕事に戻って！』
早苗は通信回線を切ると送られてきた座標目指してウサギを蹴散らし駆けて行った。

―迷いの竹林・入口付近―

白玉楼を飛び出した妖夢は迷いの竹林の入り口に差しかかっていた。その頃になると前方で戦闘が行われているのが視認できるようになっていた。少し離れたところからは銃声が響いており、目を向けると巨大化した萃香が楽しげに地団駄を踏んでいた。…おそらく足元は大惨事であろう。
「あややや？妖夢さんじゃありませんか」
「いつぞやのブン屋…？」
妖夢は今まさに飛び込んでいこうとしたところで文に声を掛けられた。文は扇から手帳に持ち替えるとにやりと笑った。ちなみにその間も周囲には風が吹き荒れており、ウサギ達が宙を舞っていた。
「はい、清く正しい射命丸です！…にしても何故貴女がここに？白玉楼の防衛に居るんじゃ？」
「私はシュウの傍に居ないといけない気がするんです！」
「こんなときでもお熱いですねー」
文は半分あきれ顔でそう言うと背後を指差した。

「シュウさんなら今頃永遠亭の内部で大暴れしてるんじゃないですかね？」
そこまで言ったところで木々をへし折る音とともに轟音が響いた。ふりむくと竹林の方に巨大な柱が立っていて、その上に二人の人影が確認できた。
「…シュウ」
「あれもシュウさんですか。相変わらず規格外ですねー…。さっきから爆発音やらレールガンの音やら…」
妖夢は話が長くなる予感がしたので強引に話の流れを切る事にした。
「私行きますので」
「そうですか。道中のウサギは斬っちゃってくださいね。際限なく湧いてくるんで。ただ、『二度と出られないかも知れなくてもいい者以外は入るな』っていう命令が天狗には降りてますから相当危険だと――」
「危険だろうと行きますよ」
妖夢はそう残すと竹林の中へと駆けて行った。その様子を見た文は手帳に何やら書き込むと扇に持ち替え、一人ごちた。
「走らずに飛べばすぐに着くんですがねぇ…」

第八十章　傭兵と妖孤？

―永遠亭上空―

「…さて、こうして叩き落とした訳だが、この程度では済むと思えないな。にしては何の反応もないし、もしかして倒したのか？」

シュウは上空で永遠亭の残骸を見下ろし、一人考え込んでいた。はたして倒したのかどうか。そうしていると遠くから地響きのようなものが上空にまで届いた。振り向くと巨大な萃香が暴れている様だ。

「どうやらウサギたちはまだいるようだな。ちょっくら狩りにいきますか」

シュウは考える事を止め、ひとまずウサギ兵士を狩ろうと地表に向けて降下を始めた。その時になってシュウはようやく異変に気が付いた。

「…なんだこの妖力は？」

そう一人呟いた直後、周囲の木々がざあぁっと音をたてた。永遠亭の方を注視すると、藍の姿がなかった。

（しまった、やはり仕留め損ねていたか。ここで動揺を見せるのは得策じゃない…。まずは周囲の状況の確認だ）

周囲に満遍なく気を配る。そうして暫くの時間が過ぎた時、再び風が吹いた。今度は妖力の乗った風だ。シュウは風の来た方向を振り返り、直後背後に大きなチカラを感じた。

「ッ！？」

咄嗟に上空に避難する。すると先ほどまでシュウがいた空間で数十もの木片が衝突しあっていた。

「流石にこれはよけるか。まぁ、その程度の歯ごたえがなければ面白くもない！」

永遠亭の方から藍の声がしたかと思うと永遠亭は残っていた部分が一斉にバラけ、大量の木片へと化していた。それらの木片は皆一様にシュウの方に切っ先を向けており、その中心には藍がこちらを見据えていた。

「あぁ、そうかい。殺し合いを楽しめってか？」

「これほどの力ある者との戦いは久方ぶりなものでな。愉しまずにはおれないんだ。それは同じだろう？」

藍の問いかけにシュウは自らの血が沸くのを感じ取った。戦闘狂、と言う単語が脳裏をかすめる。

「そう、かもな」

「だったらとことん愉しむのが筋だろう？」

「生憎、遊びじゃないんでな」

シュウは口ではそう言いつつも口角が上がっていた。かつて戦場に居た頃の感覚がよみがえってくる。

「そうかい。それでは、こっちは愉しませて貰うさ」

藍はそう言うとシュウを指差して叫んだ。

「さぁ！宴の始まりだ！」

藍の傍に控えていた木片が散り散りに展開し、シュウを取り囲んだ。それらはある程度の塊を形成しつつ、ランダムにシュウを貫かんと攻撃を仕掛けてきた。必ず木片はシュウの死角から飛来するようだ。

（ちっ。かわせない事はないが、これではキリがない。少しずつ数を減らすべき、だな）

シュウはそう決心すると木片を一つ手で受け止めると同時に木片をチカラに分解した――ハズだった。

―ガッ―

「！？」

直後、シュウの身体を衝撃が襲った。確かに木片は分解されて姿

を消したハズなのに消えた木片に被弾したのだ。木片についていた式がそのまま妖力弾となって直撃した為だ。その所為でシュウは体勢を崩し、その間に別の木片がシュウの太ももをかすめ、皮膚を浅くさいた。シュウは吹き出す鮮血に顔を顰めつつも上空に退避していく。しかしその先には藍が待ち構えていた。

「シュウよ！さぁ来い！」

藍は左手に妖力を充満させつつ叫ぶ。体勢を崩し、ロクに身構えていないシュウは正面からぶつかっては勝ち目がないだろう。しかしシュウは右手を引き絞ると藍に向かっていった。そして両者が拳を振るう。拳と拳がぶつかる寸前、シュウは人差し指と親指を伸ばして藍の拳を指差しつつ、左手に隠していたスペルカードを発動した。

狙撃「スナイプ・バレット」

藍の表情が驚愕に染まる。藍の拳を差している指の先端から亜音速で銃弾が飛び出し、それは藍の拳と正面からぶつかり、貫いた。しかし、藍は咄嗟に軌道をずらした。そのため、拳を貫通した弾丸は腕を通らず、手の甲から飛び出して空に消えていった。もちろん軌道をずらしたため、その拳はシュウを捉えずにシュウを追ってきた木片の一つを砕くに終わった。予想外の展開に体勢を崩す藍。シュウはその背後に回って木片をやり過ごしつつ、距離を取って体勢を立て直した。

そうして永遠亭上空にて二人は再び対面することとなった。但し、今度は互いに鮮血を滴らせ、歪んだ笑みを顔に張りつけながら―。

第八十章　傭兵と妖孤？（後書き）

ついに八十章ですか。ながかったですね、ふりかえると。
まぁ、終わってないですが。
なんか気が付くとここ最近日付の一の位が０の日に更新してますね。
次回は二十日までに上げられればと。
（あくまで目安ですので）

第八十一章　傭兵と全力の魔法

シュウと藍が再び戦闘を開始してからしばしの時間が経過した。空は鮮血の如き深紅に染まり、夜の気配がすぐそこにまで迫っていた。そしてそれ以上に二人は紅々と染まっていた。

周囲の木片の一部は藍の妖術によって妖孤へと姿を変え、弾幕を放ってくるようになっていた。これらの妖孤はいかなる攻撃を加えても物ともせずに襲いかかってきていた。そして、妖孤の放つ弾幕にまぎれるように鋭利に折れた木片がシュウを襲っている。藍は度重なる式の打ち込みとそれらの使役に妖力を取られて疲弊してきていた。シュウは少なくない量の弾幕を受け、木片によってあちこちを切り裂かれていた。シュウは数え切れない式を撃ち落としていた。それが藍の負担になる事を理解していたからだ。

（藍は確かに疲弊してきている。だが、このペースじゃどっちが先に倒れるか…。ペースをあげる！）

シュウは式の包囲網を抜け出し振り返った。太陽が沈み、周囲がうす暗くなった。大量の木片が迫ってきている事を気配で察知する。それを確認するとスペルカードを発動させた。

火流「ラヴァトレント」

周囲に展開した魔法陣から火炎の奔流が溢れだす。それらは木片を残らず焼き尽くしていく。シュウはすかさず魔法陣を物質化させる。直後、式の妖力弾が魔法陣に直撃し砕けていく。炎が晴れる直前、大量の妖孤が待ち構えているのを照らしだした。

（っ！拙い！）

妖孤が一斉に弾幕を張る。全方位から隙間なく放たれた弾幕はシュウの視界を赤、緑、青などさまざまの色に染め上げていく。シュ

ウは半ばやけくそに最上級スペルを叫ぶように宣言した。
「どうにでもなりやがれ！『混沌「七色の恐怖」』！！」
宣言と同時に周囲に三本の竜巻が出現する。一本は圧縮され、鋭利になった風でカマイタチを起こしていく。二本目の竜巻は鋭利な氷塊を巻き上げ、内部をめちゃくちゃに切り裂いていく。最後の竜巻は炎を目いっぱいに湛え、全てを焼き尽くさんとする。
これらの竜巻は弾幕を吸い込み、ことごとく破壊していく。しかし、全てを撃墜できる訳ではなく、数発の弾幕がシュウを襲う。が、何発弾幕を喰らおうと、集中を切らそうとはしない。
暫くすると地面に漆黒の、空には白銀の巨大な魔法陣が出現した。直後、周囲に異常なまでの重力が掛かる。漆黒の魔法陣からは瘴気が立ち上り、その瘴気に妖孤達は引きずり込まれていく。そして瘴気に完全に呑みこまれる寸前、地面から岩石で出来た槍がそれらを打ち据え、上空へと突き上げる。上空では魔法陣のさらに上に生まれた雲が竜巻で掻き乱され、雷雲に成長していた。その雲に放り込まれた妖孤は雷の洗礼を受け、落下していく。
そこに追い打ちを掛けるように白銀の魔法陣から神威の光が降り注ぐ。強すぎる光は時に全てを焼き尽くす。そして光が強いほど影は濃くなり、一層強くなった引力によって瘴気へと妖孤が呑まれていった。

まるで地獄絵図の様な攻撃が終わると妖孤も消えうせ、魔法陣の形に木々の消えた竹林が残った。シュウは力を使いすぎた上に相当量の弾幕を受けて意識が朦朧としている。シュウの身体が重力に従って落下しようとした時、竹林に隠れていた藍が真下に現れた。彼女の顔は悄然としながらも勝者の笑みを湛えていた。
「私は、この時を待っていた…っ」
藍は式で網を編み上げるとシュウをその式で捕える。シュウが網に触れた瞬間、彼の身体は仰け反り、硬直する。その身体に電流が爆ぜる様な感覚が迸る。その衝撃でシュウの意識は半強制的に覚醒

した。
「これは、一体…？」
「ついに捕えたぞ…シュウ。よくも手こずらせてくれたな…」
藍がシュウを手に掛けようとした瞬間、二人の間に閃光が迸った
――。

第八十一章　傭兵と全力の魔法（後書き）

シュウの魔法系統の最強カードができました。

自分の感想としては、

どうしてこうなった。

相変わらずのやりすぎでしたｗｗｗもう毎度のことなんで今さら何をと言う感もありますがねｗｗ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0160u/

弾丸と幻想郷

2011年11月20日03時10分発行